

# 小野町史

民俗編

編集・発行 小野町

# 目次

題字 小野町長 秋田直孝

口 絵

小野町長 秋田直孝

凡 例

## 第一章 小野町の民俗

### 第二章 衣・食・住

はじめに

#### 第一節 衣生活

- 一 せんいと加工.....三
- 麻12 フジ13 木綿 13 生糸14 染色16
- 二 仕着の構成.....二七
- ヤマジバン17 スツポ18 モモヒキとカッサン21
- かぶりもの24 テッコウ27 履物27 蓑30
- 三 ふだん着その他.....三三
- ふだん着31 喪葬の服33 紋付・羽織33 寝具33
- 髪と化粧35
- 四 衣服計画と管理.....三六

#### 第二節 食生活

- 洗濯33 裁縫33
- 一 米と代用食料.....四四
- 主食42 カデ飯45 代用食47 その他50
- 二 副食物と調味料.....四五
- 副食物52 保存食品54 魚介類57 間食60 調味料61
- 三 ハレの食物.....四六
- 晴れの日の食べ物65 贈り物69 婚礼の祝膳70
- 仏事の食事74
- 四 食事とくらし.....四七
- 食事の回数と呼称74 食事の作法と道具76

#### 第三節 住生活

- 一 屋敷の占定.....八一
- 屋敷85 馬屋86 雪隠88 飲料水88 そりや90
- 風呂場91 エノメエ93 イナバ93 イグネ93
- ママカブ93
- 二 オモヤとくらし.....八四

- 三 すまいの諸相.....一〇七
- 佐久間茂久家107 先崎安昭家110 根本柳吉家113
- 藤井治家117
- オイヤ94 建物の吉凶102 建て方と用材の吉凶102
- 植樹の吉凶103 方位の吉凶103 火伏せと魔除104
- 建築儀礼105

## 第三章 人の一生

はじめに

### 第一節 産育と年祝い

一 産 育

#### (一) ヤマナシの習俗

- ハラミ122 帯祝い122 妊娠中の禁忌123 夫のつわり124
- 産の場所124 出産の方法125 別火125 産婦の食べ物125
- 安産祈願126 トリアゲバアサン127 難産の場合128
- 流産と墮胎128 後産129 へその緒129 カナクソ130
- 産湯130

#### (二) ヤヤの成長と祝い

- ウブメシと出産祝い130 乳付け130 便所参り130
- エナギ131 お七夜131 名付け132 橋参り132 枕ひき133
- オボダテ133 初宮参り134 食い初め134
- 初誕生と一升餅135 初正月135 初節句135

#### (三) 育 児

- エチコ136 子守り136 太子堂137 捨て子137 取子138
- 夜泣き138 その他の呪法138 虫除け・かけ呪い139
- (四) ワラシからイッチョウウメイへ.....三六

二年祝い

#### (一) 厄 年

- 厄年と昔話139 厄年140 厄年の心構えと認識140
- 厄払いの諸行事141

#### (二) 年 祝 い

- 還暦145 古稀145 喜寿145 米寿145 子供の年祝い146

### 第二節 婚 姻

#### 一 婚 礼

- (一) 婚礼の前段階.....一四七
- (二) 仲 人.....一五〇
- (三) 縁談の成立.....一五三
- 婚約151 結納152

#### 四 婚 礼

- 嫁入り153 中宿154 婚家に入る際の作法155
- 落ち着きの餅・三三九度・御引合156 披露157
- 床入れの問答159 村内への挨拶回り159
- (五) 嫁の里帰り.....一五九
- 二 婚姻の諸相.....一六〇

第三節 葬送と墓制

(一) 婚姻の形態……………二〇二

(二) 離縁・再婚・未亡人その他……………二〇二

一 葬送の手續き……………二〇三

二 忌服と供養……………二〇三

三 見舞と協力……………二〇三

四 葬に関する俗信……………二〇三

五 墓地の状況……………二〇三

(一) 吉野辺字滝……………二〇六

(二) 吉野辺字關場……………二〇七

(三) 吉野辺字遠上……………二〇八

(四) 萬蒲谷字萬蒲作……………二〇八

(四) 上羽出庭……………二〇九

(六) 南田原井字沼ノ平……………二〇九

(七) 和名田字松木橋……………二〇九

(八) 和名田字中……………二〇九

(九) 飯豊字西沢……………二〇九

(三) 飯豊字大日堂と新田内……………二〇九

第四章 年中行事

第一節 はじめに

一 吉野辺の年中行事……………二〇六

二 行事と日……………二〇七

三 曆法の変化……………二〇六

四 十六日以後の行事……………二〇四

十六日 十八がゆ 24 ハヨブチ 24 二十日正月 25

二十三夜さま 25 種稻交換 26 晦日正月 26

第二節 正月行事

一 正月の準備……………二〇一

セチ木こり 201 煤払い 202 松迎え 203 餅つき 204

セジ買い・セジ米 205 正月飾り 206 大晦日 207

二 正月の行事……………二〇二

正月さま 208 若水くみ 208 元朝参り 209 供物と食べ物 210

年始 211 占いと禁忌 212 初夢・初荷 212 万歳 213

棚さがし 213 山入り 214 七草 214 農のはじめ 215

三 小正月の行事……………二〇七

年とり 218 女年始 219 木ダango 219 稲の花 220

木マジナイ 220 ムグラ追い 221 カサドリ 221 鳥小屋 222

第三節 春から夏の行事

一 二月の行事……………二〇七

節分 227 初午 230 お八日 230 オヤツカイ豆腐 232

針供養 232 お正月さま 233 山の神 234 なんの神 234

二 三月・四月の行事……………二〇五

三月節句 235 初酉 236 東堂山の祭り 237 春の彼岸 237

四月八日 238 水口まつり 239

三 五月・六月の行事……………二〇三

五月節句 239 ナラの木立て 241 サナブリ 241

ムケノツイタチ 242 天王さま 243 夏越祭り 243

第四節 盆を中心とした行事

二〇四

一 七夕……………二〇四

七夕馬 24 七夕飾り 245 井戸払い・髪洗い 246

二 盆の準備……………二〇六

墓掃除 246 盆棚作りと灯籠立て 247 盆市と盆花とり 248

三 盆行事……………二〇六

仏さま迎え 248 墓参りと新盆まわり 249 仏さま送り 250

盆踊りとじゃんから念仏 250 天道念仏 251

第五節 秋から冬の行事……………二〇五

一 八月・九月の行事……………二〇五

ハツサク 252 二百十日 252 月見 253 九節句 253

切り替え祭り 254

二 十月の行事……………二〇五

刈りあげ 254 大根の年とり 255 エビスコ 255

三 十一月・十二月の行事……………二〇五

ダイシコ 256 油しめ十五日 257 冬至 257

カワツペイリツイタチ 258

第五章 生業

はじめに……………二〇九

第一節 農業

一 稲作……………二〇九

(一) 水田と集落……………二〇九

(二) 田の神田……………二〇九

(三) 農の始め……………二〇九

(四) 種籾浸し……………二〇九

(五) 苗代づくり……………二〇九

(六) 水口まつり……………二〇九

(七) 田作り(刈敷農法)……………二〇九

(八) 田植え……………二〇九

○夜苗提灯 74 ○ナラの木立てと三把苗 75

○小苗密植 280 ○天水百姓 283

(一) 雑草とのたたかい……………二〇九

(二) とりいれ……………二〇九

(三) 田の神……………二〇九

(三) 雷神信仰……………二〇九

二 畑作(畑作の伝承)

三 仕事着……………二〇九

四 農事曆……………二〇九

第二節 山仕事……………二〇九

一 山の幸(こころの励み)……………二〇九

二 山を育てる……………二〇九

三 伐採……………二〇九

四 運搬……………二〇九

五 木挽……………二〇九

六 鋸刃の大事(山樵の伝書)……………二〇九

七 炭焼き……………二〇九

(一) 木炭の種類……………二〇九

(二) 炭窯築き……………二〇九

(三) 煙と人生……………二〇九

(四) 炭山の怪談等……………二〇九

笠巻さんの話 313 横田さんの話 320  
笠巻さんの蛇ばなし 321

第三節 葉たばこ

福島県の葉たばこ 321 松川葉 321  
小野新町地方の松川葉 323 松川葉の由来 325  
松川葉の特性 326 たばこ作り 327 苗床から植付 327  
収穫 329 干し場 329 葉ノシ 330 ヤミたばこ 331  
ふくべ会 331 煙草神社 332 たばこ祭り 333

第四節 養 蚕

種節 336 蚕種 337 催青・掃立て 338 養蚕 338 上簇 340  
繭 342 種付 342 糸取り・販売 343

第六章 交通と交易

はじめに

第一節 交通・運搬

一 交通  
道 422 峠 424 道しるべ 426 馬車屋と人力車立場 428  
宿 430 馬宿 430

二 運搬

(一) 人力運搬  
荷縄 432 背中当て 432 ヤセ馬 432 背負いフゴ 432  
背負い籠 432 たがら 433 担ぎモッコ 433 天秤棒 433  
(二) 自然力運搬  
地ソリ 434 雪ソリ 434 地ぐるま 435 荷車 435 人力車 435  
(三) 畜力運搬

第五節 馬 産

馬に馬癖 344 癖のいろいろ 345 馬の病氣 348  
馬ソクライ 350 馬釜 351 ぶだの地藏さま 352  
馬かつぎ 352 東堂山 352 馬の夢 352 馬逃げた 353

第六節 諸 職

〔石屋〕 356 〔桶屋〕 360 〔かごや〕 364 〔鍛冶屋〕 367  
〔かなぐつ屋〕 373 〔下駄屋〕 375 〔麴屋〕 378  
〔コバ屋〕 380 〔左官〕 387 〔染屋〕 392 昔の染物の方法 394  
〔大工〕 395 〔畳屋〕 400 〔豆腐屋〕 402 〔とこや〕 404  
〔パーマ屋〕 406 〔はんこや〕 408 〔馬車ひき〕 410  
〔ブリキヤ〕 413 〔メタテ屋〕 414 〔レンガヤ〕 416

荷鞍の運搬 436 馬ソリと荷馬車 437

第二節 交 易

一 行 商  
薬売り 438 ワンヤ 438 ボテフリ 439  
二 市  
二日市 441 馬せり市 441 煙草市 443 まゆ市 443 とり市 443  
三 市 神  
四 出 買 い  
五 町 買 い  
木炭商 447 まゆ買 い 447 醸造業とのれん分け 448  
大正初期の町並み図 449

第七章 社会生活

はじめに

第一節 村の構造

村境 456 大字・区 458 屋敷と洞 459 村組 460 近隣組 459  
村役 464 村寄り合い 465 村休み 467 共有財産 471  
村仕事 473 道人足(道普請) 474 堰普請 474 山の仕事 475

第二節 互助組織

屋根替え・家普請 476 祝儀・不祝儀 477 ヌイ 479  
はよ繩ぶち 480 無尽・頼母子 481

第三節 年齢集団

一 年齢階梯集団  
二 子供組  
三 若者組  
一人前 484 加入年齢 485 加入儀礼 487 若者組規約 488  
機構 488 祭礼 489 農休日 491 宿 492 学習活動 493  
四 娘 組  
五 嫁組・主婦組  
六 老人組  
第四節 家と家族  
一 家族構成

第八章 信 仰

はじめに

第一節 民間信仰

一 氏神信仰

村氏神 557  
オブスナ神 558  
屋敷氏神 559

二 家族の機能

三 跡とりと二男・三男

第五節 相続・隠居・分家・養子

一 相続慣行  
相続の慣行例 502  
二 隠居慣行  
隠居する時期 504 閑居・中隠居 504 隠居田 504  
町場の隠居 505 隠居慣行の例 505  
三 分家慣行  
四 養 子  
第六節 雇 用  
奉公人と買ひ子の風習 509  
第七節 家と家・人と人との関係  
一 本家と分家の関係  
二 親方・子方関係  
親子なり 512 成年期の親子なり 513  
三 兄弟分関係  
四 同齡感覚  
五 家と贈答

二 家族の機能 555  
三 跡とりと二男・三男 556  
一 相続慣行 558  
二 隠居慣行 559  
三 分家慣行 560  
四 養 子 560  
第六節 雇 用 560  
第七節 家と家・人と人との関係 561  
一 本家と分家の関係 561  
二 親方・子方関係 562  
三 兄弟分関係 563  
四 同齡感覚 564  
五 家と贈答 564

四 氏神としての勸請神……………五三

(五) 氏神としての民間信仰の神……………五三

(六) 氏神としての仏……………五四

二 オシンメイサマ……………五三

神の呼称525 オシンメイサマの形態526 神の性格526  
シンメイ守子527 オシンメイサマの分布と現況527  
小野町に見るオシンメイサマの事例529

三 講……………五五

お日待講535 山の神講537 地神講539 庚申講539  
甲子講541 雷神講541 十九夜講542 二十三夜講543  
地藏講544 淡島講とその他の女人講544 念仏講545  
天神講546 恵比寿講546 太子講547 観音講・妙見講547  
代参講548 三山講548 古峰原講550 飯豊講551 伊勢講552  
金華山講552

四 石塔・石仏にみる民間信仰……………五五

(一) 日待信仰の供養塔……………五五

庚申塔554 甲子塔555 巳待塔556

(二) 作神信仰の供養塔……………五七

山神塔557 地神塔558 雷神塔558 水神塔・弁才天559

(三) 月待信仰の供養塔……………五九

十九夜塔559 二十三夜塔560

(四) 観音信仰の供養塔……………六一

如意輪観音菩薩562 十一面観音菩薩562 聖観音菩薩563

(五) 馬匹守護の供養塔……………六一

馬頭観音563 北辰妙見塔565 東堂山塔565

(六) 地藏信仰の供養塔……………六一

(七) 代参講中の供養塔……………六七

湯殿山塔567 天照皇大神宮568 金毘羅大権現569  
熊野三所神社570 飯豊山570

(八) 職人信仰の供養塔……………六〇

聖徳太子塔570 松尾大明神571

(九) 除病・除災の供養塔……………六二

疱瘡神571 午頭天王・八坂神社571 尾尾山571  
淡島大明神572 鬼子母神572 古峰山・金剛山573  
秋葉山573 不動明王573

(一〇) 經典供養塔……………六四

名号塔574 題目塔574 念仏供養塔574 光明真言塔575  
大乗妙典六十六部供養塔575

(一一) 万靈塔……………六五

(一二) 道しるべ……………六五

供養塔石仏の地区別・年代別分類表573~579

(一三) 道祖神……………六〇

(一四) その他の石塔……………六〇

宗吾靈神580 鴛鴦碑581 鳥獸供養塔581

五 絵馬と信仰……………六一

奉納絵馬……………六一

第二節 社寺信仰……………六五

一 神社信仰……………六五

神社……………六五

神社一覽(宗教法入神社・末社及部落神社)586~587  
鹽竈神社(明神さま)590 神輿渡御590 市神社(市神さま)591  
かいこ神さま(養蚕神社)591 羽黒さま(出羽神社)591  
浦安の舞591 取子592 矢大神さま(矢大神社)592  
矢大臣神社592 お稻荷さま(和久稻荷神社)593

天王さま(八雲神社)593 国治神社(皮籠石)593  
若宮八幡神社(八幡さま)594 愛宕さま(飯豊神社)594  
諏訪さま(夏井・諏訪神社)595 菅布林神社(浮金)595  
諏訪さま(上羽出庭・諏訪神社)596  
妙見さま(大倉・大倉神社)596 おこもり596  
たばこ神さま596

二 寺院信仰……………五七

真言宗……………五七

菩提山極楽寺598 無量山光明寺599 医王山東光寺599

浄土宗……………六〇

東堂山満福寺600 光明山無量寺601 一庭山松縁寺602  
小野山専光寺602

臨済宗……………六三

牧牛山普賢寺603

曹洞宗……………六五

吉西山保泉寺605 金峰山月叟寺606 電光山雲林寺606  
源松山洞円寺607 靈龜山吉祥院607

三 東堂山信仰……………六八

(一) 縁起……………六八

(二) 東堂山参り……………六九

(三) 東堂講……………六三

四 東堂山と小戸神……………六六

第三節 俗信……………六六

一 予兆……………六三

(一) 自然現象による予兆……………六三

(二) 動植物に関する予兆……………六三

(三) 人間に関する予兆……………六五

(四) 偶然的出来ごとによる予兆……………六六

(五) 夢による予兆……………六六

二 禁忌……………六七

(一) 妊娠・出産にしてはならないこと……………六七

(二) 土地や物の禁忌……………六八

(三) 忌まれる行為……………六八

(四) 農作物の栽培の禁忌……………六九

三 まじない……………六九

(一) 呪文……………六九

(二) 代用・医療に関するもの……………六九

(三) 流行病など……………七〇

四 占いと占師……………七〇

(一) 占い……………七〇

(二) 占師……………七〇

第九章 ことばと伝承……………七〇

はじめに……………七〇

第一節 伝説……………七〇

地域の特色640 種口の館642 夏井の七不思議643

橋供養643 五輪塔644 博打石644 長持石644 萱立て場645  
大力の弥五惣646 金の鶏647 八節647 雨降り石647  
廣金吹き647 稻荷神社648 二名水648 半みち桜648  
火伏せ地藏648 化物地藏649 田村右馬介649 馬番649

蛇ねぶり石 650 鏝千し石 650 埋めた宝 650  
 デンスケ坊の祟り 651 雷さまと鶴 652 カワゴ石 652  
 小野篁 653 菖蒲姫 653 弥左衛門橋 654 小治郎 654  
 赤沼の地名 655 鴛鴦の死 655 ゴンボ猫 655 泣き釈迦 656  
 のぶの地蔵 656 黒森城 657 うわばみの角 657 羽生の桜 659  
 生埋壇 660 法印さまの祟り 660 駒ころばし 661  
 河童の恩返し 661 南泉院の怨念 662 片目の竜 663  
 腹切りつつじ 663 力試しの石 663 腰掛石 663 今水 664  
 明神さまのお使い 664 浮金の地名のおこり (一) 664 (二) 665  
 小戸神の地名 665 金掘り山 665 ウキヨウ壇 665 念仏壇 666  
 片葉の葎 666 石の花 666

第二節 昔ばなし

話型とかたり手 667 大師講団子 672 くくり頭巾 673  
 貉の化物 674 地蔵の贈りもの 675 ブツ鹿鹿 676 節買い 678  
 地蔵と団子 680 半殺し 682 化物退治 683 初夢 684  
 狐のお産 686 三枚のお札 687 舌切雀 689  
 ビビコヨドリ 691 三人旅 693 サンリンボ 693  
 貧乏人と金持 694 団子婿 694 へえぼ太郎 695  
 カチカチ山 698 地蔵になったじいさま 702 雷隠神 703  
 煤け行灯 704 お諏訪さまの年取り 705 猿婿入 705  
 へやのおこり 709 お大尽のいわれ 710 金神の荷物 710  
 花咲爺 712 寝子ひつぱり 715 尻売りじいさん 716  
 溜取りじいさま 717 糖福と紅血 719 話型対照一覽 722

第三節 民謡

〔田歌〕…………… 七五  
 田植え歌 725  
 〔庭歌〕…………… 七五

てんてんてん 744 高い山から 744 お正、お正月 744  
 正月や 745 一かけ二かけて 745 一番はじめは 746  
 伊勢・新潟 746

〔お手玉歌〕…………… 七五

おひとつおひとつ 746 おさらいおひとつ 747  
 ちりちりばんばん 748

三 遊び歌(一)

〔縄とび歌〕…………… 七五

一人きな二人きな 749 ひとこにふたこ 749  
 一はぐり二はぐり 749 ヒーヤフーヤミシカイカイ 750

〔手合せ歌〕…………… 七五

丸山土手から 750

〔鬼きめ歌〕…………… 七五

中の中のお地蔵さんは 750 落とした落とした 750  
 うっちこたうちこ (一) 750 (二) 750

〔子取り遊び歌〕…………… 七五

花いちもんめ 751

四 歳時歌…………… 七五

正月ちゃんいもんだ 751 風、風あがれ 751  
 一月は門に門松 752

五 はやし歌…………… 七五

〔口遊び歌〕…………… 七五  
 かすかすかすかすかすかすか 752  
 からすかすかすかすかすかすか 753 三王堂の桜の木 753  
 つかなる寺にも 753 ぶじやの池に 753

〔手遊び歌〕…………… 七五

餅搗き歌 225 (練り歌) 725 (搗き歌) 725  
 〔山歌〕…………… 七六  
 木挽歌 726

〔業歌〕…………… 七七

洞突歌 727

〔遊び歌〕…………… 七六

東堂山節 728 盆踊り歌 728 文助あんや 729  
 センセ踊り 730 角力甚句 730

〔祝い歌〕…………… 七三

さんさしぐれ 731 松坂 731 めでた 732

〔座興歌〕…………… 七三

大津絵 732 ドンドン節 733 おいとこ 733

第四節 わらべ歌…………… 七五

一 子守り歌…………… 七五

〔眠らせ歌〕…………… 七五

ねんねんころり 735 ねんねこどっちゃん 735  
 泣くな泣かすな (一) 735 (二) 736 ねんねこねんねこ 736  
 ねんねろ猫の尻 736 ねんねんころりよ 736

〔遊ばせ歌〕…………… 七五

守りほど案なようで (一) 737 (二) 737

二 遊び歌(一)…………… 七五

〔手まり歌〕…………… 七六

てんじくのてんじく 738 おえんえんえん 739  
 おちのおばさん 739 とんとん殿様 (一) 739 (二) 740  
 向こう通るは 740 お万小万 740 明日はやなぎだの 742  
 そごどんぶり 742 一つ二つ御身が三つ 743  
 おちが娘は (一) 743 (二) 743 娘十六七 744 お寺の前さ 744

第五節 ことば・なぞ・ことわざ…………… 七五

〔尻とり歌〕…………… 七五  
 こは手つくひ手のひら 754 ここの毛足のが 754  
 ききき きじりうへ 754

一 ことば…………… 七五

(一) 命名…………… 七五

①植物名 755 ②地名 758 ③家名 761 ④人名 762

(二) 日常生活用語…………… 七五

①あいさつ 764 ②ほめ言葉、くさし言葉 765  
 ③掛け声など 765 ④職業語 765

(三) 方言…………… 七五

言葉の部…………… 七六

〈天文・地理の部〉 768 〈動植物の部〉 769  
 〈人倫の部〉 771 〈衣食住の部〉 773 〈人事の部〉 774  
 〈その他の部〉 774

語法の部…………… 七五

① 動詞…………… 七五

② 形容詞…………… 七五

③ アクセン…………… 七五

二 なぞ、ことわざ…………… 七五

(一) なぞ…………… 七五  
 小野町のなぞ 738  
 (二) ことわざ(謎)…………… 七六  
 小野町のことわざ 738

第十章 民俗芸能

はじめに…………… 〇一

第一節 神楽…………… 〇三

獅子神楽…………… 〇三

一 三川の神楽…………… 〇四

二 田行の神楽…………… 〇二〇

三 田原井の獅子神楽…………… 〇三

四 廃絶した神楽…………… 〇四

(一) 湯沢の神楽…………… 〇五

(二) 葛蒲谷の神楽…………… 〇七

第二節 田楽…………… 〇七

田植踊り…………… 〇七

新田内の豊年田植踊り…………… 〇八

第三節 風流…………… 〇四

羯鼓獅子舞…………… 〇五

一 小野の獅子舞…………… 〇六

(一) 新田内長獅子…………… 〇六

(二) 小野大倉の獅子舞…………… 〇七

二 浮金の小獅子舞…………… 〇八

第十一章 民俗知識

はじめに…………… 〇七

第一節 民間医療…………… 〇八

一 家庭療法…………… 〇九

二 呪的療法…………… 〇七

第二節 生活の知恵…………… 〇六

一 心意現象…………… 〇六

三 湯沢の獅子舞…………… 〇二

四 廃絶した獅子舞…………… 〇三

(一) 三王堂の獅子…………… 〇三

(二) 上羽出庭諏訪神社の獅子…………… 〇六

念仏踊り…………… 〇六

上羽出庭のじゃんがら念仏…………… 〇三

第四節 童戯…………… 〇六

一 軒場遊び・庭遊び…………… 〇七

おひとつ 867 まりつき 868 おきしやこ 868 あやとり 868

おひなごと・はんそつば 869 竹返し 869 大ます小ます 869

外遊び・辻遊び…………… 〇九

ばったんまわし 870 どんもんのり 870 べったぶち 870

風上げ 871 ねんがらぶち 871 独楽まわし 871

炭窯づくり 872 がんぎん棒 872 タガまわし 872 鬼ごと 872

かくれんぼ 873 石けり 873 国とり 874 ぶんどり 874

つき鉄砲 874 めつけくら 874 通せんぼっこ 874

ハンカチ落とし 874 中の中のお地藏さん 875 猫もらい 875

地藏つけ遊び 875 その他の遊び 876 口遊び 876

第十二章 民具

はじめに…………… 〇三

第一節 生活の用具…………… 〇四

一 衣と生活…………… 〇四

(一) きる・はく・かぶる…………… 〇四

着物類 904 はきもの 905 かぶりもの 905 雨具と防寒具 905

(二) 結髪・化粧…………… 〇六

(三) 裁縫・洗濯…………… 〇六

二 食と生活…………… 〇七

ながし・台所…………… 〇七

貯蔵 909 炊事 909 調理・調整 910 保存・加工 911 嗜好 911

飲食物 911

三 住と生活…………… 〇九

(一) いろり…………… 〇九

(二) 暖房具…………… 〇九

消えたちようちん 893

〔憑き物〕…………… 〇六

狐の話 893 たばこを付けたら狐が逃げた話 894

狐の御祝儀で供え物へ手をつけなかったオイナリ様 894

狐の仕返し 895 狐火 897

二 生活の知恵…………… 〇六

時を知る 898 天気を見る 898 嫁泣かせの天気 898

井戸と水瓶 899 風呂水 900 半道桜(はんみちざくら) 900

いろり 900 土蜂掘り 901

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

消えたちようちん 893

〔憑き物〕…………… 〇六

狐の話 893 たばこを付けたら狐が逃げた話 894

狐の御祝儀で供え物へ手をつけなかったオイナリ様 894

狐の仕返し 895 狐火 897

二 生活の知恵…………… 〇六

時を知る 898 天気を見る 898 嫁泣かせの天気 898

井戸と水瓶 899 風呂水 900 半道桜(はんみちざくら) 900

いろり 900 土蜂掘り 901

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

消えたちようちん 893

〔憑き物〕…………… 〇六

狐の話 893 たばこを付けたら狐が逃げた話 894

狐の御祝儀で供え物へ手をつけなかったオイナリ様 894

狐の仕返し 895 狐火 897

二 生活の知恵…………… 〇六

時を知る 898 天気を見る 898 嫁泣かせの天気 898

井戸と水瓶 899 風呂水 900 半道桜(はんみちざくら) 900

いろり 900 土蜂掘り 901

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

〔幽霊〕…………… 〇九

六地藏と幽霊 890 オサノ姉の幽霊 891 叔母の幽霊 891

子どもを抱えた女の人 891 しらせ 891

淋しさに追いかけられた話 891

医者迎えの自転車が進まなくなった話 892

ランプへ飛んで来た小鳥 892

〔光りもの〕…………… 〇九

〔妖怪〕…………… 〇六

淋しいところ 888 小豆洗い 889 チャワンコロガシ 889

一貫清水 890

八 漁 撈	六三	一 計量具	六六
第三節 運搬用具	六四	二 計量具	六七
一 一人力	六四	三 商 い	六八
(一) 肩担	六四	引用参考文献目録	
(二) 背負い	六五	話者協力者名簿	
(三) 腰提げ	六五	小野町史「民俗編」執筆分担一覧	
(四) 手持ち	六五	小野町史編纂委員会委員	
二 そりと車	六五	小野町史編纂委員会専門委員	
三 畜力	六六	小野町史編纂委員会調査協力員	
第四節 商いの用具	六六		

## 第一章 小野町の民俗

小野町は、今から一二〇〇年前桓武天皇の御代に、征夷大將軍として坂上田村麻呂がこの地に赴き、いわゆる蝦夷地といわれた地帯に大和の新しい文化をもたらした。殊に救民撫育使として、小野篁がこの地に来て、産業、文化が伝えられ、今日ある小野町の産業、文化の基をなしたともいえるという伝承史実は、今の小野町の人々の間でも語り継がれていることである。

位置としては、阿武隈山系の南部、田村郡の東南部にあり、四方は山岳に囲まれ、丘陵地帯であるといえよう。

町の中央を、夏井川が流れその流域に沿って、市街地及び多くの集落が出来ている。それに注ぐ支流には、阿武隈高原中部県立自然公園の山裾から、小野山神、皮籠石を過ぎ、小野新町地内で、本流夏井川へ合流する車川があり、黒森部落の背後の山地から流れ出て、菖蒲谷、小野赤沼を過ぎ小野新町中通地内で夏井川へ注ぐ黒森川。

雁股田から流れ出て、塩庭、百目木、松太郎内、寺谷津作を過ぎて夏井川に合流する十石川。この十石川へ宮ノ前地で注ぐ、平田村沢名から出て、上羽出庭、永志田、河和久、折ノ内を流れる小河川などがあり、いずれもそれらの河川の流れに沿って耕地が開けている。

川に対して山は、北口に郡山市と船引町、小野町との境に黒石山(八九六)があり、船引町、大越町、小野町を境とするところには高柴山(八九四)があり、その尾根を東へ約二キロの地点には風越峠がある。

西口郡山市と接するところに一盃森(八五五)がある。

南西の地点、石川郡平田村との境には十石山(七一八)があり、更に東方いわき市、滝根町、小野町こゝも三叉の境界に

矢大臣山(九六四)がある。

これら、九〇〇・八〇〇・七〇〇級という山に他市町村との境が囲まれたかたちとなるが、町内に入っても西北の地点



## 第二節 山仕事

### 一 山の幸（こころの励み）

山国の野良稼ぎ地帯は、山とのかかわりなくしては、自給体制がなり立たない。山の幸は耕地の狭さを超えて、生活圏の機能を充実し、拡大してくれる。住居の用材、田畑の養ないの刈敷、牛馬の牧草、干し草、肥土の落ち葉、燃料の薪炭、チップ原材、枕木、電柱、山菜、工芸加工材料、木の実、鉱物資源、水資源など、豊かな山の恵みに浴しながら、人びとは生きている。

当町は山国といっても、重畳する丘陵地帯で、深山幽谷ではないから、特殊な「山ぐらし」の山樵業者はいない。そのかわり、たいていの地区で、一人の話者から稲作り、畑作、山仕事、ことに炭焼きなど、多様な経験伝承が聞き書きできさる。

山を背にして、屋敷つづきに山に囲まれた田圃と畑がある、という環境である。素足で結びゾリを履いて、平気で山に草刈りにのぼる。馴れたとはいいい、他所者にはみえて危なかしい。山も安易な田畑仕事場の圈内という、親しい感覚である。

杉木立の山麓の突端に鳥居がみえる。参道の爪先登りの木の根坂をのぼりつめると、頂上の御神木のうっそうとした巨木の下に、小さな祠がある。村の草分け始祖にかかわる氏神である。村びとの信仰のささえがあり、山そのものから人びとは啓示をうけ、生業に励み、代々生き栄えてきた。そして、山に来世を観念し、しずかに山に還ってゆく。山と人生のかかわりは深い。山に直面して生きているから、自然の折り目を感じ、山の表情をみて自分の内面をみつめる。山が人び

とこのころとからだを確りと支えてくれる。物事に耐え忍ぶ逞しさは、山国特有の気質に養われてきた。山の幸、山の恵みにそこに住む人びとのこころは潤おう。

### 二 山を育てる

八十翁が山に杉苗を植えていた。自分が存命中に伐るあてもないことなど、さらさら念頭にない。「孫のために植えておくべ、おれも爺さまの植えた木を伐ったからな」と、淡々とした心境には心打たれた。いのちをうけ継ぐところに山は育ってゆく。「孫の森」である。毎年収穫できる稲作とちがひ、杉は三十年、四十年、松は五十年、六十年はかかる。地拵え、植え付け、下刈り、補植、雪折れでまた補植、間伐、植えて二十年でまた雪折れ、それでもまた植える。執念の汗の努力が山を育てる。緑化の陰に人間のひたむきな生命力が山に注がれている。緑の山から水が湧き、源泉の一掬が谷に落ち合って里の田に流れる。山が育てば稲も人間も育つ。

雑木を皆伐する。これは植林のための地拵えであるが、一見緑の破壊である。植えた苗が緑に繁るまでの十年間、山を仰ぐ人びとは神に祈って山の安全を願う。

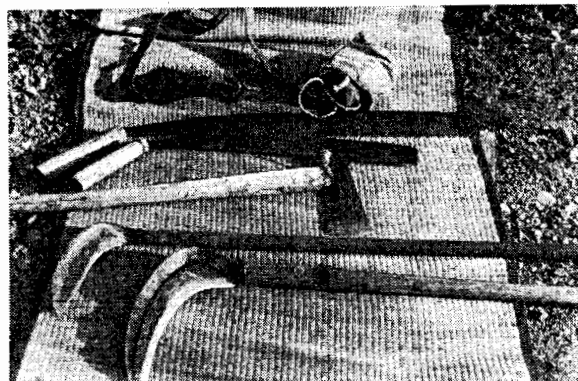
唐楸で五尺おきに穴を掘り、杉は一反歩三〇〇本、松は四五〇本植える。春植えは干魃で枯れ易いので、入梅どきか秋植えがよい。穴に落ち葉や枯れ草などが入ると、苗の根が乾いて枯れてしまう。丁寧に根を土に密着させなければならぬ。松は嶺がよいが、乾くので、一畝起こして土塊をほごさず直ぐその穴に苗を入れて植える。松は自生苗が丈夫で繁茂するので、嶺の種松は二本か三本は残しておく。下刈りのとき、小さな自生松を大切に残しておく、却って植えた苗よりも育つ。

## 第5章 生業

四月植え、八月の暑いときに毎年下刈りする。蜂の巣、マムシなどに襲われる。励む人は六月と九月の二回下刈りする。成育が良い。杉苗は植えて三年くらいのうち、冬の積雪期に野兎に芯を食い荒されるので、補植しなければならない。



鋸 す り (高蒲谷)



山仕事の道具 (飯豊)

尺を当て、木割り表をみて原木に鋸印をつける。ことに、柱や土台木などは、大きすぎる原木からとったのでは、製材機で削ると弾力のない、ツヤなしの糠肌になってしまう。目につく柱などは、いくら雑布で拭いてもツヤがでない。第一、木質で最も強い表層部をバタにしてしまうのは不経済であり、愚かな木取り職人の不手際といわれる。ギリギリ一杯の原木でとるのが、熟練元山の腕前である。

ヌキ、タルキ、ツカ、サスなどは主要材の余り部分でとれるものが多い。

先年の着雪折損被害は甚大であった。植えて二十年という、もう手がからなくなり、あとは伐採期を待つばかりの杉、松が、全滅となった。自然の暴威の前に、人間の意欲のいとなみが試される。

植林の成育は山の立地条件によってちがうが、たいていは七年か八年で下刈りを終わり、十年すぎると下枝を打ち、蔓を切る。十五年たつて間伐する。どれを残しどれを抜くかに迷う。一本一本に愛着があるからである。

「間伐は他人を頼め」といわれる。容赦なく邪険に抜かないと、どの木も役に立たない細木になってしまう。このころになると杉や松と対話ができる。山にゆくのが楽しみになって、こころが充たされる。山の空気は良い。すくすくと天に向かつて伸びる杉をみて、人間の生き甲斐を感じる。八十翁が山に木を植える心境がよくわかる。

### 三 伐 採

伐採は主に專業の先山(元山、柚)による。しかし、半農半樵ともいえる山国の人びとは、建築用材、薪、枕木、茸のホタ木など、あまり大木でないものは、鋸のメタテ、齒ぞろい(打ち出し)など、炭焼きで心得ているから、素人でも伐採できる。中には、奥がかつた山の木は、角とり斧で並材の四寸角の柱、土台材などの角物とか、四六のヒラなどに削り落とし、夕方二丁も背負って帰る人もいた。

たいていは元山といわれる專業者の仕事である。元山親方には二、三人の弟子がいる。建築用材の場合は、大工棟梁の作製した「木割り表」によって伐採し、木取りするたびに木割り表に覚え印をつける。

枕木は官地を払下げて伐ることが多い。長さ七尺の六寸に八寸の平角に角とりして、馬車道まで背負い出す。山の木を伐るのには、山入りして仕事始めに山太郎といわれる、その山で一番大きな木にシメを張り、オミキ、頭つきの魚、塩、水を供えて山神をおがみ、山仕事安全を祈願する。伐採には、山の傾斜具合、枝のかぶり、風向き、集木の都合、相手の位置などに充分気配りする。

木目(年輪)ものは、立木の素姓でわかる。根切りしてみても予想に反する場合は、梁材などに回す。そのために、人目につき主要材を先に伐り、梁材などは後まわしに伐る。原木の太さ、伸び、木質を直感して、いかに無駄なく、有効に一本の原木を使いこなすかは、元山の技量次第である。弟子は親方の口頭しつけよりも、経験を積んだ行為技術を、からだでもすみとってうけ継ぐ。

元山は上棟式の祝宴には最上位の席に座る。大工棟梁はその次の席に座るのが作法である。

「元山様」といって山神に擬される。これは充分意味のあることである。

伐採について、飯豊の渡辺さんという熟練者にお会いして、聞き書きする機会に恵まれた。大きな立木を伐採するのは、場所によって「吊し木」という方法できる。根元から寸法をはかり、命綱を腰につけ、「セミ」という滑車でからだを吊り上げ、上の方から鋸で枝を落としながら、幹をきってさがる。

地面において最後に根ぎりするという方法である。神社仏閣、人家、道路、電線などの隣接地の立木は、この方法でないと伐採できないことが多い。危険を伴う離れワザである。

鉄道の枕木は、栗材で、ヒラ角にして出した。チップ材は六尺二寸長さで、立木一本で三丁とれる。茸のホタ木は楢クヌギで、直径二寸から四寸まで、長さ三尺。これは土ゾリで山出しする。

チエンソー時代になっても、命をかけた斧や大小の鋸、矢、尻当て、ヤスリ、砥石などの仕事道具を大切に保存している。

## 四 運 搬

伐採した丸太材を、山麓にトビで集木する。これは「山出し」の仕事である。林道以前の木材搬出には、小さな山なら人力で、馬車や車のきくところまで土曳きするが、大きな山では道をつけ、枕木を敷いて土ソリで曳く。沢渡しや雪の急な下り坂は危険である。

昭和になり、馬や牛で曳き出すことが多くなった。鉄製のブッタテを丸太の芯に打ちこみ、頑丈な鎖をその鉄輪にかけて、牛馬に土曳きさせる。道路脇に集木したものを、馬車ひきが製材工場まで搬出する。

元山、山出し、馬車出しなどの賃金算出は、「才勘定」である。材木の長さ十二尺の一寸角が一才、尺角末口で一石ある。この搬出賃金は、山師が山主から立木を買う際に、現地の状態から逆算して、その分を値引きすることになる。つまり、道路から離れて不便な地の利の山ほど、木代が安くなるわけで、伐採してすぐ馬車や車にのせられる便利な山は、その運搬賃だけ高く売れることになる。その扁差も、林道開設によって平準化されつつある。

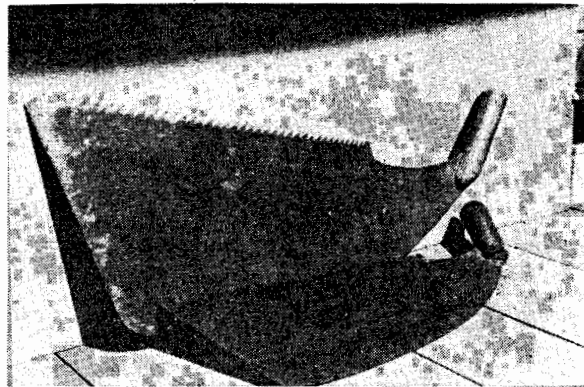
伐採地から道路の貯木場まで運ぶ木材を、山師から頼まれた「才とり」人夫が、各人ごとに一々木材の末口にモノサシを当てて測る。「ギョクトリ」などともいう。その石数の集計が出し夫一日の賃金である。出し夫たちは、すこしでも太くて長いものを選ぶ。石数に上がるからである。太い材木ほど石数の割に軽くて、手間が省ける。表面の面積の多い細物ほど重量で、ロープかけやカスガイ打ちの手間がかかる。

炎天下では勿論、酷寒の日でも汗を流す山出し人夫にひきかえ、道にただ立って一日中「才とり」をして記帳している人は、どんなにか楽であろうと思っていたが、当人がいうには「こんな重労働はない。小便が真っ赤だ」といった。不動の緊張は心身に毒なのである。

## 五 木 挽

木挽は、丸太材を板や割り物、垂木、貫、天井のサオブチ、ダイワなどに縦挽きする。割り物は、戸、障子、ふすま、欄間、家具などの指物用である。

新築する屋敷の日向などに陣取り、リンという木枠を組み、丸太を立てかけ、カスガイで固定し、墨をつけ、仰向けにマエビキという幅広い縦挽きの大鋸で、頭から挽き下げる。



マエビキ (小野赤沼 出羽神社奉納の大鋸)



伐 採 (矢を打ち込む)



木 出 し (塩田訓雄蔵)

鋸の刃道が狭くなると、クサビを打って通りをよくする。普通、板物は長さ六尺三寸、幅六寸ものが標準単位で、これを三間挽くのが一日一人の仕事量とされた。三十枚である。熟練者は五間から六間も挽いたが、中には二間しか挽けない未熟者もいたという。体力と、刃立て、要領の技術の差である。

山から搬出できない大木は、其処にリン場をつくって挽き、軽くして運んだ。帯戸という、座敷と居間の仕切り戸に、三尺の一枚栗板を使っている家がある。現在は合板と見過られるので、家主は外来の客に、一々先祖と木挽の苦勞話を語り、一枚板であることを説明している。合板以前は、人の目を惹く豪勢の象徴であった。家誉め、家自慢は一世一代の新

築の社交常識であるが、そのとき語られるのが一枚帯戸の材木の出た山と、木挽の名前である。

板橋の渡り板や、舟材、家を曳くコロ板などの長ものは、リン台に乗らないので、地面の平台の上で横挽きする。これはよほどの熟練者でないといけない。

小野赤沼宮ノ下の出羽神社(社堂先願)の選擇殿には、小野町仲町の住人石井宗七という木挽の用いた、大鋸二丁が奉納されている。刃渡り六〇センチ、幅三一、五〇センチと、刃渡り四六、五〇センチ、幅二一、三〇センチのマエビキである。木挽生活六十年八〇歳で、昭和三十五年出羽神社選擇殿造営を最後の仕事納めとして、大鋸を奉納したという。

## 六 鋸刃の大事(山樵の伝書)

山樵の秘蔵する伝書に「鋸刃の大事」ということが書いてある。原文はかなり長文なので、抜萃する。

山元

本山 元祖之巻

木挽

夫大日本中津国大山祇命天地陰陽開具中神座国常立尊

云次天神七代初二柱之御子高龍神次火雷神次大山祇云

春三月大東夏三月南秋三月西冬三月北土用則大角大山祇

御子此花開耶姫命二女稲姫命大山祇十二月主天皇照皇

太神宮宜本朝伊津国三嶋郡天降留座大日本主勝山祇十二

之以穗七難即滅守息災延命人皇十二代垂仁王八年伊勢国

山田郡伊冷川水上 天照神宮建立時山度姫命宜山王猿田

彦命宜伊豆国三嶋郡山神宜申イヌ川祭嫡 山安全成サシ

メ云云夫從山之神宜山者三而三龍三成アラ陽龍陽刀利陽

立引伝其則天二十五神天降其体鋸木引成賜ト云云

一、臨場之事

幣帛以七五三之注連核

其時唱文曰

三種大萩無上靈宝神道

加持七返

臨場取品品伝口伝有臨場柱二柱之御神台者国常立尊

鋸刃之大事

第一番之刃ト成賜御神者

一、熱田大明神 本地薬師

- 二、諏訪明神 本地薬師
- 三、廣田明神 本地勢至
- 四、氣多明神 本地弥陀
- 五、氣比明神 本地大日
- 六、鹿島明神 本地十一面  
聖徳太子
- 七、天満宮 同十一面
- 八、江文明神 同文殊辨財
- 九、貴母明神 同不動
- 十、天照太神宮 同大日
- 十一、八幡宮 同弥陀
- 十二、加茂明神 同聖観音
- 十三、大松尾神 同毘娑屋西
- 十四、大原神 同薬師
- 十五、春日社 同不空羅索
- 十六、平野社 同聖観音
- 十七、大比処明神 同釈迦
- 十八、小比処明神 同薬師如来
- 十九、聖真子権現 同弥陀
- 二十、客人明神 同十一面観音
- 廿一、八王子明神 同チノキ
- 廿二、稻荷明神 同如意論
- 廿三、住吉明神 同聖観音
- 廿四、祇園明神 同薬師如来

廿五、赤山明神 同地藏菩薩  
如此天降我先刃二刃須之如並  
即木椀成就賜ト云



此処肉有ヲ肉刃ト云  
キラウナリ  
刃先ヨリスコシユクリ  
サクルナリ

鋸之大事

- 一、やわらかな木ハえくりかかりにするなり
- 一、けやきのきは里ん<sup>こ</sup>搦いかかりなしにするなり
- 一、さきの七枚手かけ夫よりすこしづつかけ元より五、六枚ハかか里なしにするなり
- 一、かたきわさわしてするなり
- 一、わりはあせ里を婦かくし但しあせりとは刃をふるなり
- 一、せの毛るハあしし
- 一、ぬき行は向い五里んつめるなり
- 一、はなわりハ手をゆめしながら引こむなり
- 一、せをする時ハ大指をもってゆるなり

- 一、鋸直之様但し木を立木の小口にて打直し元刃より三寸内は一のこ志とゆふ二のこ志よりさきにくるいあらば見合打つち一トツニツとは無用又刃の直し様とき刃をば土にてかくしちぎ刃をすみの火にてあかくなるほどなますなり
- 一、ぬきさんかまちはくれむかふ刃三枚にて拵なり
- 一、中割物ハ始にてもとをさげのちにむかふをひきさくる
- 一、あらすの直し様の事ハ土あな耆尺式寸の深さ此内下六寸五分すかし直なる木を式本渡し其上二鋸を置き木くつ式置夫に火をつけてなますなり

(以下略)

以上は伝書の一部である。これに「斧立之事」がつづく。山神の祭り方、幣、神酒、神饌(註三)、祝詞、呪言、それに三つまた枝の太木が図示してある。山神の御休み木である。斧、弓二張の図があり、

千早婦る神の取木によきたてて

元の取木にたかひゆくかな (返三)

婦とさた津あから山にふなき伐り

木にすりか以りあたらふなきを (返三)

という祭り歌がある。「上棟神祭祀詞」もあるので、元山の親方は前記の通り大工の棟梁よりも上位であった。伝書を油紙に包んで、常に親方は胴巻に蔵っておき、潔斎して山入りし、難場にかかったり、大事な仕事に従事するとき、それを身につけていると、気持ちが高確りして、精神が集中するという。

## 七 炭 焼 き

### (一) 木炭の種類

山の雑木の面積は広い。木炭製産は重要なくらしの道であった。たいていの家で副業に炭を焼いた経験をもち、現在も焼いている家はかなりある。

木炭には白炭と黒消し、鍛冶炭などの種類がある。白炭は中身は黒いが、表面皮がなく、白い粉がついていて、叩くと金属音のする堅炭である。アカメともいう。これは、窯から真つ赤な状態で出し、スパイをかけて消す焼き方である。黒消しは、火が回ると窯を密閉して蒸し焼き、時間をかけて消し、窯が完全に冷めてから出す。炭に焼皮がついている。表面が黒い。

白炭は、火付きは遅いが、火力が強くてなが持ちする。上等炭はつかんでも手が黒くならない。火鉢の火箸が曲るほどの火力である。

黒消しは、火付きは早い、火持ちは短い。炎の出るのは悪い炭である。イモリ炭といって、腹だけ赤くて背が黒い炭は、熱量の低い炭で知られる。自分本位の情弱者の焼いた炭である。窯にも欠陥があると、このような等外炭になってしまう。炭は人間のねうちをあらわす。

白炭は石窯で、日窯といつて一日に焼き上がる。窯の規模は小さく、一窯八貫俵で六俵くらいである。黒消しの窯は土窯で、構規模が大きい。一窯十日くらいかけて、四〇俵から五〇俵を出す。大正の中頃、石川郡の大竹亀蔵という人が考案して普及した。大竹式製炭法である。これにも改良が加えられた。大竹式よりも南部式が効果的である、と、木炭検査員であった飯豊の渡辺さんなどはいっている。

鍛冶炭は、古くは露地を掘り、栗の枯れ木を詰めて燃やし、土をかけて蒸して炭を焼く。カタナズミといつて、日本刀などを鍛える炭を焼いて、藩に納入した。一気に高熱量を出す炭である。砂鉄を熔かすタタラ師の窯場に、土民がタタラ炭を大量に供給した地方では、山という山が裸になり、洪水や山崩れの原因になったと語り継がれている。渡り鉄山師の物語を裏付ける鉄吹き滓の塚は、各地方にのこっている。カナゴザワ、カマバ、カンナガシなどの地名がそれである。

木炭の俵装は、古くはランカンといつて、大きなムシロ叭か、葦で編んだ大俵に適宜量を詰め、元締の倉庫まで背負いおろし、目方を計って渡した。白炭は八貫目俵、黒消炭は五貫目俵の定貫制となり、それが四貫目の角俵になって、白炭は檜炭と雑木炭に区別された。現在は黒消しが多く、一五キロのビニール袋詰めになった。

### (二) 炭窯築き

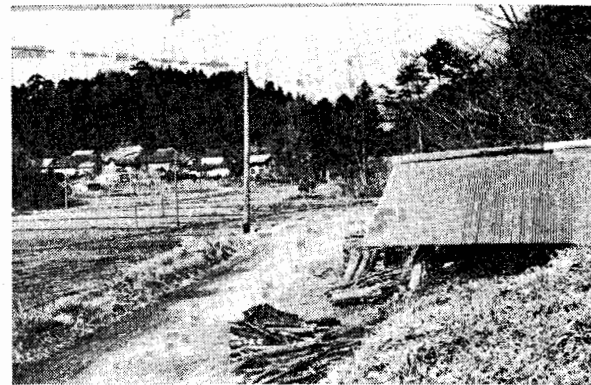
炭窯を築くには場所を選ぶ。原木の集木によい、風の吹き抜けない南面で、窯の粘土や石、水が手近にあって、炭の運搬に便利で、雪崩の危険のない、湿地や湧水などの地下水の浅くない場所と、いくつかの立地、環境の条件に叶ったところに窯を築く。

それには、古い窯跡があれば、昔の人の知恵であるから、其処に築けば安心である。

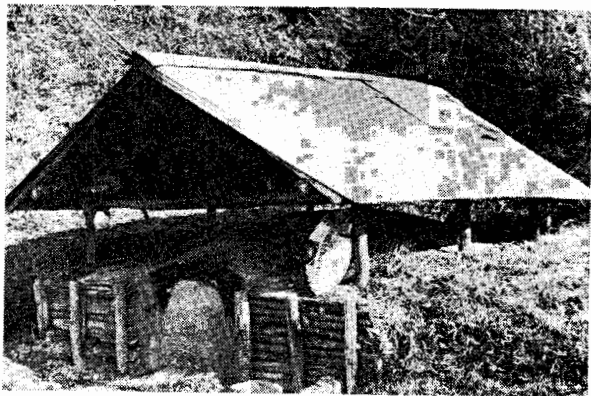
白炭の石窯は、個人差があるが、例えば奥行六尺、横四尺の卵形に「胴掘り」して敷石を敷く。腰は練った粘土で石をかためながら、四尺に積み上げる。焚き口(戸前)は左右に石を立て、上部に長石を渡し、高さ二尺五寸位、幅二尺位の戸前口をつくる。

後方にシツクド(尻く)といつて、煙道(煙突)をつくる。これは窯の機関部で、最も重要な部分である。炭の良否を左右する心臓部で、肺臓にもあたる。

腰ができる「エビ木」という曲り木をさし渡し、天井部のドームの骨にする。それを下から支え棒で支え、中高の網か籠形に組み、上に石を粘土で固めて、円形の天井をつくる。これを「鉢」という。鉢をかぶせた形である。腰と鉢で都



炭窯と集落 (塩庭一區)



炭 窯 (塩庭一區)

に撫で上げる。「鉢上げ」といって、山の神にオミキと頭つきの干し魚とポタモチを供え、塩萩にして鉢上げを祝い、一同直会する。餅気はその粘着力で鉢がなが持ちするようという予祝である。ソバ、ウドンなどをたべる地方もある。長く持つようという縁起である。

窯を乾燥させるために、空焚きといって枯れ柴を燃やす。割れ目には、粘土に灰を練りませて塗りこめる。鉢小屋とし小屋、居小屋をつくる。又木と萱の原始小屋である。山が近いと通い山なので、泊まり小屋はいらない。

黒消しの窯の築き方は、例えば横一〇尺奥行一三尺の窯は、四貫匁俵四〇俵出る。この原木は四間半入る。傾斜地を崩して、その土を全部外に押し出す。シガラを組む場合もある。腰を土で固めながら、高さ二尺六寸位に積み上げる。後方

にシツカマ(トツ)を横一尺三寸、上は七寸と、半分にすぼめてつくる。戸前口を、高さ二尺五寸、幅二尺に開ける。

窯の底に排水のため敷木を敷き、内部に原木を窯形に立てて詰め、鉢形は横に積む。鉢の落下防止に、上にハリギを渡し、八番鉄線で吊鏝を吊る。原木詰めは、はじめ太い木を積み、中くらいの木、最後にキリコという細物を隙間なく、ドーム状の天井をつくる。原木は長さ二尺四寸である。天井すなわち鉢づくりは、ワラや落ち葉をかぶせ、よく練った粘土を上げ、杵でつき固める。水気がでるまでよくつく。

厚さは、根を七寸、中間を五寸、上部を三寸と、七五三にする。窯が完成するとやはり鉢上げ祝いをする。

### (三) 煙と人生

原木は二十年から二十四、五年くらいなものが多い。石窯はマタガリ(練)で挟んで奥から立てる。これは熟練を要する。原木が寝ると窯内に隙間ができ、所定量が詰らないし、平均に焼き上がらない。

午後口焚きをして、煙の具合をみる。イラケムといって苛辛い白煙がシツクドから噴きあがると、窯に完全に火が回った信号である。口焚きが原木に着火したのをたしかめ、戸前口にふた石を立て、まわりを粘土でかためてふたをする。煙りの色のくあいを見ながら、シツクドを徐々に締めて蒸す。白黄色から白に変わり、「アラシをクレル」といって最後に戸前口を少しずつあけて空気を送り、完全炭化させると、煙は青色になり、やがて無色となる。戸前の覗き穴から内部を覗くと、キラキラと炎が金色にかがやき、神々しさに敬虔の念に打たれる。徐々にシツクドと戸前の口を開け、掻き出し棒で真っ赤な炭の掻き出す。素早くスパイをかけて消す。蒙々と灰塵が舞い上がり、汗がしたたり落ちる。

窯の余熱が冷めないうちに、直ぐに予め準備しておいた次の原木を詰める。石が焼けているので、生木の皮が燃えるほど熱い。ヤケドすることはしよっちゅうである。毎日一窯ずつ出すので「日窯」といっている。もとは炭という和白炭のことであった。現在は黒消しがほとんどとなった。

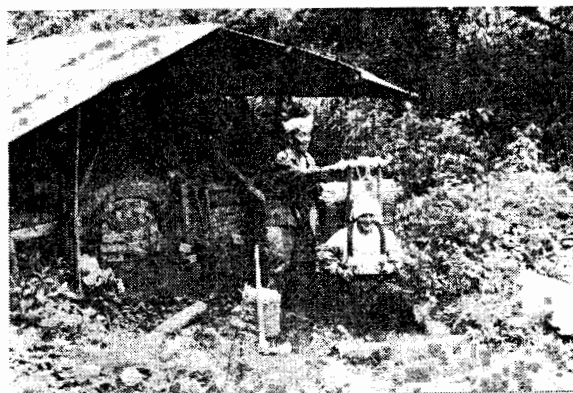
合総高は五尺になる。窯の厚さは七五三といって、腰七寸、中五寸、鉢の上部三寸厚さにするとよい。冬窯はそれよりも厚くする。粘土は強すぎると割れるので、砂をまぜて練る。粘質が弱いと崩れ易く、窯の気密性がなくなり、ガサガサ炭になる。

一人では困難なので、炭焼き仲間  
に手伝ってもらう。これもユイで、  
互いに労力と技術を交換し合うのが  
しきたりである。

窯がかたちになると、よく練った  
粘土で内と外側を塗って、ていねい



炭 焼 き (塩庭一區)



炭 焼 き

きの調査、執筆はその経験者御本人におまかせすべきではなからうかと、ペンを投げ出したい気持ちになった。炭焼きの伝書とか教科書というものはあるのであろうが、まだ拝読したことはない。大竹式黒消し炭の焼き方、窯の築き方などは、さぞ懇切丁寧な手引き書があると思う。この方式にも、各地でいろいろと改良がなされていると聞く。はじめから完全というものはないらしい。もともと、炭窯は一度使ったら使い捨てで、原木がそこに尽きれば、次の山に移

一方、土窯の方は、窯が築きおわると戸前口から火を入れ、窯を乾燥させる。窯の形を整え、ひび割れに目塗りするなど、一週間くらい面倒をみて仕上げる。その間に鉢小屋、出し小屋、居小屋をつくる。乾燥して焼き込んだ窯は十日くらいで焼き上がるが、はじめての窯は十八日くらいかかる。最初の一日は火入れして乾燥させ、シツクドを塞いで戸前の方だけで焚き、そのあとシツクドを開けて本番に火をまわす。そうしないと、どうしても火がシツクドの方に吸いこまれ、戸前の方が火力が弱くなるからである。

シツクドの噴煙をみて焚き口を、通気孔だけ残して閉塞し、シツクドの噴煙口を石蓋で徐々に塞いでゆく。急に塞ぐと窯が眠ることがあるからで、この辺の加減はこの道の経験と、勘による。これにも、窯に教えられることが多く、窯は生き物である実感と親密さを抱く。

開放しすぎると、風の強い日などは、吸いこみすぎて炭質がガサガサになることがある。炭は窯で蒸し焼くのが原則で、そのためには窯の気密性がよくなくてはならない。これを、「窯を絞る」といつている。絞った炭ほど良質の炭ができる。シツクドは最終には一寸くらい口を開けて塞ぐ。次の原木をきりながら煙をみて、二日か三日ほどたち、煙の色が白からしだいに白黄、そして青色に変化したとき、戸前口から空気を送り、アラシをくれる。三時間ほどたつとシツクドの煙突が白くなり、窯内が四〇〇度になったことを示す。

煙が無色になる。これを「煙が切れた」という。こんどは戸前口とシツクドを粘土で目塗りして、完全密閉する。三日くらいおいて四日目に窯の温度が冷めると、窯出しをする。一人が窯の中に入り、篠竹で編んだ簀みで炭を戸前口まで運び、外の一人にそれを渡して出す。全部出しおわると、はじめての窯の場合は、鉢の型枠がとれて、窯と鉢だけの空洞がのこる。最初の窯は乾燥が主目的であるから、この間、半月以上は慎重に見守り、山神に窯の安全を祈る。

炭焼きの道具は、鉈、鋸、斧、鉄矢かみや、かけや、出し棒、立て棒、大かぎ棒、炭篩、ハカリなど簡単なものである。

自分の持ち山を焼く人は恵まれたもので、昔は多くは国有林を元締とか旦那とか親方などといわれる人が払い下げ、土地の焼き子とか焼き夫といわれる人々が、賃焼きした。渡り焼き子は元締から米、味噌などの仕送りを受け、炭代から差

引かれた。仕送り代が多いのを「下がりができた」といった。赤字である。

萱で編んだ炭すごに、正味四貫目ずつハカリにかけて詰め、荷造りして山出しする。問屋、組合の倉庫で検査を受ける。この山出しの背負い作業は女房たちの仕事で、大きな山になると、谷沿えに小径こみちをつけ、枕木を敷いて土ゾリに炭をつけ、て曳き出す。その土ゾリの炭俵の上に幼い子どもが乗せられていたのを、目撃したことがある。炭焼きの女房の逞しい印象がいまだにのこっている。

炭焼きの聞き書きは何度読み返しても、纏まとまりがない。三十年焼いたという熟練者にもお会いして聞いたが、窯の築き方、炭の焼き方の本質がどうもこちらに伝わってこない。実地に焼いてみなければ納得がいかなしい。いっそ、炭焼





炭 焼 き (窯場に登る)

るときは窯を捨ててゆき、またあらたに築く。炭窯築きの名人といわれた八〇翁に聞き書きしたが、一生のうち五十年焼いたという。その間、窯を百個あまり築いたが、快心の作は四個か五個だった、と語った。

白炭が主で、日窯を月に二十五窯焼いて、満足な出来ばえなのは三窯か四窯しかなかった、と述懐した。懐古自慢の多い古老の年輩の中で、この謙虚な反省談には襟を正さずにはいらなかった。

「炭窯直しの名医」といわれた中老の方にお会いして、夜語りを聞き書きしたことがある。炭焼き歴四十年、白炭一筋に煙と炎とともに、工芸道に生きてきたという。この人はよく頼まれて窯直しに行ったが、煙の具合で窯の構造の欠陥がわかる、という。大半はシツクドに原因するが、中には窯は異状がないに、炭がいつも等外になるというのもあって、これは人間の方に欠陥があり、かなりの重症だったという。日窯で通い山であるから、どうしても自分本位に情弱すれば、窯の方でも満足に蒸してくれないという。

冬山で丈余の積雪の中でも、炭焼きを休まずに働いたというこの名医も、夜盲症にかかり、女房に手をひかれて山に通った。煙の色は見えなくなったが、匂いで判断した。黒消しは焼かずに、白炭一本で通したという。ついに失明して、不自由な生活を送っているが、煙とともに精限り働いてきた人生に悔いはない、と語ってくれた。

小野町塩庭の白岩春治さんご夫妻に、二回お会いする機会に恵まれた。炭焼き一筋の現業者である。これまでに授与された賞状、賞品も多い。炭荒れの手でとり出した中に、全国木炭品評会（昭和二十九年）に、黒炭なら割を出品して参等奖を受けた賞状が光っていた。寡黙にして瘦身筋金入りの老翁である。山の生活で鍛え上げた方は温厚で、飾り気のない

氣質がいい。女房のかたの内助で山ぐらしの重労働と、困苦欠乏に耐えてきた。

炭焼きは、朝は未明に山にゆき、夕は暗くなってから帰宅する。子どもたちの起きている顔をみない日が続く。粗衣粗食、炭焼きの一升飯といって、これが超重労働食である。トリ目、胃腸病、喘息と闘いながら、労して報いはすくない。それでも炭を焼く。朝、窯場に近づくとき、煙の匂いが窯の息吹きのように伝わってきて、なんともいえない親しみが湧く。炭焼き冥利だ、と老炭焼きは顔を紅潮させて、明るい表情で語ってくれた。

炭俵編みは年寄りや女房の冬仕事である。子供たちは縄をなう。一家、手にヒビをきらし、血を出しながらせつせとはたらく。

燃料革命で石油時代となり、煉炭、プロパンガスの急速な普及によって、木炭の需要は激減した。もはや過去のエネルギーである。それにもかかわらず、小野町の各集落には、かなりの炭焼き窯が煙を上げている。

鉄の文化を発達させた木炭の歴史は古い。炭窯は、焼く人の感情を敏感に反応し、人々に啓示を与え、人々と哀歓をともにして、山村の生活文化を育ててくれた。吐く煙は生きている逞しい息吹きである。

電熱やプロパンガス、石油バーナ、練炭の時代に、どうしても木炭でなければならないことがある。蒲焼き、アユの観光ヤナ場、田楽焼き、張り子乾燥、茶の湯などがその一例である。アユなどは、皮が焦げずに身が焙れる。これにも、白炭でなければならぬことがある。

当町の生産炭はほとんど黒消しで、自家用が多い。

本項の記述は、折角経験者の口述ながら、大筋では納得しながらも、工程に於ての細部になると伝わってこない。御叱正を願います。

#### 四 炭山の怪談等

炭焼きの夜道は常のことである。労働基準の八時間制で、午後五時きっかりに帰るといふわけにはゆかない。夜なかの

帰りみち、未明の窠どめに行くとき、さびしい目にあつた怪談ばなしもある。

笠巻さんの話 (第一話)

晩秋であつた。夕方までに窠どめにならないので、一旦家に帰り、真夜なかの二時頃、窠場に行つてとめた。曇つてはいたが、月のせいか辺りは薄明るかつた。

帰りに炭を四俵背負つて山から下りると、急に辺りが真つ暗になつた。これはおかしいとおもつて、道の傍らで休んでいると、いきなりボタンという凄い物音がして、びっくりした。トラバサミにムジナがかかつたな、と直感した。火をつけて辺りをみ回したが、なにこともない。すると、こんどはドカーンといういらい音がした。ますますおかしいとおもいながら歩いて行くと、平らな道を白がころころと転んでいる。

「畜生め」

と杖でいきなり右の腰のあたりを叩きつけると、ギャーツとムジナが悲鳴をあげて逃げて行つた。

(第二話)

夜の九時か十時ごろであつた。家に帰つてみると、何か物音がする。ヤセウマの荷を下サリとおろした。その荷が動き出すのだ。落ち着いてタバコを吸っていると、なんと、いままでみたこともない大きな狐が逃げ出した。

(第三話)

夕方、祝いごとがあるので、酒と魚を買つての帰りみち、酒は背負つたが、魚だけは抱えて用心していた。すると、目の前に提灯の明りがいくつもいくつも見えた。それにみとれていると魚をとられるので、魚をしっかりと抱いていた。そうしていると、提灯の明りがみえなくなった。

(第四話)

知っている人のはなしだ。夜道を、酒に酔つて歩いての帰りみち、道に南瓜が転んでいた。それをみると、無性に睡くなつたので、その南瓜を枕に寝てしまった。

目を醒まして起きてみれば、振る舞いでもらつてきた筈の御馳走がない。狐にもつてゆかれたらしい。また、あるとき道を歩いて行くと、前の人が田に入つたり畔に上つたりしている。「なにしていんだ」と声をかけると

「魚をとられた」

といつて、さがしているのだった。明るい昼間なのに、いつとられたのか全く気がつかなくつたという。塩鮭が田に入つたというのだ。

(第五話)

夜なかの二時頃であつた。炭山からの帰りみち、畑の鳥追いの鳴子が、風もないのに鳴っている。針金で吊つたのが、音楽のようにきこえる。物音がするので、地面に耳をつけてきいていた。すると、うしろに雲をつくような大入道があらわれたので、びっくりした。

「畜生」

と、自分の肩の辺りを杖でなぐりつけると、大入道が消え失せた。小さなイタチが肩から叩き落とされて、素早く逃げて行つた。

(第六話)

狐の仕返しというはなし。

夜道で、風もないのに提灯の火が消えた。その人は、うしろに気配を感じたので、もつていた杖で後をなぐりつけた。すると狐がその杖にあたつて、悲鳴をあげて逃げた。

「やれよかつた」

とほつとして家の方に歩いて行つた。ふと山の方をみると、山が真つ赤に燃えている。

「大変だあ、山火事だ、山火事だ」  
と村に火事ぶれした。村の人たちが出て、

「どこだ、どこだ」

といている。消防団が出動したが、どこも燃えてはいない

「ねほけたんだべ」

といわれて、その人はわらわれた。狐の仕返しにちがいない。とその人は身ぶるいした。

#### 横田さんの話 (第一話)

夜明け前の真つ暗な中を、いつもの採りつけの山に茸採りに出かけた。すると、俄に辺りが昼間のように明るくなつた。

物音がした。

「出やがったな畜生」

と呟いて身構え、杖をなげつけたところ、辺りが急にもとの暗闇にもどった。これはイタチのしわざにちがいない。夜道に杖ははなされない。

#### (第二話)

開拓小屋の人が、小屋の寝間に寝ていて、マムシに噛まれた。毒が回らないうちに、焼火箸で傷口を焼いたので、たすかった。半日のうちに三匹もマムシをとらえた。

田の草とりで、一枚の小さな山田でマムシを六匹も捕ったことがある。その日は気味悪いので、仕事をやめて休んだ。山と田の間にはマムシがいる。ことに、石山には多くすんでいる。交尾期になると、縄よれになっていて糞のよるな悪臭を出す。それで「クソヘビ」という。マヘビともいう。

#### 笠巻さんの蛇ばなし

カラス蛇という毒蛇を捕えたことがある。真つ黒なからだで、毒はマムシよりも強い。噛まれると忽ち死ぬという。からだが大くて素早い。皮を剥いてステッキにした。薄墨色であった。

(橋本 武)

### 第三節 葉たばこ

#### 福島県の葉たばこ

たばこ耕作組合に『小野新町地方松川葉発達史』という小冊子があったのを借り受けることが出来たので、これから小野町地方の、たばこの沿革をみてみる。

福島県は全国でも一、二位を競う、葉たばこ生産県である。

その発祥は、田村郡滝根町大字広頼字小辺坂の旧家榎田家の先祖が、寛永年間(一六二四～一六四四)九州よりたばこの種を求めて来て耕作したという事であり、寛政年間(一七八九～一八〇一)には、分家の三郎治という人が、三春城主秋田侯、それに將軍家へも献上したので、將軍家より三郎治に対して褒賞のお墨附が下げられたという。

こうしたことから、福島県のたばこ栽培は、寛永年間にはじまり、その発祥は小野町管内といえる。

#### 松川 葉

寛永年間当時は、栽培されたといっても、僅かに空地を利用した自家用程度ということである。

当時は田村郡内の東北部に比較的多かったといわれ、西部は少なかった。

ところが蒲生氏の所領時代、幕府から栽培を禁じられ、たばこ栽培は一時中絶されたが、宝暦(一七五二～一七六四)のころになって再興し、だんだんと盛んになって来たという。

このころの田村郡西部の、三春地方でのたばこ作りは、逢隈村では文政元年(一八一八)のころには、地葉といった、

同じ年に生まれ、同じ年回りの人が、何か同じ運命をたどるといふ考え方があり、この同齡の人に悪いことがあると、自分にもふりかかるといい、これを防ぐための呪を行う。

耳ふさぎといつて同じ歳の人が死ぬと、オハギを耳にあて、「ワルイコトキクナ・イイコトキケ」と唱え、背中に箕を立てかけた。オハギは川へ流した。

この習慣は、各地でみられる。

#### 五 家と贈答

本家・分家などの血縁関係にある家と家は、何か事があることに贈り物をし合う。また村内では、血縁がなくとも生活全般にわたって交渉をもった。

平常は、特別な交際がなくとも、年中行事などに伴って、正月礼・盆礼など、あるいは婚礼や葬式など吉凶時には、深い交際を近隣の家とも行う。

昔は、正月には部落内の全戸を回り、半紙一帖と手ぬぐいを贈った。部落内全戸を回るので二十日正月ごろまでもかかったという。

近い親類には、手ぬぐい・半紙と餅を贈る。また嫁婿の初正月には、丸餅を配った。初孫のときには、男の時は弓矢の餅・女の場合は、羽子板の餅といつて、三つ重ね餅を正月十四日に親類が贈ったという。

(村川友彦)

## 第八章 信 仰

### はじめに

かつては、どこの村にも、村の鎮守様と呼ばれる神社があり、お祭りの時期になると、村人達が鎮守の社に集まり、祭りを彩るいろいろな催しを楽しんでた。

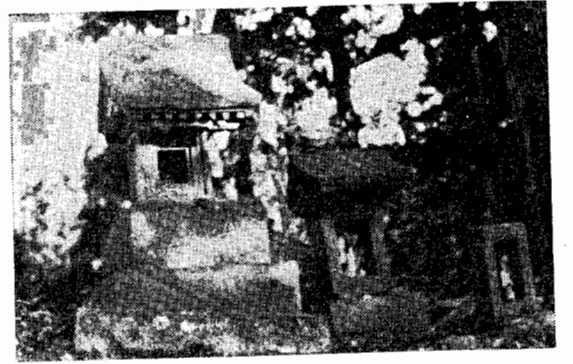
また、どこの村にも、先祖代々を祀る墓地と壇那寺があり、お彼岸やお盆の頃になると村人達は先祖の霊を供養した。同族の家が集まっている屋敷には、同族の尊崇する屋敷氏神(氏神)が祀られ、秋の切り替え祭りに、同族の者が集まり祀りごとをしていた。屋敷周りの道ばたには、屋敷の人々が祀る地藏さまの塔や、いろいろな石仏に、菓子などが供えられたりしていた。

村のなかの家々には、その家の氏神を祀る石造の小祠や藁で作ったフウデイがあり、毎朝家人が拝していた。家の中の神棚には毎朝燈明が灯され、仏壇にお線香がたかれ家人が礼拝していた。

神棚には、各地の靈験あらたかな社から受けて来たお札が置かれていたり、家の戸口やかまどの上にも、除災招福を願うお札やお護摩札が張られていたりした。

ほんのちよつと時代を逆のぼって、村人達の日常生活を見ると、この様に種種な形で、神や仏を祀っていたのである。何故にこの様に多くの神仏を祀っていたのであろう。考えることの出来るなかで、一番基本となっている信仰態度は、祖先を大切に祀るといふことであつた。また、そのなかから、五穀の豊穰を願ったり、家内のみならず村内の安全守護が願われていたのである。

この章で扱う信仰とは、この様に、村という地域社会のなかで、また同族という血縁社会のなかで、さらに各家の日常



小 祠

的な生活のなかで祀って来た神や仏に対する信仰行為なのである。

## 第一節 民間信仰

### 一 氏神信仰

村や家のなかで祀られている氏神について、柳田国男は『氏神と氏子』という著のなかで、「村氏神」・「一門氏神」・「屋敷氏神」の三種に分けて説明している。「村氏神」とは、或る一定の地域内に住んでいる者が全員その氏子となり、その神を祀る祭りに奉仕している様な氏神社のことであり、一定地域内の守り神として尊崇されているという。

「一門氏神」とは、同一の氏を名乗る家の者によって、毎年合同して祭祀が営まれていた氏神社のことであり、その祭場は、村氏神の社殿が使用されていたり、その一門だけの祠や社であったりしているという。

「屋敷氏神」とは、個々の家の守り神であり、邸内の一隅または、私有の山林のなかに祀られたりしているが、祭りの時になると、露地に幣束が立てられるだけの場合もあるという。

以上の分類の様に、私達が普段、氏神さまと呼んでいる神にも、いろいろな立場から祀られている神があることを見るのだが、それだけに、氏神信仰の本質を理解しようとするのが容易なことではないことを知るのである。

しかし、氏神信仰の姿を理解しようとすることは、かつての氏神を中心とし、地縁的・血縁的な関係の中で構成されていた村と呼ぶ共同体の成り立ちを考えることにもなるのである。

### (一) 村 氏 神

村氏神をめぐる民間習俗としては、誕生後の三十日あたりから百日ぐらいにかけての間に行われている赤子の初宮参りとか、村のなかでの最大な楽しみ行事であった村祭りなどが知られているが、かつては村人達の共同祈願のお千度参りなども行われていた。

このうち赤子の初宮参りは、誕生後の間もない赤子が、村氏神の氏子となったことを確認して貰い、その子の一生の加護を祈る行事だといわれている。

普通この村氏神のことを、村の鎮守様と呼んでいる。それは、かつての村(現在の)毎にあった村社と呼ばれる社格を持つ神社である場合が多い。

明治末年に編纂された『飯豊村郷土誌』によると、大字飯豊地内の一六四戸の氏子が祀る飯豊神社、大字小戸神地内の六五戸の氏子が祀る八幡神社、小野山神の五〇戸が祀る鹿島神社、大字吉野辺七〇戸の氏子が祀る三渡神社、大字浮金一〇戸の氏子が祀る菅布禰神社が、当時の村社であったことが記載されている。

この様な村社は、大字の住民の殆んどを氏子としており、神社の財産は大字によって管理され維持されており、管理上必要な労力は、村人足として提供されていたのである。

赤子の初宮参りのことをオブスナ参りといっている地もある様に、村氏神のことをオブスナ(ウツ)様とも呼んでいる。オブスナは一般に産土神に当てられているが、この産土神は本来土地の神のことであり、氏神とか鎮守神とは本質的には異なる神といわれている。

『民俗学辞典』などには、この産土神とは近世あたりに、古い形の同族神としての氏神が衰えて、代わりに新たに興って来た神であると記されている。

それだけに、今の人々の意識のなかには、村氏神・鎮守神・産土神も混然として居り、同じ神として祀られている様で

もある。  
この様になると、オブスナ様はその地をしらしめす神であり、村に生まれて来た者は当然その氏子となると考えられて来る。

しかし、小野町においては、オブスナ様とは一族の守り神、すなわち一門氏神として祀られている所も多いことでもあり、産土神が村氏神と同じだといいうい方は出来ない様でもある。

## (二) オブスナ神

柳田国男は『氏神と氏子』の中で、ウブスナ(オブスナ)について次の様に記している。

「ウブスナ様は即ち本居の地に坐す神、産土に祭られたまう神ということで、神がウブスナであったわけでは無いと思う。従って一つの氏族が占拠する土地では、産土神は即ち氏神であり、二つ何れの名を用いても誤りではなかったのである」。

南田原井では、オブスナ様とは諏訪神社のことであるという。この諏訪神社は旧郷社であり、大字北田原井、南田原井、湯沢の人々が氏子であったが、ここでは、各屋敷(同族の住む)ごとにもオブスナ様の社を造り祀っている。オブスナ様の祭日は旧九月二十三日で、この日諏訪神社より幣束を受けて供え、強飯を作り供え祝うものとされている。また、大字南田原井、夏井の両地区の諏訪講中の家では、今でも「こま」は作らないものとされている。それは、諏訪神社の神様は「こま」が目に入り片目がつぶれたからだといわれていることによる。

結局、南田原井でのオブスナ様とは、村氏神としての諏訪神社のことでもあるが、同族集団の住む屋敷内に祀られて一門氏神のこともあったのである。

飯豊の大日堂では、オブスナ様は八雲神社であるという。八雲神社の祭りは昔は九月十四日であったが、今は十一月三日になっている。この祭礼の日には、昔は分家筋の家の人達が本家に集まりお祭りをしたものだったといっていた。

同じ様なことであるが、小戸神でも、昔は地区の集まりはオブスナ様の旧一月一日の祭り日であった。この日には本家に集まり、オブスナ様を拜んで神酒を供え、酒を飲んで遊ぶ日であったという。

この様に、オブスナ様の祭り日に、同一地内に住む同族の者が本家に集まり、祭りをする地が多いことから、町内というオブスナ様とは、同一氏族が祀る一門氏神のことなのだといえるのである。

オブスナ様として祀られている神々を見ると勧請神と呼ばれ、他の土地から勧請されて来た神々であることが多い。今回の調査のなかで、最も多く祀られている氏神は稲荷神であったが、稲荷神も勧請神である。近世以来、京都の伏見稲荷、三河の豊川稲荷が勧請されたものと見られるものもあるが、稲荷神そのものは一般に農作の神としての信仰のなかで祀られて来たものである。

吉野辺での稲荷神をみると、関場の郡司氏、坊内の先崎氏、伊達内の会田氏、滝の郡司氏、谷津の佐久間氏、風越の館川氏、仲神の郡司氏、板橋氏、遠上の根本氏、早渡の先崎、石井氏の八氏が、それぞれの氏神として稲荷神を祀っているが、この地での稲荷神は、蚕の神としても祀られていたという。

旧暦二月の初午に、養蚕をしている家では、繭団子(団子を繭の形に作る)を作り、油あげ、魚などと共に稲荷社に供え、残った団子は、まぶし(まぶし(わらだ)を作った中に繭が出来た様に並べて、神棚の下に台をしつらえて供え、それから氏の一族の者と共に「まゆかき」といって、団子をまぶしの中から取って食べたものであったという。

また、この日には、朝は四つ(現在の午(前10時))前は、どの様な人が来てもお茶は出すものでないといわれていたという。氏神として祀られている神々のなかで、稲荷神に次いで多いのは山ノ神である。この神は勧請神ではなく、古くから民間信仰のなかで祀られ作神として広く信仰されている神である。

この後、熊野・八幡・八雲などの勧請神が続き、さらに観音・妙見・不動などの仏達も氏神として祀られている。この様に、オブスナ神として祀られている神々は、勧請神や民間信仰としての神や仏と多彩な神々が見られるのである。

上羽出庭の宮ノ作には難解(なげし)神社をみるが、この神社は西牧姓一統の先祖神を祀り、九月二十七日が祭典であると



ツ ト コ

いう。この様に特定の神を一門氏神としている例は少ないが、案外これが本来の姿であったのかも知れないのである。

### (三) 屋敷氏神

小野町では、屋敷とは一般に近隣組のことをいっているが、ここである屋敷氏神とは、邸内の一隅、または自家の山林のなかに小祠として祀っている神のことであり、その家の祖先神として、また守り神として祀っている神のことである。小祠といっても、木造や石造のものから、藁で作ったフウデイとかツトコとして祀られている場合まであり多彩である。湯沢では、神の田からとった藁で、昔はフウデイを作ったが、現在はツトコを作るといふ。この神の田には人ぶんは使わないし、「女の手は触れるな」ということが厳しく守られていたものだとはいわれていた。

フウデイやツトコは、秋の氏神祭りに新藁で作るが、フウデイは、しの竹や

細木で骨組みを整え、藁で屋根を葺くものだが、小野町のなかでは次第にその姿を見ることが無くなったといっている。ツトコは、「藁つと」から出た呼び方であるが、一握りの藁を揃え、上端を折り曲げて結び、下方を開いて円錐形にし一方をあけて入り口の様にしたものである。

この様な祠は毎年新藁で作るものだが、これが常設のものとして木や石で祠が作られる様になったといわれている。飯豊の大日堂では、氏神の祭りは、秋の十一月三日だが、昔は九月二十四日であった。飯豊神社から幣束を受けて来て切り替えをするといっていた。

一般に屋敷氏神の祭りのことを、毎年幣束を入れ替えることから切り替え祭りとか、幣束祭りとかいっている。

切り替え祭りについて大倉では、今は十一月三日に行っているが、もとは、大楽家は十五日に、先崎家では二十四日にと分かれて行っていたものだという。

十時から見渡神社の祭典が行われるので、その前に神官からご幣を受けた。先崎家ではご幣を二十七本受けて来て、各社にあげてくるが、この時に強飯とおのりも供えてくる。

二十七本のご幣は、八幡さまの七社の他に山ノ神・熊野さま・天王さま・荒神さま・三渡さま・そして家にある大神宮・釜神さま・ニカ所の水神さまなどであり、二十七社を回るのに二時間はかかったという。

昔は、近親者はこの日に集まった。今は搦いたお餅は神様と親元にあげているが、昔は集まった親戚一同や兄弟に配ったものだともいっていた。

この様に、切り替え祭りは、多くの神々の祠に新しい幣束を供える祭りではあるが、一族の集まる祭りでもあり、それだけに先祖を祀る先祖祭りということが出来るのである。

しかし、この様に見て来ると、一門氏神と屋敷氏神との間にも殆んど差を見ることは出来ないものである。このことについて、『飯館村誌』のなかで大迫德行氏が、「一門氏神の氏神は本家にあり、分家や新宅にはなく、祭祀に当たって分家の者などが本家の氏神祭りに参加し、一族協同で祭祀する例が古い型の氏神祭りといえよう。これは同族結合の強固な例でもある。また、屋敷氏神(各音)は、同族結合がゆるみ、その家が村落生活の表面に出てくると、家毎に氏神を祀る様になる」と記しているが、それが本筋なのかと思われる。

### (四) 氏神としての勧請神

氏神として祀られている勧請神のなかで一番多いのは先に見た様に稻荷神社である。

この稻荷神社が広まったことについて『民俗学辞典』に、普及の根底には、深い基礎的な事情が横たわる筈であるとして、その一つは、田の神としての信仰から。その二つには神使としての狐に対する信仰から。その三つには、京都伏見稻

荷神社を中心とした全国的信仰組織によるなどをあげている。

吉野辺の仲神にある稻荷神社の棟札は、宝永三年（一七〇六）と古く、この社は仲神の郡司氏・板橋氏の氏神であり、屋敷の産土神となっているという。

飯豊の中田にある稻荷神社の棟札も、宝永四年（一七〇七）と吉野辺仲神の稻荷社に続く古社である。湯沢の八又にある稻荷神社は、天明八年（一七八八）九月十九日の棟札を持つが、長久保家四戸の氏神として祀られている。祭神は大地主命と倉稻魂命であるというから地神・田の神として祀られていることが知れる。

稻荷社は、一門氏神・屋敷氏神として祀られているのが多いが、小野赤沼の内堀子にある稻荷神社は、内堀子の草野姓一戸・矢吹姓四戸・西牧姓二戸・会田姓一戸の氏神として祀られているというから、近隣組としての屋敷の産土神として、四戸の守り神であるといえる。

また、稻荷社の大方が、その祭礼を二月の初午の日としているなかで、南田原井の沼ノ平にある松川稻荷大明神は、横田氏の先祖を祀るとして、春と秋の彼岸の中日を祭り日としている。

この様に稻荷信仰を見て来ると、極めて多彩な祀り方を知ることになるのだが、それが稻荷信仰の本当の姿なのかも知れないのである。

熊野神社で持つ棟札は一般に古く、飯豊の本飯豊の熊野社のものは天文十五年（一五四六）という。この社は鈴木家の守護神として祀られているというから、熊野信仰と鈴木家の古い型を持ち続けているものといえる。

吉野辺仲神の熊野社は宝永三年（一七〇六）の棟札を持つが、郡司庄屋家の守護神として祀られ、また小野新町大久保の社は、宝暦十二年（一七六二）寛政八年（一七九六）文化十三年（一八一六）天保三年（一八三二）の棟札を持ち大楽家で祀っている。

熊野信仰は、修験道の信仰としても知られているが、熊野三所の神使としての鳥を図案化した牛王宝印が、民間の誓約や魔除けに盛んに用いられていた。稻荷神と同じく作神としての信仰から祀られている面の強い神である。

また、飯豊の上組には熊野講があるが、この講は、春は三月の初酉・秋は十月九日の刈りあげの日に講中の男女が集まるもので、朝の内に神社の清掃をし、旗立てをする。午後から老若男女が集まりお祭りが行われるものだという。

八幡神社は行政区で祀る所が多い様だが、浮金の越野の社は宗像六戸の、小野新町本町の若宮八幡社は渡辺・二瓶本家の氏神として祀るといふ。また小野新町の浄円田にある八幡社は、天明三年（一七八三）文化十五年（一八一八）天保三年（一八三二）の棟札を持つが大楽家で祀るといふ。

八幡神社は清和源氏の氏神として知られているが、石清水八幡からの勧請神として祀られている。

菖蒲谷には、鹿島神を祀る社が多くみられるというが、多くは吉田家の氏神である。また、小野山神の仲田にある鹿島神社には元禄七年（一六九四）の棟札がある。

鹿島信仰は、茨城県の鹿島神宮に対する信仰であり、軍神としてよりも疫病除けなどの除災信仰のなかで信仰されているという。

八坂神社・八雲神社・牛頭天王・天王などの神は、疫病消除の神として祀られたものだけに行政区で祀る社が多い。谷津作前ノ内の八雲神社は、夏は旧六月十五日が、秋は新の十月一日が、谷津作の鎮守の祭りとなっている。また、小野赤沼真新屋の八雲神社の祭礼は九月十八日であるが昔は八月八日であったという。

浮金の越野には、宗像家六戸が、小戸神夫内には吉田家と村上家が祀る八雲神社がみられている。

以上の他に、春日神社・住吉神社・諏訪神社・日吉神社・飯豊神社・金毘羅神社・古峯神社・秋葉神社・出羽神社・羽黒神社・湯殿山神社など、多くの勧請神が氏神として祀られている。

#### (五) 氏神としての民間信仰の神

一般に、民間信仰講中により祀られている山の神のなかにも、氏神として祀られているものもある。吉野辺の風越にある山津見神社は、風越集落の山の守護神といわれているが、村氏神としても祀られているのである。



山の神を一門氏神や屋敷氏神として祀っている氏のなかでは、先崎氏や宗像氏が多く、根本・吉田・村上氏などでも祀っている。作神としての信仰のなかで祀って来たものである。

田の神である地神を祀る所もあるが、大地主大神・堅牢地神（おおとちののおおみ けんろうじじん）などとして祀る所もある。小戸神の明神前にある大地主大神は、文化四年（一八〇七）の棟札を持つが、大旦那牧野越中守とあり村氏神として祀られて来た神社である。

雷神は水神としてまた作神として祀られているが、天満宮・天神として祀っている所もある。湯沢水樋の雷神は、岩塚・根本・長久保・根本の四軒の氏神として祀っているが、弘化年間の棟札を持つという。また、小野赤沼鉢塚の雷神社は、明治年間の棟札を持ち、氏子二十名を擁するが、千葉より遷宮したものという。

三渡・見渡・二渡などの社名を持つ氏神社もあるが、一般に小祠でありながら行政区において祀っている。『本邦小祠の研究』（岩崎敬）に「田村郡下のみわたりは一通り見てまわったが、やはり山作に多く、水のわく所とか流れの源となっているような所に特に多かった。」（中略）土地の人の話によると、田村郡は山多く灌漑の池が少ないから殆んど天水がかりに田圃は依存している。石川郡蓬田村のみわたりが本社であるまいかという人がいるがわからない。とにかく水関係、灌漑関係、雨乞関係があると思われる。」とあるのを見るが、水神信仰のなかで祀られたものであろう。

以上の他、午頭天王・天王として疫病除けから祀る神、荒神・火産神・三宝荒神・金屋神など火神として祀る神、職人層に信仰のあつい聖徳太子、道や行路の守護神としての道祖神・幸神・足尾大権現なども氏神とし祀られている。

#### （イ） 氏神としての仏

地藏尊を氏神として祀る所は多い。小野新町大久保にある延命地藏尊は、先崎家の先祖を祀ったといひ七月二十日が祭りであるが、集落で祀りを行う。また、小野赤沼の関根前の地藏尊は、村上家の守護神であるが、昔は小野赤沼下組で祀りをしたという。

この二例は、個人の家の先祖神・守護神であった地藏が、集落・屋敷の人々にも信仰され、共同の祀りが行われている。

た状況を示すものだが、同様な例は多いものと思われる。

吉野辺の滝にある滝の不動明王は寛文八年（一六六八）の棟札を持つ。お産の神としても知られるが、滝集落の守護神として祀られているものである。

不動尊を一族の守護神として祀る所も多く見られるが、石像浮彫の尊像を祀っている様である。

観音を氏神とする所も多く見られるが、吉野辺開場の観世音菩薩は延享三年（一七四六）の棟札を持ち、郡司家の守護神として祀られている。同じく仲神の十一面観音は、仲神郡司家の守護神として九戸で祀るといふ。

また、飯豊の北ノ内にある観音は北ノ内集落の氏神といわれている。観音は地蔵に次ぎ多く信仰されるが、観音と一概にいわれていても聖観音・十一面観音・如意輪観音・馬頭観音などが見られているのである。

馬頭観音と同様に妙見尊（妙見）が祀られているが、吉野辺早渡の妙見神社は早渡先崎家の守護神として祀るといふ。

薬師如来の信仰も各地にみられるが、吉野辺谷津の薬師は谷津の佐久間・宮の前の家の守護神であるといふ。また、飯豊の三王堂の薬師は宗像家の産土神であるといふ。

小戸神の李作にある薬師如来は、享保二十二年（一七三六）の棟札を持ち、行政区で祭祀を行うといふ。

（木暮幸雄）

#### 一 一 オシンメイサマ

オシンメイサマは東北地方に多く見られる民間信仰の神の一種である。

#### 神の呼称

この神の呼称も「おしらさま」「おしらがみ」「おこないさま」「おくないさま」「おっしやさま」など、東北各地でさまざまであるが、福島県内では「オシンメイサマ」「シンメイサマ」「オヒメサマ」と呼び、一般的には「オシンメイサマ」と呼んでいる。

## オシンメイ サマの型態

オシンメイサマの御神体は一尺(約三〇センチ)に満たない棒の先端に顔が彫られ、または墨がきして、「キモノ」「オコロモ」と呼ぶ布片を着せた二神を一對とした神がオシンメイサマである。

この神は、ほとんどが男女一對であるが、クマノシンメイと呼ばれるものに二体とも男神、イセシンメイのなかには二体とも女神で一對とするとともに散見する。

型態も布でスツポリと包む包頭型、頭部の露出する露頭型、ほかに、わずかであるが頭部を三角形に布で形づくるク、リ人形型がある。

包頭型とク、リ人形型では、男女が同型なので赤い布片をつけるとか、黒い頭布を冠せるなどして男女を区別している。露頭型は男神が烏帽子(カッパ)を冠り、女神は束髪の姫頭なので男女の区別が容易にできる。男神が烏帽子を冠るので、体長が女神より少し長い。

## 神の性格

オシンメイサマと同形の神、東北地方北部(岩手県)のおしら神は有名であるが、おしら神の由来を祭文で語られるなど、蚕神として信仰されている。

オシンメイサマは同形の神であるが、現在までの調査から蚕神として信仰するところはなく、祭文もない。福島県内ではオシンメイサマは病氣治癒・安産・災難除け・失せものなどに靈驗あらたかな神として信仰されており、特に子供の病氣には効能がある。田村地方では身体の弱い者が神の取子(とりこ)となって加護をお願いする取子の習俗が多いが、このオシンメイ信仰にもオシンメイ神の取子が船引町にみられる。

オシンメイサマの性格を類推すると、出歩くことの好きな遊行神であり、子供が好きで子供にもてあそばれることを好む神でもある。

また、ご縁日や女の解放される一月十六日・春や秋の彼岸、地蔵講、こじら講、おかま講などに嫁入り前の娘たち、主婦たちの集まりに持ちだされてオシンメイサマで肩をたたいたり、円陣になって一人が円陣の中に座ってご神体を持って神憑(みり)きをする「オシンメ遊び」が各所でみられる。ほかに出産時に借りてきて枕元に置くことと安産するなど、お産に立ち合

う神の性格も垣間みるのである。

## シンメイ守子

オシンメイサマをお祀りする人を「守子」と呼び、守子は旧家の家刀自が多い。阿武隈山系、特に田村郡では法印家の不動尊と併祀されるのが多く、法印の母や妻女が守子をしているのが特色である。

また、若いころから病弱のためにオシンメイサマを借りて信心するうちに、オシンメイサマが住みつき、それからオシンメイサマを守りようになつた例が多に多い。屋敷や各所を回って歩くのは、願かけのお札に回っている姿である。しかし、反面にはオシンメイサマをおかりして生活の手段として遠い地区で物を乞う話もみられるのも事実である。

## オシンメイサマの分布と現況

福島県内におけるオシンメイサマの分布は明治中期に大須賀篤軒の「民俗誌料、歳時民俗記」に「がいわき市のオシンメイサマの調査をしたのを契機に県内の先学が浜通り地方や会津地方のオシンメイ信仰を調査され報告がなされている。中通り地方も昭和四十二年以降になって、ようやく所在が分ってきたが、まだ未調査の地域が多い。中通り地方の田村郡内では三春町一九カ所、船引町四八カ所が確認されているが、大越町、常葉町、滝根町など一部を除いて未調査に等しく、都路村は完全な未調査地域である。小野町も未調査地域で、この度の調査で八カ所の所在を確認できたが、まだ調査の行き届かぬところがある。小戸神・吉野辺にもあると耳にしたが確認するまでに至らなかった。

小野町の分布図(表)・所在表(表)に示すように、大倉地区二カ所、飯豊地区の三王堂で二カ所、小野赤沼地区一カ所、浮金地区一カ所、塩庭地区一カ所、上羽出庭地区一カ所の計八カ所である。

この八カ所の所在は確認できたが、シンメイ巫女による託宣するところは皆無である。

オシンメイ信仰は終戦前(昭和二)まで、いや近代医療の波及の遅い地区では昭和三十年代半ばまでは、身近な悩みや心配ごとが生じるとシンメイ巫女を訪ねてオシンメイサマのお告げをいただいていたが、悩みごとに対処した話がよくきかされる。オシンメイサマは、それだけ庶民にとって身近な神であった。





宗像芳房家のオシンメイサマ

先崎国儀家では、現在大神宮の左側に男神、右側に女神を安置しておく。  
 〔事例 三〕 宗像芳房家 飯豊宇三三堂  
 宗像芳房家のオシンメイサマは、いつ、どこからお迎えしたかは不明である。男女二神一对の露頭型で、材質は杉である。顔が線刻であるがキモノをうすくまる程着ているので顔相は見る事ができない。神体は男神二五センチメートル、女神二

この捨てられ朽ちはじめたオシンメイサマを、国儀の母ナオが拾って家に持ち帰り、ご神体を奇麗に洗い、目鼻を入れて、小野赤沼の出羽神社で魂を入れてもらって、以後お守りをするようになった経緯を持つオシンメイサマである。  
 このオシンメイサマを守りようになったナオは、さくの不動様(滝根町)、観音様(滝根町)、宇津峯(郡山市)、川曲の法印様(郡山市)、山下谷の折禰師(きむ)、赤井嶽(きむ)へ訪ねて行くときは、かならずオシンメイサマを行李に入れて背負って行った。昭和三十二年六二歳で亡くなるまで続いた。

先崎国儀家の伝承は、オシンメイサマはイザナギ、イザナミの神であるという。祭日は四月の酉の日であったが、現在は十一月三日の権現様の祭りに併せて行っている。酉の日は御命日なので鶏肉を食ってはいけない。現在でもこの禁忌を守っている。

肩が張るとオシンメイサマで肩をたたいてもらうとなおる。弱い人がオシンメイサマの加護によってなおるとキモノを二本にして返しにくる。また、オシンメイサマのキモノの一片をもらいお守りとする。交通安全のためにキモノをもらいにくる人が多い。  
 オシンメイサマの型態は、露頭型で男神が烏帽子を冠り、女神は束髪であるが、前述したように朽ちかけ初めていたものを拾って、目鼻をつけたので容ぼうは見ることがない。

らったところ「オシンメイサマが世に出たい。守子もりこが守りをしてくれない」というお告げがあった。

それで、熊次郎が小野赤沼から大倉に婿に来た先崎留治と言う大工に作って戴いたのが現在の先崎家のオシンメイサマである。

作った当時は祖母のセンが守りをしていたが、祖母が昭和十七年(七〇歳)に亡くなると、その後は区長さんの奥さんに守りをしてもらったという。

オシンメイについての伝承は、オシンメイサマは家の中に祀る神棚の神より神格が低いので、仏壇より低いところに安置するものと言われ、また、子供と遊ばせると子供を守ってくれる神と言われている。それで、現在は家の座敷の机の上に行きに入れて飾りつけ、子供たちの遊びに相手するようにしているという。

先崎家では「オシンメイサマ」と呼び、二体一对の男女神の露頭型である。見た目には男女の区別がつかないが、男神が二四・五センチメートル、女神が二四センチメートルと男神の体長が〇・五センチメートル長く、顔が男神が女神より一センチメートル長く、大きい。胴体には銘はない。

このオシンメイサマで神が憑くと、よく見えると言われ、オシンメイサマを粗末にしないために祠を作るといふ話もあったが実現しなかった。

先崎家は現在、二十代の若夫婦が守りをしているが、このオシンメイサマの決まった祭日はなく、神棚や仏壇にお供えするときは、オシンメイサマにもお供えする。お正月にはお供えも上げている。

オシンメイサマに着せる布の名称はない。身内の人が肩が張ったとき肩をたたくが、布のはしきれをオシンメイサマに着せてくれと持ってくる人もある。

〔事例 二〕 先崎国儀家 小野新町字丹後坂

先崎国儀家のオシンメイサマは、かつては目黒の法印家が所有していた。法印家は息子の代に潰れ、オシンメイサマを粗末に扱い、果ては先崎製材所付近に捨てて中通り方面に移転して行ったという。昭和二十一年ころのことである。



神明神社のオシチメイサマ



先崎三郎家のオシチメイサマ

十八年にサワ媼が亡くなったため先崎家に帰ってきたものである。先崎家では前にも二組程あって貸し出されているが、貸し出し先も不明である。サワ媼は信仰心が篤かったので借りて守りをして

三センチメートル、直径が四・五センチメートル、三・五センチメートルと男神が太い。銘はない。オシチメイサマに着せる布片をキモノと言っているが、布片の真ん中に首を通す穴をつくり、きれはしを放射線状に裂いた貫頭衣である。

宗像芳房家の伝承は、祭日は四月八日で、祭日には赤飯を炊いてあげる。この神は内宮さま、外宮さまを象どっているという。イセシチメイを案じさせる。

宗像芳房家では祖母のイヨがオシチメイサマを守りしていた。座敷に祭壇をつくってオシチメイサマを飾り朝晩おがむのを日課としていた。イヨ媼に神が憑き、お告げをしたので、お詣りや拝んでもらう人が多かった。また、友達や親戚に招かれて、でかけることが多かったという。昭和二十七年(七八歳)に亡くなるまで続いた。

現在は祭壇に飾り祭日に赤飯を上げるだけで、キモノも折を見て着せている。

〔事例 四〕 宗像明一家 飯豊宇三王堂

宗像明一家のオシチメイサマは、曾祖母のトクが守りをしていた。

オシチメイサマの型態は、男女二神一対の露頭型で、体長は男神が二九・五センチメートル、女神が二八・五センチメートルで男神が女神より長い。露頭の部分は男神が九・五センチメートル、女神一一センチメートルと女神が長い。女神が束髪の上に冠を冠っているからである。それに両神とも顔に金粉が施されている。また、男神の胴体に「滝根村大字広瀬字小袋内」の墨書銘があり、女神にも年号が記されているが判読できない。この胴体の墨書銘から隣村の滝根村(町)から伝承されたことが分かる。

宗像明一家の伝承として、この神は外に出ることが好きであるが、他の家に泊まることを嫌いで泊まることなく帰ってくるという。また、子供が好きで、子供が背中に負って歩いたものであるといわれる。

お告げもよく当たる神で、当たった人はお土産とキモノを持って来た。オシチメイサマのキモノが一杯になると、そのキモノは宗像家の氏神である権現様に納めていたという。

現在はオシチメイサマは神棚に上げて安置するが、年一回、年の暮の二十九日にキモノを着せている。

〔事例 五〕 神明神社 浮金宇上合内

オシチメイサマは神明神社内の木製の小祠内に祀られている。

御神体は首が長く、キモノをダルマのように着ぶくれている。一体の胴体に「伊勢神明 天照皇太神宮」の墨書銘があるが、一体は顔が判別できない程摩耗している。銘もない。

キモノは四角の布片の中央に首を通す穴をあけた貫頭衣である。

この神明神社のオシチメイサマの伝承については不明である。なお、同社内に八天狗の木札があるが、このオシチメイサマと関係があるのか、これも不明である。

〔事例 六〕 先崎三郎家 小野赤沼宇宮ノ下

先崎家は代々神主である。オシチメイサマは遥拝所の中に安置されているが、このオシチメイサマは谷津作の先崎徳重の母、村上サワ媼が守りをしていたが昭和四



大竹スミ家のオシンメイサマ

と言われている。

先崎家のオシンメイサマの型態は、男女二神一対の露頭型で、男神は目鼻がどうか判別できるが、女神は摩耗して判別ができない。

体長は共に二八センチメートル、露頭部が木であるが、胴体は竹で細竹を束にしたものである。木と竹を継いだ珍しいオシンメイサマと言うことができる。竹の部分は手油で飴色の光沢があり、大分使用されたことを物語っている。

〔事例 七〕 西牧正良家 上羽出庭字辻ノ内

叔母の西牧ナツがオシンメイサマの守りをしてきた。ナツには神が憑き、そのお告げがよく当たり、訪ねてくる人が多かったという。オシンメイサマの祭日は十二月二十八日で、赤飯を炊いて上げていた。また、屋敷の人々が集まってオシンメイサマを遊ばせた。

ナツは大正・昭和の戦前までは、南会津・須賀川・石川地方までオシンメイサマを持って歩いてしたが、戦時中は東京に居住し、戦後に塩庭に落ち着いた。

昭和五十一年にナツの娘が、オシンメイサマの守りをするため持っていったので、現在は東京都世田谷にあるナツの娘の居宅に移っている。

〔事例 八〕 大竹スミ家 塩庭字阿生田

大竹家のオシンメイサマの伝承は、昭和初期に近所の彦治宅にオシンメイ婆さんが厄介として泊まっていたが、ある日、オシンメイ婆さんの息子が婆さんを連れ戻しにきた。柳行李に入っただまま彦治宅に置き去りにされたオシンメイサマが現在大竹家で所有するものである。彦治宅に置き去りにされたオシンメイサマは、その後、大竹クニ女がお守りするようになった。クニ女が守りをするようになってからオシンメイサマが外に出たくなると、クニ女の足が痛さを感じるようになった。

り、クニ女はオシンメイサマを背負って歩くようになった。そして歩く度ごとにキモノを着せる。クニ女は和名田・三坂・塩庭周辺を持って歩きオシンメイサマを遊ばせていた。この状態はクニ女が昭和三十五年(六十)に亡くなるまで続いたという。

オシンメイサマの祭日は特になく、現在は柳行李に入れて神棚の上上げておく。(鹿野 正男)

### 三 講

近世期における村定めのなかには、村人達の休み日を定めたものや、村の中で行われる講の日を制限したものがあつた。神仏を祀る日は慎しみの日であるだけに、休み日となり、作止めが行われるもので、それだけに休み日とか講の催される日については村人は深い関心を持っていたものである。

村組の中で定められた日に行う講は、村落生活と直接結びつく集団が中心となつて形成されているもので、この講が村の中で果たす役割は大きなものがあつたと考えられる。

また、当時は特に楽しみのない時代であつただけに、宿に集まり、持ち寄つて来た材料で料理を作り、様々な話題に花を咲かせることは、信仰の名を仮つたものであつたにせよ楽しみなことであつた。

それだけに村定めのなかで休み日や講の日を制限していることは、一面において村人の活力が余りにも高まることを恐れたり、反面遊惰に流れることを恐れた為政者側からの制約でもあつたのである。

#### お日待講

お日待講について小野新町の本町では、昔は正・五・九月の三回行われていた様だったが、次第に新の一月の適当な日選ばれて行われる程度になつてしまつた。

この日は前夜から参籠して沐浴齋戒して心身を浄め、翌朝、朝日の出るのを拝し供物を献じる行事であつたが、これも次第に変わり、行政区内の種々な協議事項を決定するための集まりとなつてしまつたといつていい。

お日待ち本来の姿は、同じ信仰を持つ仲間が、ある特定の日に一夜を眠らないで籠り明かすことであつたといわれている。これが時代の流れの中で、信仰的な要素から社交的な要素へ変化している様である。

夏井では、お日待ち講は主として五十歳以上の戸主の集まりで、宿は回り番で持たれ、宿で一夜を過ごした後、太陽に酒肴を供えて拜むことが行われていたといっているが、本町の場合同様、お日待ちは大陽崇拜に基づくものであつた様だ。

小野赤沼では、お日待ちは昔は年に三回行われていたが、ここでも今では一回となつている。三回とは、正・五・九月の初巳の日であるという、また塩庭・南田原井においても巳の日がお日待ちであるという。

巳の日といつても、実際には辰の日にお籠りを行い巳の日を持つことになるもので、この講を巳待講ともいっている。巳の日は弁財天の縁日であり、巳は蛇であり、蛇は弁財天のお使いとされ、養蚕農家では蚕の守護神として蛇を大切に扱っていたから、巳待講はこの様な面からの信仰ともいえるのである。

小野新町の町内の一部には、お日待ちは元日か旧二月の初午に行うという所がある。旧二月初めに午のある年は火事が多いといわれ、初午に火伏せの祈願がされ、お日待ちが行われる所も全国的には多く見られている。町内での初午のお日待ちは火伏せの信仰からといえる様だ。

皮籠石では、正・五・九月の三回の巳の日の他に、土用の丑の日にもお日待ちが行われていたという。土用の丑の日は、稲の育成を願う田の行事が各地で行われているもので、青祈禱などともいわれている日である。ここでも、土用に行うことはそのことと関わりがあつたのかも知れない。今でも土地の人達は、お日待ちには村内安全を祈願するものだといっている。

南田原井の武田では、お日待ちは若い人達によつて行われるもので、正月の初巳の日に集まつてお天道さまを拜むものだといふことを聞いた。

この様に、お日待ちと呼ばれる信仰は、太陽(お天道)、弁財天或いは蛇、火伏せ、稲祈禱などその信仰対象も様々であり、それぞれの土地での特色が見られるのである。

さらに広義的にいえば、庚申の日の庚申講、甲子の日の甲子講などもお籠りをし日の出を拜することからお日待ちともいわれているものである。

お日待ちを行う世代層も、南田原井武田の様に若者達であることもあるが、一般には戸主層によつて行われている。また、その規模も、近隣組単位のものから、洞組、村(区)までの単位で行われているものまで見られるのである。

### 山の神講

一般に、山の神というと、狩猟や植林・伐採・山出し・炭焼きなどの山仕事に関わっている人達が、村部の農民の間においても、また、海浜で漁業に携わっている漁民の間においても、古くからそれぞれの仕事における神として厚く祀られていた神なのである。

このことは、小野町においても、各地の山の神に対する祈願内容や、祭りの日などがわずかではあるが違つており、この神への信仰が決して単純に整理出来るものでないことを示している。

山の神の祭り日について、小野山神その他の土地においては、春は新暦の二月十日であり秋は旧暦の十月十日であるといふ。しかし、飯豊田尻あたりでは、春は旧暦二月十日と旧暦十月十日であるといつていたり、小野赤沼では新暦正月十日と旧暦十月十日であるという様に、祭りが違つており、統一されていないのである。

農村部における山の神は、春になると山から降りられて田の神となり、また秋になると山に帰られて行く神であると信ぜられており、この春と秋には、山の神を祀ることが全国的に見られているのだが、切り替わる日が何時なのかとなると、各地で異なっている様でもある。

山の神講の集まりを持つ人々も、その構成には土地に依つての違いが見られるものである。小野町においては山の神講は若者達の集まりだといふ所も多く、小野山神では、一八歳から三五歳までの若連の集まりだといふ。

また、山の神は百姓の神だから百姓をやっている者(戸主)の集まりであるとか、和名田の様に、崇敬者は女性が主体であつて男性は世話役に回るものだといふ所もある。



山の神 (淨金)

女性が山の神を崇敬する主体者であるということは、この神はお産に関わる神としても信ぜられていることに依るものである。

山の神の祭り日には山に入らないこと、木を切らないこと、畑に入らないこと、野菜を取らないことなどの禁があったと葛蒲谷ではいっていたが、吉野辺ではこの他大根畑には入らないことなどが付け加わっていた。

また、小野赤沼では山の神の祭り日には佐須(相馬郡飯館村)の山の神様に代参が出されたものだといっていたが、古くは佐須へ

の代参は各地でも行われていたものであろう。

山の神講の集まりは、回り番の宿で行われていたというのが一般的であるが、小野山神では午前十時頃から集まり、宿から煮炊きの道具を借り、買物人が用意した品物と宿から提供された野菜で料理を作った。

昼食は簡単に行い、夕食には本膳が作られ神に供えられた。若連の世話人が料理の作り方や礼儀作法を指導するもので、料理と洗いは新参人が当たり、買物人は宿の前後の者になるものであったという。

吉野辺では、宿での料理作りは講員(集善の若者連)があたり、女手は一切入れないといっていたが、この様なことは、飯豊下組その他でもいっていたから、山の神は男の祀る神と信じられていた所が多い様でもある。

また、飯豊の田尻では、若連が宿元を集まり、会費・米を持ち寄り、男だけで料理一切を行いお祭りをするものであったが、お産から二十一日たたない家の者、葬式から四十九日がたたない家の者は出席は遠慮するものであったし、宿元も次に回るものであったという様な厳しい禁忌も見られるのである。

山の神様は田の神で、五穀豊穡を祈願するものと小野山神ではいっていたが、和名田では山仕事での災難除けを祈願し

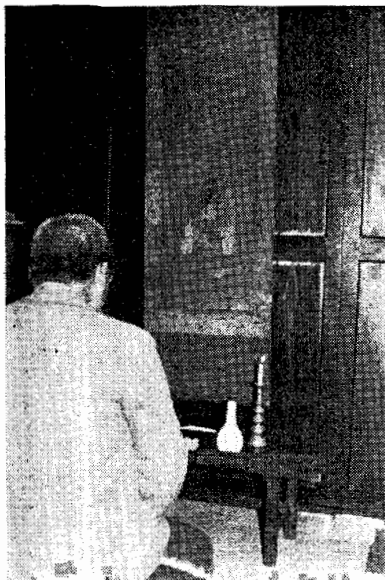
たりするが、農耕作の神であり災厄消除の神でもあるといい、また、妊婦の守り神でもあるといつて、多面的な祈願がなされている。

宿ではご馳走(料理)を作り祈願が行われるだけではなく、春は藁細工を作ったり、秋は農作物の研究体験などを話し合うと飯豊や小野山神ではいっていたが、この様なことから、山の神講はかつての村の中でも中心的な信仰集団であったことを知るのである。

地神講 「じじん」講と呼ぶ、吉野辺ではこの「じじん」講は、昔は春と秋の社日に行い、この日はうどんの食べ放題の日で、八盛ケンジ(男)、八杯乙女(女)などと呼ばれる大食らいの人も出たものだという。

社日とは、春分と秋分の日にも最も近い戌(うし)の日が当てられ、春の社日は種子播きの、秋の社日は収穫の、それぞれ重要な時期に当たることから、大切な節日とされていたのである。

小野赤沼では、地神は百姓の神で、この講の集まりの晩には宿で寝ることは出来なかったし、料理は女手を一切入れさないといい様に、大変に厳しいおきてがあった。



庚申講 (小戸神)

また、宿で男だけで餅を搗くが、餅を搗いた臼のけい、湯まで捨てないで、皆で飲みほさなければならなかった。そして、お籠りをし五穀成就を祈ったことから、「おこもり」講ともいわれていたという。

庚申講 中国の道教の説に、人体の中には三戸(さんし)の

虫(ちゅう)が住んでおり、千支(ちんし)の庚申(かのえん)の日になると、その人が眠るのを待って天帝のもとに行き、その人の日常行っている罪過を全て報告し寿命を縮めるという説がある。



このため庚申の夜には、三戸の虫の上訴を防ぐため、夜は慎み深く善事を積んで、禍を福に転ずる様に、青面金剛を祀り、般若心経を唱えたり、神呪を唱えると靈験があらたかであるといわれている。小野町においても、かつては庚申の信仰が盛んに行われていたものであるが、現在では、古い信仰形態を残している地は見られなくなりました。

ただ、小戸神の郡司房之助氏より、比較的詳細に古態を伝える話を聞くことが出来たので記して置きたい。

「庚申講は、その年の最初の申の日に行う、昔から庚申様の掛け軸を宿となった家で掛けて拜むのだが、講中の者は、家で入浴をして正装(よそ行きの様)をして夕方方には宿に集まる。

掛け軸の前で『こうしんで、こうしんで、まえとり、まえとりそわか』とお祈りを夕飯前に一回(一回は三十六)と、解散前に一回唱える。この時、一番の長老がひょうしぎを叩き、二番目の方がそろばんを持っていて、唱えた数を計算する。

昔は、この晩には投げ餅をして、大ばん振る舞いもしたという。庚申様は平安時代からすでに信仰されていた靈験あらたかな神であり、庶民的な神であるといひ伝えられていた。

庚申の晩には、三戸の虫が体内から出て、天帝に告げ口をするから、本来は寝ないものといわれていたが、今では申の刻までやると解散する。

昔は、この晩に夫婦の交わりをすると良くないとか、そのために生まれた子供は泥棒になるとかというこもいわれていた。

宿は一年交代であるが、宿の後先の家が種々世話をする、集まるときは、各々会費を持つてくるが、昔は野菜や米を持ち寄った。この晩は魚を食べることは禁じられていた。

料理のお手伝いも、宿の後先の人々がやってくれた。現在も、昔使っていた庚申箸(お日持ちにも使)が残っている。庚申講の記録としては天保から(天保十五年・弘化二年・元治元年)、(安政三年・慶応二年・明治三年)の帳簿が残っている。元文年間には十二戸で講を行っていた

という。」

庚申講に掛ける掛け軸は青面金剛であったり猿田彦であったりするが、青面金剛は六本の手のある神さまで、六本の手で作物を作るので作神さまとして祀っている所も多い。

夏井では、昔は庚申様の夜に集落の人々が集まって、一年の計画や予算をたてたものだというが、庚申講は村の中では戸主組としての役割も果たしており、この様なことから村のことについて話し合うことが行われていたものなのである。

### 甲子講

甲子講は、六十日に一回おとずれる干支の甲子の日に、同信の者が集まり、大黒天の掛け軸をかけて礼拝をする講である。

吉野辺では、甲子講とは呼ばず、大黒講といい、大黒天を祀る。新の二月八日が祭り日であるというから、今では甲子の日とは関係がなくなっている。

『いわき』の夏井普波にある大國魂神社に代参を出すのが、これは、洞中の行事であり、代参には男に女を含め五人が出かけるものであったという。

また、雁股田では、昔は大字の下の外れに大黒天が、上の外れに恵比寿の石像が置いてあり、大黒天の祭りは甲子の日となっていた、この甲子の日には豆めしを炊いて供えるものであったが、甲子講と呼ばれる講はなかったといっていた。

大黒天は村の神というより、家の神、田の神として祀られていたから、かつては講中ほどこの村にもあったものなのだろうが、現在では逆にその講の姿を見ることが無くなってしまった。

### 雷神講

大倉では、六月六日(元は旧五)に三渡神社の境内にある雷神様に、集落全員が参拝する仕来りがあった。またこの日は、作止め(朝飯前は仕事をしても)となった。雷神様は、農業の大事な神様だから、作止めに違

反した者は、酒を一升から二升程出さなければならぬという申し合わせがあった。祭りは洞代表三名が執行するもので、昔は順回りの宿があって、各自お煮しめなどを持ち寄って集まったものであったが、今は舞殿に会費制で集まり、豆腐位を買って来て宴を行う程度となった。しかし、家に依って、赤飯を炊いて雷神

産婦はお産が楽になるものともいわれていたという。  
 たらいに二十三夜の月を写して拝むという所が多いが、菖蒲谷では廊下に水とおさごをあげて拝むと、養蚕があたり、  
 二十三夜さまには、金銭に不自由しないとか、安産・子育てとか・蚕の神さまだからとか種々な願いがかけられ信仰の  
 幅が広いものであったが、現在では、次第に婦人達のレクリエーションの集まりとなり、旅行の計画が立てられたり、研  
 修が行われたりする様になって来た。



十九夜講 (小野赤沼)

様にお供えをしているという。

雷神様の祭りは六の日という所が多く、本飯豊では、五月から九月までの  
 毎月六日が祭礼で、本飯豊の全戸が信仰しているという。

また、飯豊下組では、旧四月六日から九月六日まで、毎月六日に集まって雷  
 神様に参詣するもので、宿にご馳走を持ち寄り、当日はやはり作止めといって  
 農休日となったという。

#### 十九夜講

十九夜講は、主婦や嫁さん達の集まりだと上羽出庭ではい  
 っていたが、月の十九日に婦人だけが宿となった家に集まり、  
 月の出を待ち十九夜様を拝する講である。

夏井では、三月十九日が集落の十九夜講の集まりで、十九夜様は安産の神様  
 といわれており妊婦の人が厚く信仰していたものだといっていたが、十九夜講  
 は子安講ともいわれ、安産を祈願することは各地で行われていた。

浮金の中組では、十九夜は如意輪観音を祀るといい、中洞女人講中として昔  
 からこの講は続けられていた。昔は掛け軸の箱の中に赤い帯が入っており、お産の時に借りて腹に巻くと安産だといわれ  
 ていたという。

この十九夜講も、土地によって講の持たれる日が違っていたり、信仰の内容にもその土地の特色があったりしている。  
 和名田では、三月十九日に回り番の宿で持たれるが、ここでは子育て祈願が行われる他、女一九歳の厄払いとしても信  
 仰されているものだともいっていた。

また、南田原井では、旧三月十九日に年輩の婦人達がお寺に集まり、十九夜和讃を鉦を叩き数珠繰りをしながら称える  
 が、それが終わるとお寺の坊さんの話を聞いたり、甘酒を頂いたりしたものだという。

#### 二十三夜講

二十三夜の月の出を待つて拝む信者の講が二十三夜講であるが、男も女も無く加入している所と、  
 女だけの講となっている所がある。

また、二十三夜は勢至菩薩を祀るといふ所が多いが、月の下弦の頃にお籠りをして神を迎え祀るものといっている所も  
 ある。

小野町の場合には、一般的に婦人による講となっているが、地区によって信仰態度はやや異なっている様である。

浮金では、一月二十三日の夜に、婦人達がこわめし等を持ち寄って宿に集まり、二十三夜のお月様が昇るまで待つて拝  
 んだという。

二十三夜の月の出は、夜の九ツ時といわれ、今の午後十二時頃であったから、遅い月の出を昔から「横にもなるな三夜  
 待ち」といわれ起きて待つていたものという。

宿は他の講の場合と同じく回り宿であるが、婦人達の集まりだけに、ご馳走を宿で作る所が多く、なかには小戸神の様  
 にご馳走は宿持ちという所もある。

飯豊の下組では、二十三夜講は集落の中・高年の婦人が集まるもので、ご馳走を作って月の出を待ちながら雑談をし楽  
 しむが、月が現れるとそれを拝み、月の光で針に糸を通すとお針の腕があがるものともいっていた。

宿となった家では、講中が回り持ちをしている二十三夜さまの掛け軸を掛け、お燈明をかかげ、線香を立て、宿で作っ  
 た団子や煮しめなどを供えるが、この際の団子の数は二十三個である。

たらいに二十三夜の月を写して拝むという所が多いが、菖蒲谷では廊下に水とおさごをあげて拝むと、養蚕があたり、  
 産婦はお産が楽になるものともいわれていたという。

二十三夜さまには、金銭に不自由しないとか、安産・子育てとか・蚕の神さまだからとか種々な願いがかけられ信仰の  
 幅が広いものであったが、現在では、次第に婦人達のレクリエーションの集まりとなり、旅行の計画が立てられたり、研  
 修が行われたりする様になって来た。



数珠ぐり (吉野辺)

### 地蔵講

路傍にあるお堂のなかに、子供用の漣掛けや輪袈裟を着けたり、帽子をかぶっている地蔵尊を良く見かける。賽の河原で、石積みをしなから父母への功德を願っている子供達を、温かく見守っていて下さる仏が地蔵尊であるからと、子供との関わりが地蔵には掛けられている。

和名田では、春二月二十四日と秋十月二十四日に、地蔵堂の境内に若妻から老婦人までの婦人全員と子供達が集まりお祭りをする。

地蔵尊に新しい着物を供え(これはお産が近)、ローソクを灯し、餅などを供え、参詣した後に定められた宿に揃って、持ち寄った手作りの餅・オニギリ・煮しめなどを出し合い、お神酒を頂きながら産婦の安産や子供達の無事成長を祈願するといふ。

地蔵講においては、子持ちの主婦や若い嫁が加入し、子育て、子安が祈願されるものだという所は多く(塩屋・上羽出)みられている。

また、飯豊下組では、三月と九月の二十四日が地蔵講の祭りで、主として婦人達の集まりであったが子供達も集まったもので、地蔵和讃(賽の河原)を唱和し、数珠繰りなどを行っていたといふ(内(地蔵信仰)の(供養塔参照))。

### 淡島講とその他の女人講

昔の女の人は、ただ働いただけで、その他には何の楽しみもなかったものだと言われている。しかし、僅かではあってもどこかに息抜きをする場所がなければやり切れたものではない、その様な息抜きの場所が講であったといっても過言ではない。

この様な女の人達のための講としては、子安・子育てを願う十九夜・二十三夜の様な、月待ちの信仰の講が一般的に知られているが、この他にも種々な形での講が持たれていたものである。

淡島(粟島)講は女人の講として全国的に有名であり、各地に特色のある祭りが行われている。淡島様の本社は和歌山県にあるといふ。婦人病に霊験あらたかであるとして近世では盛んに祀られていた。

夏井では、新暦の二月八日がお祭りだという。ここでは、机または祭壇に豆腐を供えて、それに不用となった針を刺し

て供養をし、裁縫の上達を願ったというから、針供養の行事と交り合ってしまった様だ。

塩庭の神山では、粟島社のお祭りは毎年十一月十五日で、塩庭上組の二十戸程の婦人が集まり講を開いたものだという。また、小野赤沼では明治年代に、女の人が集まって淡島様のお祭りを年に一回、春に行うものであったといっているが、その講の詳細については不明である。

女人の講は、女の人自身のための講というよりも、やはり、子安・子育てを祈願することが中心となってしまうのは人情なのかも知れない。

女人の講としてはお釜講や薬師講などもあったという。小野赤沼では、明治から大正の初期の頃まで、洞の女の人達が集まり、ご馳走を作り、お釜様の祭りをしたという。また、上羽出庭でも、お釜講は主婦の講として開かれ、かまどの供養をしたものだともいっていた。

この他、小野新町の仲町・本町や小野赤沼には、八月三十日に「いわき」の赤井嶽薬師様に参詣する女人講中があったというが、これも子安・子育ての講である。

### 念仏講

いままで見て来た様に、村の中には性別・世代別の集団があり、その集団がそれぞれ民間信仰と結びついているが、お年寄り達による集団は多く念仏講などと呼ばれていた様である。

吉野辺では、今でもお年寄りによる念仏講が行われている所もあるといふが、これは、葬式の時にお年寄りによって鉦などが叩かれ、念仏が唱えられるものであるといふ。

上羽出庭では、念仏講は既に五十年前程前にその姿を見ることが無くなってしまったが、かつては、どの家にも数珠・鉦太鼓などの道具があり、定まった日

には、お年寄りがお寺に集まり和讃などを唱えていたものであるという。

また小野新町の本町では、念仏講のことをじゅずくり講ともいっているが、三月二十五日に集まって数珠繰りを行っていたもので、浄土真宗の人がやっていたのではないかともいっていた。

念仏講は、かつての村の中にはどこにでも見られていたものだが、今ではほとんどその姿を見ることが出来ない。

昔は、家の内や村の中での第一線を退いたお年寄りによって、村の鎮守の祭礼の準備をしたり、晴天が続いて雨乞いが行われれば天道念仏の様な祈願を行ったり、疫病が流行した時には道切りや百万遍の様な疫神退散の祈願が行われたりしたものであった。

今の、お年寄りは、地域でのこの様な立場を求めることもなくなってしまっただけに、念仏講の様な信仰的な集まりでない新しい形での集まりが地域で求められて来ている。

### 天神講

天神様を祀る子供達の講中である。天神様は菅原道真であるが、子供達のなかでの天神様は学問の神様・書道の神様としての道真が信仰されている。

吉野辺の滝では、天神講には六歳から一五歳までの子供が加入していたもので、毎年三月二十五日に回り宿で祭りが行われていたが、今では滝子供会となり、日曜日に天満宮など神社・お堂・小祠の清掃をしているという。

小野赤沼では、五・六歳位から一六歳位までが加入していたもので、三月に天神様を祀ってお祭りをしていたという、宿は子供のある家で順番に回ることになっていたという。

いままで見えて来た様に、かつての村のなかでは、子供達の天神講に始まり、お年寄りの念仏講まで、世代別性別に構成された集団が、それぞれの神仏を信仰する中で講中をなしていたのである。

### 恵比寿講

恵比寿さまは、農家にとっては作神・田の神として祀られているが、商家にとっては商いの神として祀られている。

菖蒲谷では、恵比寿講は旧十月二十日と正月二十日であるといっていたが、一般には旧十月二十日は商家の恵比寿講と

いわれ、正月二十日が農家の祀る日ともいわれている。

商家では、この日の朝、恵比寿・大黒天の前に生きた鮒やどじょうをお供えするが、小野新町の仲町では、この日の朝になると、えびすこ商いだといって、鮒一匹を五万両だ十万両だといって売りに来ていたものを買って供えたものだった。

また、床の間に祀った恵比寿・大黒天の前には、現金や貯金通帳、尾頭付の魚、ご飯の大高盛なども供えられ、恵比寿さまは商人の神様だからといって、この日は特にお得意様を招いて、芸者をあげ一日賑やかにやる商家もあったという。

### 太子講

聖徳太子を祀る職人集団の講を太子講と呼んでいる。聖徳太子は曲尺を發明された方であるとか種々附会された伝説のなかで、大工・左官・石工・鍛冶・桶屋などの職人に古くから信仰されている。

しかし、この講は同業者組合の集まりの様な性格もあり、宿となった家では、床の間に聖徳太子の掛け軸を掛け供え物をして祀るが、その後同業者の賃金の協定や申し合わせなどが行われているものである。

### 観音講・

観音は、地藏と共に庶民に親しまれて来た仏だけに、子安・子育てから馬四守護の仏として幅広く信仰されている。

### 妙見講

浮金に、中洞女人講中建立と刻まれた如意輪観音の石像があるが、子安、子育てを願う観音は大方が如意輪観音であり、この観音を祀る婦人達の講中を観音講といっている所もある。

また、馬頭観音を祀る観音講もある。この観音には馬四守護を願うことが見られている。小野赤沼では、三月十七日に観音講の祭りが行われるが、かつて、この日は東堂山の祭礼でもあったので東堂講が作られ、講中の人達が集まって東堂山に参詣に行ってきた。東堂山では良い仔馬が生まれます様にとお千度をあげて来るが、戻って来てから講中全員で精進あげを行ったという。

浮金では、四月八日は馬の祭り日で、この日には大滝根や高柴山の妙見さまに行ったり、東堂山の観音(聖観音)さまに行ってお参りをしたものだという。



不動尊祭禮 (小野赤沼)

馬匹の守護を妙見尊に願う妙見講が夏井と湯沢にあった。夏井では、この講には農家の男女全員が加入するもので、湯沢との境界に妙見神社の分霊を遷し、夏至の日を祭り日として講員が参拝をした、また、この日には糯米五合と会費若干を集めて宴を開いたという。

湯沢では、妙見講は相馬原町の太田神社の講中で、仔馬の安産や病気にならない様にと、七月中旬に講中をつくり参拝したり、毎年正月元日に六〜七人が代参をしたものであったという。

### 代参講

小戸神では、代参講として湯殿山講・金華山講・古峰原講などがあったものだといっていたが、ほとんどの地にこの様な代参講と呼ばれていた信仰集団は見られていたものであった。

この代参講とは、村外の遠隔の地にある有名な社寺に参るもので、霊験あらたかな神仏を信仰しようとする同信者による集団であるが、費用などの都合から、毎年一定の人数を選び、交替で参拝をしている講中である。

講の規模は、小人数のものから村組全戸が加入しているもの迄あり、また、代参者の選び方などにも土地による特色があり、講の形も決して一様ではない。

かつては、代参者と決まった者が行う潔斎の場である行屋が、どこの村にもあったが今では見ることが出来ない。また、代参者の家族が守るべき禁忌などもあったが、これも次第に話を聞くことが困難となって来た。

代参者を、村境まで村人が見送るサカオクリや、帰村の際に出迎えるサカムカイの行事なども今では殆んど昔語りとなつてしまった。

白装束の行衣や、かさ・杖などは昔のままであっても、自動車や列車に乗り出かける現在の代参は、のどかであり、遊山的でさえある。

### 三山講

三山講とは、出羽の月山・湯殿山・羽黒山に参る講中のことであるが、単独にそれぞれのお山に参る月山講・湯殿講と呼ぶ講中もある。

出羽の三山は、中世頃から修験の山として知られていたが、近世になると作神を祀るとして、農村部からの信仰も盛ん

となった。

吉野辺で、昔は、月山講が盛んで、一家の柱となる者は、一生の内一度は参る山とされ、五穀豊穰・家内安全・無病息災をこの山で祈念することは男の勤めとされていたものだという話を聞いたが、この様な中で三山への信仰層が厚くなつたものなのであろう。

三山への参拝は大方は代参講の形をとっている。各村組により講員の数は異なっていたろうが、三年から五・六年で一回りする様になっていた。

各村組には講の世話人が居り、三・四人から五・六人が一組として、世話人の先達で出かけて行くが、出発の前の何日かは、行屋に籠って水垢離をとり、別火生活を送って潔斎をした。

小野赤沼では、村内の上・中・下組にそれぞれ行屋があり、ここで水垢離をとってお籠りをしたという。

湯沢では、七月中旬頃、参拝のための身体清めの行事があり、七日間代参者は今の湯沢神社で別火し、身体を清めて出かけていったという。

また、夏井では、三山参りに出かける代参者は、一週間前から神社に集まり、水垢離をとり、一汁一菜にして祈願潔斎をしてから出発をしたという。

出発の朝は、早くから水垢離をとり、新しい行衣を身につけ、神社に参拝をし、講員や家族に村境まで見送られて出発をした、この村境までの見送りのことをサカオクリといっている。

代参者の家では、陰膳を据えて道中の安全を祈っていたものだが、小野赤沼では、家人は無事にお山から帰って来る様にと行屋でお籠りをしていたという。また、代参者の家に対しては、組の人が馬の草刈りをするなどの手伝いをし

たり、夜は行屋でお籠りをしたり、お山かけの日ともなると、組の人も言葉遣いなどを気を付けたものだった。夏井でも、代参者の家族は、陰膳を据え、一カ所に集まり数珠繰りをして、その無事を祈っていたというから、この三山参りは村を挙げての信仰行事ということが出来る。

それだけに、無事お山かけを済まして帰村ともなると、村人達はサカムカイと称して村境まで出迎えたものであった。帰村後、代参者は行屋に戻り、神社に参詣し無事帰村の報告をし、受けて来たお札を講中の人達に配った。

#### 古峰原講

吉野辺では、古峰神社から受けて来たお札を笹に刺したものを「けんざき」といい、これを近所で火事があつたときに表に立てると、火を防いでくれるという伝えがあつたという。

飯豊では、古峰神社からのお札を、蔵の前に貼って置くことと泥棒除けとなるといわれていた。また、台風の前になると、村境に古峰神社のお札を立ててくることも行われていたという。

この様に、古峰神社は、火伏せ・盗難除け・五穀豊穡の靈験があらたかな社として、古くから広範な地で信仰されていたものであり、それだけに、下野(しもがら)の本社(現在の栃木県)に参拝する講中は多い。

吉野辺では、古峰神社の講中は、滝・坊内・関場の洞で構成している吉野辺講中と、風越講中・遠上仲神講中があり、今でも、それぞれが代参を出しているという。

夏井でも、集落全戸が加入(五五名)し毎年代参を出しているというが、古峰原講中はかつての村・洞組毎の単位で構成されている例が多い。

皮籠石では、昔から大字の各戸が参加して、古峰神社の講を行って来た。火災・盗難の予防祈願を大字の行事として実施して来たものだ。講の参加者は世帯主であり、代参は一年に春と秋の二回に分け、五人ずつで参拝して来たものだった。代参者はどこの集落も五・六名という程度である。

小野赤沼では、古峰様は火の神様として祀られお祭りをするもので、春は四月五日・秋は九月五日が祭りだといっている。

たが、代参も春・秋二回の所が多い。

代参者を決める方法は各地でやや異なる様だが、湯沢では正月元日にくじびきをして決めるといい、また、三山講と同じく水垢離をとり、栃木の本社に参拝し、祈禱の後お札を受けて戻り、講員の出迎えを受けて、お札を配布するものであつたという。

塩庭では、日天前の古峰神社の祭礼は毎年四月二十五日となっており、塩庭二区一同の祭礼で、その日は消防団がポンプの操作試運転を実施する日でもあつたという。

小野赤沼では、土用の入りに、集落一同の者が古峰神社に集まり、養笠をかぶり、酒を飲んでほなることをしていた時があつたというが、これは雨乞いの行事なのであろう。

この様に、古峰神社への信仰は、代参講という面だけでなく、村組のなかで行われていた習俗行事との関わりからも、見るべきものがある。

#### 飯豊講

飯豊山は、福島・新潟・山形の境にある二、一〇五メートルの靈山である。このお山は、古くから稲作信仰の山として知られており、会津・中通り地方には、飯豊講中が多い。

阿武隈山系の地域や浜通り地方にはこの講中は余り聞くことがなく、それだけに小野町内でも、その存在が確認出来たのは吉野辺だけであつた。

このお山の「御山開き」は、旧八月の朔日、太陽暦の九月一日であつた、険しいお山駈は決死の覚悟ともいわれていたことから、それだけに、かつては修験の道に入った人だけでなく、若者に対する錬成の場ともなっていたのである。会津地方では数えて十三歳に達すると、成人社会への加入儀礼としての初参詣が行われていたことは良く知られていることである。

吉野辺では、昔は飯豊山へのお山駈は一五歳位であつた様だといっていたから、この地でも成人儀礼としての初参詣は行われていたものなのであろう。

また、二〇歳前に三回登ると、お金とお米に不自由はしないものだといわれており、お米を三升持って行き、撒きながら登ったものだという。

しかし、この地でも、講中としての飯豊講がどの様に結ばれていたのか、代参の選出はどの様にしたのかについては全く分からない。

#### 伊勢講

伊勢神宮へ代参する講。お伊勢様への参拝は一生に一度はと昔からいわれ、人々の念願であった。

よく各地に、伊勢参道中記なる近世期の記録を見るが、これには単に伊勢神宮参拝だけでなく、各地にある有名社寺を遍歴したりしたことが記されて居り、やや物見遊山的な要素が含まれている。

しかし、一か月位の長旅でもあったことから、莫大な費用がかかり、また、道中での事故、病気にも気を付けなければならなかったから、この講員の結びつきは他の講とはやや異なる面があった。

この様なことから、伊勢参拝に行った講員同志は、本当の兄弟の様に付き合うもので、年始や葬式には実の兄弟の様な付き合いであったと、吉野辺ではいっていた。

また、小野赤沼では、伊勢講で参拝をした仲間を伊勢兄弟といい、また集落の集まりがあると、その年に参拝した人は上座に座らせられたという。

#### 金華山講

金華山神社に参詣する代参講であるが、小野町内では新しい講といえる。吉野辺では、昭和二十四年

にこの講がはじまったもので、二十四名位の講員による代参講であったが、現在は休んでいるという。

金華山神社には二十五歳前に三回参るとお金に不自由しないなどというのを浜通り地方では聞いたが、やはり余り長続きをしていない講の様でもあった。

## 四 石塔・石仏にみる民間信仰

昔の村には、神のいます社や、隣り村との出入り口となる村境と呼ばれる地や、村人達が行き会う村辻と呼ばれる地など、何か所かの神聖視されていた場所があった。

その様な神聖視されていた場所には、神社や祠堂、また神々や仏達の名を刻み込んだ石塔などが造立され祀られていた。いま私達がその様な場所に立っても、それらが何故そこに祀られていたのかが分からなくなってしまう場所も多い。また、そこに祀られているのが、どの様な神であり仏であるのかさえも忘れられかけていることが多い。

村境や村辻の場合には、道路改修により大きく変ぼうしている所も多く、ひっそりと旧道の草に埋もれてしまった石塔や、原位置から遠く離れた所に移動させられてしまった石塔もある。

昔の村人達が、これらの神や仏達に懸けた願いは何であったかを伝えてくれるご老人も次第に少なくなってしまう。またそれと共に、これらの神や仏達を祀ることが次第に薄れてしまった。

道ばたの石塔に刻み込まれた神や仏達の名を見ると、神社や小祠として祀られている神や、仏寺やお堂に安置されている仏達とは、やや異なった神であり仏達を見る。

この様な神や仏達は、高度の教理を持って、組織化されている宗教教団のなかで祀られている神や仏達ではなく、ごく有りふれた人々の日常生活のなかで生まれ、そして祀られて来た神や仏達なのである。

それだけに、道ばたに祀られている神や仏達は、日本人の原始的宗教にまで逆のぼることが出来る自然神であったり、神道のなかで祀る神であったり、また遠く中国大陸から渡来して土着した仏教や道教などで祀っている仏や神であったりしている。



青面金剛 (飯豊中)

(一) 日待信仰の供養塔

庚申塔 日待の信仰としては、庚申・甲子・己巳などの日の信仰があるが、日待信仰の講中によって造立された供養塔のなかでは、庚申講中による造立の供養塔が一番多く、小野町内だけで一一〇基を数える、これは当町内の全石塔・石仏の一割に当たる数なのである。庚申信仰は、日本の信仰のなかでも古くからみられていたことは知られているが、小野町の場合は、庚申講中が造立した供養塔のなかで記年銘のあるものから推定すると、江戸期中頃から盛んとなったものとみられる。

庚申信仰については、既に庚申講として来てたところであるが、干支という庚申の日の夜に、講中の者が宿に集まって祀るもので、六十日毎の、年六回の庚申の夜は徹夜で祭りが行われていた。

この夜、寝てしまうと、身体の中の三尸の虫が、天帝にその人の日頃の罪過を告げるといわれていたが、現在では、夜半までには解散をしているし、また、年一回位の集まりがある程度となってしまう所が多い。

庚申信仰の講中によって造立された供養塔には、刻字塔と浮彫像の塔とがあるが、刻字塔としては、申・庚申・守庚申・庚申塔・庚申供養塔・青面金剛・青面王・山王社・山王二十一社などを見る。また、浮彫像塔としては青面金剛尊の像塔を見る。供養塔上部に日天・月天が、台座に三猿(見猿・聞か猿・言わ猿)や二鶏などの浮き彫りが刻まれているものもある。

小野新町荒町にある山王社の石塔は、明治四年の造立であるが、戸主の信仰とみられている庚申講のなかで、女五人の講中による造立であり珍しい塔である。

六十年に一度回る庚申の年に、講中により供養塔が造立されたり、庚申塚が作られたりするが、吉野辺の伊達内には庚

申塚があり、そこには青面王と刻まれた明和七年(一七七〇)の庚申塔がある。また、皮籠石の漆平には、お壇さまと呼ぶ石塔があるが、これは庚申壇に祀られた青面金剛像の塔である。この塔は元文五年(一七四〇)に造立したとある。

雁股田の関場にある青面金剛は、享保十四年(一七二九)の像塔であるが、土地ではこの神は六方荒神様だともいっている。一見荒神様の像にも見えるが、庚申の本地仏である青面金剛尊である。青面金剛尊にも二臂のもの四臂のものもあるが六臂のものが多い様である。

湯沢の原にある庚申塔は、文政十一年(一八二八)のものであるが、この庚申様は火の神様・火伏せの神様として祀られている。

小野赤沼の小山崎にある庚申塔は、宝暦十年(一七六〇)のものだが、この庚申様は道案内の神様ともいわれている。庚申は中国の道教思想のなかで祀られており、青面金剛尊はインド仏教のなかでの仏であるが、日本の神としては猿田彦命が当てられている。この猿田彦命は道案内の神としても祀られているところから、庚申＝猿田彦命＝道案内という様な語り伝えとなったものであろう。

この様なことからか、庚申塔を道標の石塔として利用している所も多く。小野赤沼の石橋には、安永九年(一七八〇)の庚申塔があるが、その側面には東堂山への道が刻まれている。また、小戸神の宮の前には、天保九年(一八三八)の庚申塔があるが、この塔には「右みはる・左やまだ」との方向が刻み込まれている。

甲子塔

六十日に一度で回る甲子の日に、宿に集まり、大黒天の掛け軸を掛けて祀るのが甲子講であるが、この講中に依って甲子塔が造立されている。

甲子塔としては、大黒天・子待塔・甲子塔・甲子供養塔・大国主命・大國魂神社(小野山神・仲田所在)と刻まれた刻字塔と、大黒天の立像を見る。

大黒天は、インドでは憤怒相をした荒々しい仏というが、日本では左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持って、米俵の上に立って福よかな尊顔をされた仏として親しまれている。



甲子と大黒天の関係は、大黒天は日本の神である大国主命が習合したのもいわれ、この大国主命とねずみとの関係から、子の日が信仰の中心となったともいわれている(大黒天は北方子の神であるからともいわれる)。

いずれにしても、大黒天・大国主命・ねずみは福をもたらすとして信仰されたものである。

小野町内の甲子塔としては、刻字塔・大黒天像を含め四三基を数えるが、これは庚申塔の半数に満たないことから、庚申信仰とは別の信仰圏のなかで祀られ、造立されたものといえる。

小野山神の百目木には、安永五年(一七七六)造立の大黒天の刻字塔があるが、この塔のある裏山を大黒山と呼んでい

たという。  
上羽出庭の東前には、明治三十年(一八九七)の大黒天の刻字塔があるが、この大黒天は火伏せの神としても祀られ、四月二十日は上羽出庭全戸で祀るとい

う。塩庭の茄子坂には、大黒天と恵比寿とが舟に乗っている像があるというが(年代不明)、恵比寿も七福神の一神として大黒天と共に祀られることもある。また、商店では商業の神としての恵比寿講が、農家では田の神としての恵比寿講が行われている。



巳待塔 (飯豊下)

### 巳待塔

六〇日に一度回ってくる(おちのち)己巳の日を信仰する講中を巳待講というが、かつての村の

集会の日であったお日待ちも巳待であり、また、巳待の本尊である弁才天も巳待講のなかで信仰されている。

この様なことから巳待の供養塔としては、巳待・巳待塔・巳需・巳需塔・巳待供養塔・己巳待供養塔・日需・日需塔・日待などと刻まれた石塔や、弁才天の刻字塔・浮彫像塔などを見る。

小野町内には、巳待・己巳待の刻字塔としては二四基を見るだけであり、量的には少ないといえる(船引町では六二基を見るという)。このなかでは、吉野辺の伊達内にある己巳待供養塔が最も古く明和元年(一七六四)であり、飯豊の新屋敷にある巳待塔の享和二年(一八〇二)が続く。

日需塔としては、一般に記年がなく、吉野辺の滝の塔あたりが古いことになる。また、弁才天は、幕末期の嘉永年間とか元治に造立されたものが多く、これもそれ程古いものは見当たらない。

この様に、巳待の信仰は、造塔の記年から見る限り、庚申や甲子の信仰に比し新しいものと見られるが、お日待ちと呼ばれ巳の日に集まる行事として見ると、庚申などとは異なつた村の大事な祭りのひとつであった様にも考えられるのである。

### (二) 作神信仰の供養塔

山 神 塔 山仕事をする人にとっての守護神であり、春になると山から下られて田の神となられるとして、作神としても信仰されている山神は、山神講の人々によって厚く祀られている。

山神については、女性の神であるとして、出産に立ち会うともいわれ、子安の信仰もみられている。

石塔としての山神は、山神・山神塔・山神尊(浮金字 東地内)・大山祇尊・山津見神社・大山祇神社などと刻まれているのを見

る。  
吉野辺の坊内にある山神塔は、文久元年(一八六一)の造立で、記年銘のある山神塔の中では古いものである。このことは、本来、山神は石塔として祀られるものではなかったことによるものと考えられる。なお、吉野辺では旧二月十日にお祭りをするという。

同じく吉野辺の高柴山にある山津見神社は、牧野組合の守り神として祀られ、同じく棧敷の山津見神社は早渡集落五軒の氏神として祀られている。

上羽出庭の宮作にある大山祇神社の塔は昭和十二年九月六日造立のものであるが、これは出征記念に造立されたもので、

武運長久を祈願したという。

以上の様に、山神信仰は、山の守護神・作神・お産の神・氏神・その他幅の広い信仰として見られているのである。

### 地神塔

ジジンさまと地神のことを呼んでいる。湯沢の登館にある地神の石塔は、天保十年（一八三九）の造立であるが、この地にはかつて地神講があり、厳しい戒律のなかで地神を祀ったという。

地神を作神として祀る所が多く、春と秋の社日に祭っている。南田原井の沼の平にある社日塔は地神信仰のなかで造立されたものである。

社日とは、春分・秋分にもっとも近い前後の戊つちのちの日であり、かつては社日は農事の開始（種まき）・終了（収穫）の日と考えられていたらしい。

飯豊の才土には明治二十九年（一八九六）造立の「大地主神・田神尊」の刻字塔を見るが、これは長窪一族で祀るといふ。地神を田神と併刻していることから作神としてより、大地を司る神として祀られている様である。

飯豊の八幡には、この地の大方氏一族の氏神を祀っている場所があるが、この一隅に、祠も石塔も建てられていないが、氏神祭りには幣束がたてられ、おのりや強飯が供えられている場所がある。ここは地神を祀る所という、地神は大地の神で特に祠も塔も必要としないのだという。

### 雷神塔

既に雷神講の所でこの神については見て来たが、かつての村の中では大切な神であり、この神を祀る六の日は、人々が一切の仕事を止め雷神を祀るため作止めが行われていた。

湯沢の原にある雷神塔は、大正十五年（一九二六）の比較的新しい石塔だが、この塔の造立は同年の旧五月六日と刻まれている。

水不足をきたすと、各地の雷神社に雨乞いが行われたもので、このことから雷神は水神と同じと見られている。また、雷のおちた田に、青竹を立てシメを張って祀ったといわれている様に、雷神は作神としても崇敬されていた。

雷神は平安時代に、御霊信仰と結合し、北野天神と同一視されているが、吉野辺開場の大天神・塩庭品ノ木の天神、吉

野辺風越の天満宮などは道真を祀る石塔といえる。

### 水神塔

弁財天は、弁天さまともいわれ、七福神の一員として祀られているが、水神としても、また、巳待信仰における本尊としても祀られている。

### 弁財天

弁財天の石塔としては飯豊袖山の嘉永三年（一八五〇）のものが古いが、大体は幕末期に集中して造立されている。

飯豊新田内に明治二十九年造立の水波姫命と刻む石塔があるが、これは水神として祀るといふ。

水波姫命とは、『紀記』によると、イザナミの命がこの世において最後に生み落とした神の一神で、ミズノカミミズハメノメであるという。

一般に水神の塔は少なく、飯豊田尻と、谷津作とに年代不明の塔を見るだけである。

しかし稲作農民にとって水は生命であっただけに、池・沼・川からの取り入れ口には水神が祀られているのを見る。

### (三) 月待信仰の供養塔

月待の塔は、十九夜、二十三夜などの各夜の月の出を待って、これを礼拝する講中によって造立された供養塔であるが、月への信仰と仏教とが結びついており、それぞれの月には本尊がある。

小野町内にみられる月待塔は、十九夜塔が主流を占め、次に二十三夜塔である。その他の月待塔はほとんど見られないが、小戸神日向の東堂山には、文久三年（一八六三）造立の七夜待供養の塔がある。

七夜待ちとは、十七夜から二十三夜までの七夜連夜にわたって月待ちをすることであるという。また、飯豊袖山に嘉永元年（一八四八）造立の三日月の塔と、小野山神作の前に造立年代不明の三ヶ月供養塔とを見る。三日月とは、三日の月に礼拝祈願をする月待ちであり、これらも月待塔のなかに含めることになる。

### 十九夜塔

この夜の本尊は如意輪観音であることから、十九夜講中では、宿や寺院に集まり如意輪観音の軸を掛け、その前で十九夜和讃をあげる。

十九夜講は、ほとんどが女人講であるから、安産や育児の祈願が行われ、村の若い婦人は必ずこの講に入ることになっていた所が多い。

十九夜講中による造立の供養塔は、十九夜の刻字塔だけではなく、如意輪観音の浮彫像の造立も行っている。如意輪観音の塔には、墓所にあり女人の墓石として造立されているものもあるので注意しなければならない(今回の調査では、一応墓所内の如意輪観音の塔は除いた)。

十九夜の刻字塔は二十九基を数えたが、その造立年代は幕末期に集中している。また、女人講中による造立と刻まれた如意輪観音の浮彫塔は七基を数える。

浮金中ノ内の十九夜塔は文政五年(一八二二)造立のものだが、台座に西ノ内女人講中と刻まれている。この他、十九夜塔に講中名の刻まれているものとしては、南田原井大墳の女人講中一同(文政三、年遺三)、吉野辺滝の中洞一同(天保三、年遺三)、小野新町仲町の女講中六人(安政六、年遺六)、小野赤沼関根前の赤沼中組(万延三、年遺三)、小戸神李作の洞講中(文久三、年遺三)、夏井町屋の十九夜講一同(明治二、年遺二)、小野新町本町の女人講中一人(不明)、塩庭畑ノ作の講中一〇人(不明)などがある。

如意輪観音像塔としては、吉野辺滝の女講中(享保十、年遺十)、浮金鹿野の善男善女二九人(享保十、年遺十)、飯豊川向の女人九人(享和四、年遺四)、飯豊才士の講中一人(文化十、年遺十)、上羽出庭東前の女人二三人(文化九、年遺九)、浮金越野の中洞女人講中(文政四、年遺四)、飯豊二本木の女講中一人(嘉永六、年遺六)などと刻まれているのを見る。

この様に見ると、上羽出庭東前の如意輪観音像塔の女人二三人は別として、講中の構成は五・六人から一〇人程度であり、ほとんどの洞組に十九夜講が存在していたことが知られるのである。

二十三夜塔

二十三夜に講中の者が宿に集まり、月の出を待ちながら勤行や飲食を共にするのを二十三夜の月待ちとか三夜待ちとか呼んでいる。この夜の月を拝すると財を得るとか、願いごとがかなうものとかいわれ全国的に見られている信仰である(二十三夜、講参照)。

この夜の本尊は勢至菩薩であることから、勢至菩薩の刻字塔も見ると、浮金中之内にある月天供養塔(寛延二年)も二十三



二十三夜塔 (飯豊中)

夜講中により造立されたものである。

浮金北ノ内にある勢至菩薩の塔は元文四年(一七三九)で最も古く、飯豊一盃森にある廿三夜供養塔は寛延二年(一七四九)で続く。

宝曆一基、寛政一基、文化三基、文政四基、嘉永三基、安政一基、慶応一基、大正一基などを見るが、年代不明が一三基を数える。

吉野辺の谷津にある嘉永五年四月二十三日造立の「勢至」の塔には女講中と刻まれている。十九夜講が若い婦人達による子安・子育ての講中であるのに対し、二十三夜は年配の婦人達の講中ともいわれているから、この塔もその様な人々によつて造立されたのかも知れない。

(四) 観音信仰の供養塔

観音は、観世音菩薩または観自在菩薩ともいわれている。観音の功德を説いている『観音経』(観音菩薩經)のなかに、救いを求めて一心に観音の名を念じると、それに応じて三十三の姿に自在に変化し、衆生を救う菩薩とある。それだけに、地藏菩薩と共に、その信仰は広く人々に受けつがれてきた。

三十三の応化身という考え方から、三十三観音巡礼の風習も生じ、各地に三十三所霊場が開かれている。

また、六道の輪廻に苦しむ衆生を救うという意味からの六観音の信仰も盛んで、千手・聖・馬頭・十一面・如意輪・准胝(または不空羅索)の各観音に対する信仰も盛んである。

道ばたや寺の境内などでよく見かける石仏としての観音は、馬頭や如意輪であり、ただ観音さまと呼んでいる場合は如



如意輪観音菩薩 (浮金)

意輪観音であることが多いが、小野山神赤蔵にある安永七年(一七七八)造立の南無観世音菩薩の石塔などは、観音信仰のなかで建てられたものである。

この様な石塔としては、他に小野山神畑田(明治二)、小戸神李作(文三)の南無観世音と刻まれたものを見る。

また、菖蒲谷西田には、文化二年(一八〇五)の南無観世音の道標銘を見る(道しるべ参照)。

如意輪観音菩薩

六観音の一つであり、梵名を「チンターマニラ・チャクラ」と呼ぶ、如意

宝珠、車輪の意という。車輪がどこにでも転がるように、意

のままに出現し、六道の衆生の苦しみを取り除き、利益を与えてくれる菩薩として、広く民間に信仰されていた。

江戸時代以降十九夜の主尊として彫像されているが、右ひざを立て、右手が思惟手である像が多い。

如意輪観音であるが、子安観音として造立されているものには、右もしくは左手で、幼児を抱いているものがある。

如意輪観音に対する信仰は、子安(安産祈願)、子育(無事成育)の祈願のなかで行われており、町内においても、小

野赤沼真新屋にある天明八年(一七八八)の観音は子安観音として、吉野辺滝の観音(首なし地藏か)は子育観音として知られている。

十一面観音菩薩

変化観音の一つであり、その功德は、信仰すれば諸病をのがれ、財宝を得、敵難・水火難をうけず、虫毒や寒熱をこうむらず、長生きをすると説かれている。

町内の石造例は比較的少なく、小野赤沼寺前の宝永七年(一七二〇)のものが最も古く、吉野辺仲神の明和三年(一七六六)浮彫像塔がこれに次ぐ。

聖観音菩薩

梵名を「アバロキティシユバロ」といい、六観音の一つである。

町内での聖観音の石塔としては、吉野辺仲神のものが古く、享保二年(一七一七)造立と刻まれている。他には吉野辺の滝や小野赤沼寺前、塩庭池之作などに見る程度である。

吉野辺の滝には、明治三十二年に造立された聖観世音と刻まれたのを見るが、これには坂東三三番・西国三三番・秩父三四番とも刻まれており、百カ所の観音霊場を巡礼した百番供養として建てられたものである。

巡礼塔は少なく、他に上羽出庭上二枚橋の一基を見るだけである。元治元年(一八六四)造立の塔であるが、奉巡礼とある両側に西国三十三箇所と四国八十八箇所と刻まれている。三十三カ所巡りの者を巡礼というが、八十八カ所巡りは遍路と呼ぶから、巡礼・遍路の供養塔といえる。

(五) 馬匹守護の供養塔

馬頭観音

梵名では「ハヤグーバア」であり、それは馬の頭を持つ者の意味だという。

しかし石塔として見る馬頭観音の像は多彩である。わずかに馬頭の冠を戴いている像があるかと思えば、三面の荒々しい形相をしている像もある。

冠として戴いている馬は、転輪明王の宝馬が駆けて威伏するように、四魔を承伏する大威力を表しているという。荒々しい形相はこの威力を示しているのであろう。

この様なことから、古い時代における馬頭観音に対する信仰のなかには、牛馬、特に馬を供養するという信仰は無かったといわれている。

馬の守護を願ったり、供養をすることとなったのは、馬頭観音が六道のなかの畜生道に配置されていることと関係が無いとはいえないが、頭に戴く馬からの連想によって、馬の無病息災の祈願がこめられたり、死んだ馬の霊を供養する様になったりしたものである。



馬頭観世音 (飯豊中)

小野町内で、現在までに確認出来た馬頭観音塔このなかには、馬頭観世音・馬頭尊・父馬頭尊・種馬霊神などを含むは三一六基の多くを数え、実に全石塔・石仏の三分の一を占める割合となっている。

この馬頭観音の塔のなかで、その造立年代が明らかなものとしては、湯沢の登館の明和二年(一七六五)三月十七日造立とあるものが最も古い。

江戸期においては幕末期に集中して造立されているが、明治後半期・大正・昭和前半期に造立されたものも多い。

昭和年代に造立された塔を見ると、昭和二年六基、三年三基、四年二基、五年五基、六年六基、八年五基、九年四基、十年一基、十一年三基、十二年十二基、十三年一基、十四年四基、十五年二基、十六年三基、十七年五基、十八年三基、十九年一基、二十年五基、二十一年以降は十七基となっている。

この様に見ると、年代の明らかなものだけではあるが、造立が盛んとなっている年は、中国大陸での戦い(満州事変・日中戦争)の頃であることが知れるのである。

家族の者と同様にして育てて来た愛馬が、戦いに狩り出されていくなかで、馬の無事を祈ったものや、戦場で倒れた馬の供養にと建てられた馬頭観音塔も多いことであろう。

馬頭馬音の祭りは旧三月十七日である(現在は五月三日が多い)。もとはこの日に東堂山の祭礼や、馬のせり市も開かれて、祭りは一段と賑やかであった。

この祭りには講中の人のなかから、代参が東堂山に参りお札を受けて来たり、投げ餅をしたという。吉野辺や飯豊には、嘉永年間に造立された塔を見るが、講中名は一〇人前後であるから洞組単位のものであろう。

父馬観世音・父馬頭尊・父馬祖神・種馬霊神などの種馬の塔も一五基を数え、馬産のなかでの供養として建てられたものである。

また、飯豊根岸には、馬頭観世音の道標銘を見るが、道の安全を守る仏としても祀られていることによるものである。

### 北辰妙見塔

妙見信仰のなかで造立された石塔としては、小戸神日向の文化十二年(一一一五)造立の北辰塔、大八の狐平の明治二十七年(一一九四)造立の奉斎妙見大神、夏井入山の(造立年不明)妙見神社、塩庭品ノ木の(造立年不明)北辰妙見、小野赤沼宮ノ下の文政三年(一一二〇)の霊符神、夏井作田の(造立年不明)霊符尊などを見る。

妙見を馬匹の守護神として祀っている所が多いが、妙見菩薩は、国土を護り、災を消し、敵をしりぞけ、福寿を増す仏としても信仰されている。なお、霊符神・霊符尊も北辰信仰のものであるが、この信仰には修験が大きく関わっているとい(日本石仏事典)。

夏井の妙見は、穴子・川除・太子堂・樋口・午天王の集落で祀り、七月二日が祭礼という。また、小野赤沼の霊符神の石塔には、仁井町講中七人、赤沼講中一人と刻まれて居り、馬産の講中により造立された塔であることを知る。

### 東堂山塔

小野町の東堂山を信仰する講中によって造立されたものである。東堂山は馬匹守護として尊崇されて来たが、町内にも馬を飼う人により講が結ばれていた。

天保年間(一一三〇)～一八四四)造立の塔は三基、嘉永年間(一一八四)～一八五五)造立は二基、安政四年(一一五七)、慶応元年(一一六五)がそれぞれ一基を数えるが、これによると、幕末期に東堂山の信仰が盛んであったことが考えられる。

東堂山には、正観音が祀られるが、このためか東堂山南無観世音と刻むのを飯豊と小野山神に見る。また、小野山神畑田にある嘉永五年(一一五二)造立の塔は、脇に馬頭尊とも刻まれている(東堂山と民俗参照)。

### (六) 地藏信仰の供養塔

地藏尊の像塔や刻字塔に、その像塔を造立した月日の刻みこまれているのを見るが、その殆んどは三月二十四日と刻ま



六 地 蔵 (反町)

れている。

月の二四日(またはその前日三日)は、地蔵を祀る日として、各地で地蔵講がひらかれていたものである(地蔵講参照)。

地蔵は、仏説のなかでは、無仏の世界となった間、六道の輪廻に苦しんでいる衆生を救済するために現れる菩薩であるという。

町内において、墓地や寺院境内にある地蔵尊の像塔を除いて、道はたなどにたらずんでいる像塔や六地蔵の石幢(せきどう)の数は、約一五八基を数える。

地蔵尊の石像としては、正徳四年(一七一四)造立の小戸神日向にあるものが最も古いものである。六地蔵尊の浮彫塔が浮金中ノ内にあるが、これは天正年間(一五七三〜九二)に造立されたものという。また、六地蔵の石幢としては、小野赤沼関根前・上羽出庭東前などに正徳四年(一七一四)造立のものをみる。

地蔵は、賽の河原における子供達を見守って下さる仏として、子育て地蔵・子供が好きな地蔵としても祀られているが、吉野辺谷津にある享保二年(一七一七)の地蔵尊(像)は、子供が好きな地蔵様で、首に縄をつけて子供達が二・三人で引張って歩いたなどの話が残っている。また、流行病除けの仏としても祀られているという。

子安・子育て地蔵として祀られている地蔵は多いが、小野山神百目木に、明治十三年造立の地蔵尊があるが、この地蔵は延生子安地蔵といわれている。延生とは延生山のことであり、ここでは除災祈願が行われることから、子供の災難除けを祈願した地蔵といえる。

いぼとり地蔵も多く、吉野辺早渡のものは寛延二年(一七四九)に念仏講中により造立されたものだが、この地蔵にさわるといぼが治るといわれている。南田原井武田にある浮彫の地蔵尊は、宝暦二年(一七五二)のものであるが、椀に穴

をあけ地蔵の首にかけて願うと耳だれが治るといわれている。また、夏井樋口の地蔵尊は、風邪引き地蔵といわれ、風邪引きに弱い人に信仰されているという。

この他、和名田松木橋にある延享元年(一七四四)の地蔵は火除け地蔵ともいわれているが、火伏せの地蔵も多く、地蔵に対する信仰の幅の広さを知ることが出来る。

地蔵が賽の河原の守り神ということから、村の境を護る道祖神としても祀られている所もある。上羽出庭谷津には、文政六年(一八二三)造立のものであるが、中央に地蔵菩薩と刻み、右側に東堂山道、左側に竹貫道と刻んだ道標銘を見る。道を往き来する人々を見守る仏としてこの石塔が造立されたのであろう。

(七) 代参講中の供養塔

村を出て、遠くにある霊験あらたかな社寺や霊山に参拝するために組織された講集団がある。このような講集団では、旅費の都合上から、代参者を決めて参拝する代参講と呼ぶ形をとることが多い。

この講のなかには、純粋な信仰的なものから物見遊山的なものまであるが、かつては、村の外は見知らぬ世界であり、それだけに旅も困難を極めていたから、旅装束は白色の行衣であった。

また、村境までの見送り(サカオクリ)、村境での出迎え(サカムカイ)、などが行われたり、旅の無事を祈っての禁忌などがあつたりしたことを聞く。

湯殿山塔

湯殿山は、出羽三山の月山・羽黒山と共に、霊山として多くの信仰を集めたもので、その講中の造立した石塔は多い。

小野町内の湯殿山の石塔として最も古いものは、安永申歳(一七七六)造立の本町七生根にあるものだが、記年銘のある石塔としては、天保一基、嘉永一基、安政一基、文久二基、明治一基となっていることから湯殿山信仰も幕末期に盛んであつた様である。



湯殿山 (飯豊上)



天照皇太神 (夏井)

上羽出庭の与七内には、造立年代不明であるが、湯殿山宝塔なるものがある。この塔のことを通称権現様と呼んでいるという。湯殿権現ともいうところからの呼び方なのであろう。また、四月八日が祭り日というが、湯殿山の祭りを四月八日に行う所は多いのである。小野山神作ノ前には、安政五年（一八五八）造立の八日供養塔を見るが、これも湯殿山講中により造立したものである。

小野赤沼の宮の下、出羽神社境内には、出羽三山のひとつ月山を祀る塔を見るが、ここでは旧九月十九日の切替祭りに祭るといふ。

### 天照皇太神宮

伊勢講中によって造立された碑である。伊勢講では、講員が全員代参を完了したときなどに記念として造立することが多い。

小野町内には、天照皇太神・天照大神・太神宮・天照皇太神宮・伊勢大廟参拝などの塔碑を一九基を数えるが、塩庭品ノ木にある天照皇太神の塔は、嘉永元年（一八四八）造立のものであるが、天下泰平・万民豊楽・子孫繁栄とも刻まれている。

伊勢講では、講員が講金を積み立て、これを路銀にあて、交替で参拝をする代参講の形をとるが、この伊勢参りをした者同志を伊勢兄弟といい、実の兄弟以上の交際をするものであったという話や、参拝を済ませた年の村寄り合には上席に座らせられるという話を聞く。

夏井の町屋には、昭和九年と昭和二十五年の伊勢参拝の記念碑を見るが、昭和二十五年のものは伊勢大廟参拝記念の碑とあり、講員が三二名と刻まれている。

代参者は天照皇太神宮(内宮)と、豊受大神宮(外宮)の両大神宮に詣でるが、京・奈良の方まで足をのばすことも多く、よく参宮日記などに、伊勢参りと京見物とを記しているのを見る。

小野新町の塩釜神社境内にある天照皇太神の塔(大正十三年造立)は、右側に豊受大神宮が、左側に春日大神宮が刻まれている。個人により造立されたというが、小野山神畑ケ田には右側に八幡神社・中央に天照皇太神・左側に春日神社と刻まれたのを見る。

前出したが、吉野辺の谷津には、寛政六年（一七九四）造立の太神宮の道標銘がある。

### 金毘羅大権現

金刀比羅宮へ参る金毘羅講中の人達によって造立された石塔であるが、金刀比羅宮という名称以前は、象頭山金毘羅大権現と称していたから、江戸時代に造立されたものは金毘羅大権現と刻まれている。

讃岐の金毘羅参りは、信仰を兼ねた見物旅行として、江戸時代庶民の間に盛行していた。講は旧正月に宿となった家で開かれ、その時に代参者が決められ費用の徴収を行っている。

吉野辺坂本にあるのが文政九年（一八二六）で古い石碑である。

小野新町本町の寺下には、造立年代不明のものだが、讃岐国象頭山金毘羅大権現と刻まれた金毘羅参りの塔を見るが、その左側面に、四国八十八所土砂塚、法印圓傳と刻まれるのを見ると、この造塔主は金毘羅参りを済ませた後、四国八十八カ所の霊場を巡り、霊場の土砂を持ち帰って塚を作ったことを知ることが出来る。



足尾神社 (小野山神)

八坂神社の小祠は多いが、石塔としては、和名田松木橋にある大正十年の石塔を見るだけである。この地ではこの神は除災の神として祀るといふ。

足尾山  
足尾山・足尾権現・足尾神社などの刻字塔を見るが、足の病の人に厚く信仰されており、今でも草鞋が奉納されている。

小野山神・湯沢登館・仲町槻木内などに石塔を見るが、小祠として祀られているのも多い。また、飯豊才士には足尾権



聖徳太子塔 (飯豊山)

熊野三所神社  
この石塔は小野山神桜沢にあるが、熊野三山信仰の塔である。熊野坐神社(本宮)、熊野速玉神社(新宮)、熊野夫須美神社(那智)を総称して熊野三山ともいう。

飯豊山  
福島・山形・新潟の三県境にある飯豊山は、会津・中通り地方においては、十三参りといわれ、男の一三歳に達した者は危険をおかして参拝しなければならぬお山とされていた。また、作神を祀るとして代参者が参拝していたお山でもある。

町内では十三参りの話は聞くことがないが、二〇歳前に必ずお山に参るものだという話を吉野辺で聞いた。

小戸神の日向にあるが、石塔は慶応元年(一八六五)に造立したものである。

(六) 職人信仰の供養塔

聖徳太子塔

職人といわれる大工・左官・畳屋・鍛冶屋の人達や、山仕事に携わる人達のなかで太子講がそれぞれの職種毎に結ばれている。

聖徳太子は曲尺を発明された方だからとか、それぞれの職種において、太子との関わりを持つ話を聞くが、聖徳太子の石塔はこの様な人達の講中によって造立されている。

町内の石塔としては、飯豊川向にある文政九年(一八二六)が古く、浮金羽柳の嘉永二年(一八四九)が続く。小野新町本町寺下にあるのは、町内の職人により造立されたものであろうか、聖徳皇太子と刻まれている。

太子講では、祭り日に宿に集まり、太子の掛軸を拝したのち、賃金の協定や組合の申し合わせなどを行うという。

松尾大明神

小野新町荒町にみられる石塔である。造立年代は不明であるが、京都の松尾大社を祀ったものである。松尾大社は全国の酒造家の信仰の厚い社である。

(七) 除病・除災の供養塔

疱瘡神

昔は、疱瘡にかかることは、「命定め」といわれるほど大事なことであり、それだけに、種々な祈願や呪が行われていたものである。

町内には、疱瘡神の石塔は和名田松木橋にあるだけの様であるが、小祠とし祀られているものはある。和名田の塔は、大正十年の造立であるが、この頃疱瘡にかかると、軽くてすむように皆でお祝いをしたものである。

人々の恐れるものを神として祀り、出来得るだけ崇りのない様にと祈ることからこの様な神が祀られている。

牛頭天王・八坂神社  
八坂神社は神仏分離以前は牛頭天王と呼ばれていた。牛頭天王は疫病消除の神として信仰されていた。上羽出庭宮作に牛頭天王の石塔があるが、浮金の須和間にある牛頭観音と呼ばれる石塔は牛頭供養の塔である。

塔である。

八坂神社の小祠は多いが、石塔としては、和名田松木橋にある大正十年の石塔を見るだけである。この地ではこの神は除災の神として祀るといふ。

足尾山

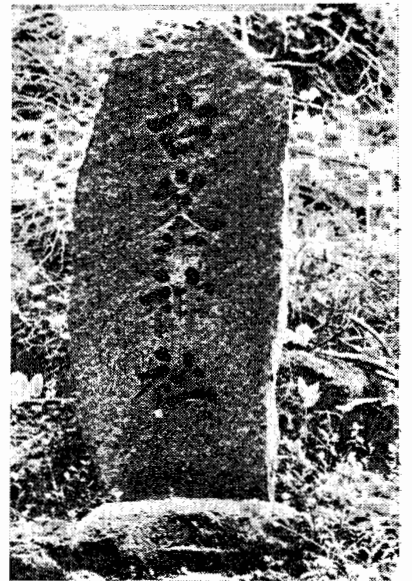
足尾山・足尾権現・足尾神社などの刻字塔を見るが、足の病の人に厚く信仰されており、今でも草鞋が奉納されている。

小野山神・湯沢登館・仲町槻木内などに石塔を見るが、小祠として祀られているのも多い。また、飯豊才士には足尾権





淡島大明神 (荒町)



古峰神社 (飯豊中)

現の石塔を見るが、これは道祖神と共に祀られている。  
足尾信仰のなかには、道の神として旅の安全を祈ったり、運送業の人達により仕事の安全が祈られたりしていることから、道祖神と同じ性格の神として祀られているのであろう。

#### 淡島大明神

この神は、住吉神社の女房神であるところから、婦人達の信仰のなかで祀られている。

和歌山市の加太神社が本社といわれているが、江戸期の流行神でもある。三月三日に淡島講とか三日月講が開かれ、婦人達により、子授けや安産が祈願されるが、この神は婦人病を治して下さるとの信仰もある。

町内では、三月三日に針供養が行われ、淡島様に針を納める習俗がある。

淡島講中による造立の塔としては、淡島神社、粟島神社などを見るが、三日月塔を飯豊袖山に見る、この塔は十九夜講中の塔ともいわれているが、もともとは淡島講中のものであろう。嘉永元年(一八四八)に造立されたものである。

#### 鬼子母神

原名を「ハーリテイ」という神である。五百人の子供を持ちながら、人の子を取って食うという鬼神であったが、ある時釈迦によって諭され前非を悔い、小児を守る善神に生まれかわり、安産、子育ての

神として信仰されている。

町内の石塔としては、南田原井武田と飯豊一壺森に造立年代不明ではあるが見ることが出来る。

#### 古峰山・

日光連峰の一部で、山岳信仰の聖地であった古峰山に参拝する講中を古峰原講という。

#### 金剛山

この古峰原講は、古峰神社に火防・盗難除・五穀豊穰を祈願する講中であるが、殆んど村落単位に組織され、代参講の形をとっていた。

建武年間に大和葛城の金剛山の分霊を古峰原に祀ったため、金剛山あるいは古峰原金剛山とも呼ばれていたが、神仏分離で社号は古峰神社となった。

したがって、吉野辺伊達内(文政三)や湯沢原(年代不明)の金剛山の石塔が古く、吉野辺風越の古峰神社(明治三)などの石塔は新しいものといえる。

年二回程、代参者が参拝に行くが、神札を受けて来て土産の箸などと一緒に講中の家に配ったという。また、この神札を火事の時家の門口に貼ると類焼をまぬがれることが出来るとか、盗難にあわないとかいわれている。

#### 秋葉山

を火防の神として祀る。

この三尺坊は正式には、三尺坊威徳大権現と呼ぶのだそうだが、三尺坊を信仰する人達の講集団を秋葉講と呼ぶ。

古峰原講と同じ火防の信仰であるが石塔の数は少なく、浮金宮ノ前の文政十一年(一八二八)の塔と、湯沢登館の明治二年(一八六九)の塔とを見るだけであり信仰伝承は聞くことがない。

#### 不動明王

不動明王の像塔は多く見られるが、成田山講中による造立のものと、除病・除災祈願のものなど種類がある。

飯豊滝平の不動明王浮彫像は、享保四年(一七一九)に造立されたものであるが、毎年旧三月と九月の二十八日に祭りが行われ、村内安全などの祈願がなされるといふ。



大乘妙典塔 (皮籠石)



百万遍供養塔 (飯豊下)

(5) 經典供養塔

經典供養塔は、その刻銘されている内容から、刻銘塔・読誦塔・納経塔などに大別されている。

刻銘塔とは、經典の名称や、経文、真言などを刻み込んだ石塔のことであり、南無阿弥陀仏と刻み込まれた名号塔、南無妙法蓮華経と刻み込まれた題目塔、宝篋印陀羅尼ほうせついんだらにの宝篋印塔などがある。

読誦塔とは、經典を読誦した方法や回数などを刻銘した石塔のことである。

納経塔とは写経したことや、その經典を社寺や霊場に奉納・埋経したことを記録した石塔のことであり、写経塔・一石塔・廻国塔などがある。

名号塔

刻銘塔として分類されるものだが、南無阿弥陀仏と刻まれている。町内では少ないが、古いものとしては、夏井石戸屋にある文化二年(一八〇五)に造立した石塔を見る、ここの石塔は橋供養として造立されたものという。

題目塔

刻銘塔に分類されており、南無妙法蓮華経と題目が刻み込まれている。町内では二基を見るだけ、文化二年(一八六二)造立の飯豊羽生のものが古い。

念仏供養塔

南無阿弥陀仏と唱えることによって、人は死後の極楽行きが保障されるとする平易な直截的な来世信仰は、各地に念仏講の結成をみた。その講中による宗教的作善としての造塔が多い。

浮金の鹿野にある念仏供養塔は寛延二年(一七四九)とあるから最も古いが、他に明和元年(平朝)・安永四年(飯豊)・文化二年(青野辺)・文政七年(赤穂)などを見る。

造立年代不明であるが、小野赤沼真新屋にある念仏供養塔は、文字は陰刻であるが、母子立像(如意輪)の浮き彫りがみられている。

台座には女人講中とあるが、講中は四名であり、土地の人はこの像は子安地藏であるともいう。いずれにしても子安のために、女人講中によって造立された念仏供養塔といえる。

光明真言塔

南田原井宮ノ前の光明真言供養塔は、安永六年(一七七七)、小野山神桜沢の光明真言

言三百万遍供養塔は明和丙戌(一七六六)、飯豊大黒の光明真言五百万遍塔は文化十四年(一八一七)にそれぞれ造立された光明真言の読誦塔である。

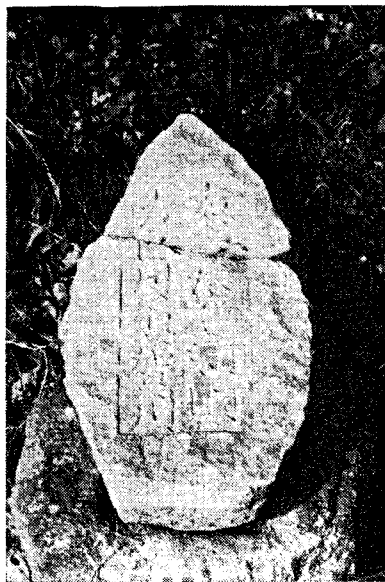
普通、百万遍読誦成就を記念して造立したものが多くのだが、三百万遍、五百万遍の記念は少ない。この様な多くの読誦は、とても個人ではなし得るものではなく、講中の人々による結集である。

読誦塔としてはその他に、浮金越野の法華千部塔(年代不明)と、明和元年(一七六四)造立された飯豊寺ノ下の普門品(ふどん)十万巻供養の塔を見る。

大乘妙典六十部供養塔

大乘妙典と呼ばれる法華経を、全国十六カ国の霊場に納めることを目的として、六十六部を作成し、全国を巡って来たことに対する供養の塔であり、また霊場を巡る苦難の旅のなかで集めた功德を人々にも施すことから造立されている。

塩庭平内の奉納大乘妙典日本廻国供養の塔が古く、元文五年(一七四〇)の造立である。



道 標 (塩庭)

東堂山の方向を刻んだ道しるべとしては、記年銘の不明なものとして、皮籠石漆平の南無観世音菩薩の塔に「従是東堂山」と刻まれたもの、飯豊根岸の馬頭観世音の塔に「右東堂山に至る、左神又に至る」と刻まれたもの、小野山神畑田の「右東堂山・左鹿島神社」と刻まれた道標。飯豊沢目木の



三界万霊塔 (反町)

万霊塔は寺院の境内や墓地に建てられている場合が多いが、村辻や村境となっていた所に建てられているものもある。万霊塔・三界万霊塔・万霊等・三界万霊等・有無両縁万霊等・無縁有縁供養塔・無縁精霊供養塔などと刻まれているが、いずれも無縁有縁を問わず回向して供養することによって功德を受けるといふ。

江戸時代の大飢饉による餓死者や行旅病死者を葬った供養

の塔を多く見る。

寺院境内・墓地以外の万霊塔としては、享和一基・文化一基・文政一基・天保二基・弘化一基・嘉永二基・大正三基・昭和二基・年代不明六基であるが、吉野辺伊達内にある嘉永四年(一八五二)造立の三界万霊塔は天保の飢饉の時に餓死した者の霊を供養したものである。

年代不明であるが、上羽出庭東前にある三界万霊の塔には、村中安全と刻まれているが、この塔を回向することによって万霊を供養し、併わせて村中の安全を願うとして造立されたものである。

(二) 道しるべ

道しるべには、道案内を主体とする「道標」と、民間信仰にもとづいて造立された石仏や石塔などに、道案内の銘文を刻んだ「道標銘」とがある。

今回の調査のなかで確認された道しるべは二一基を数える。小野町内で最も古いものは、宝暦三年(一七五三)の浮金五蔵内にある道標で、次いで夏井清水にある宝暦十年(一七六〇)のものである。浮金の道標は旧岩城道のものと考えられるが、刻字の欠けた不明な部分が多い。夏井の道標は「左なつ井通・右かわま

い通」とある。

安永九年(一七八〇)の道しるべは三基を見るが、内二基は吉野辺滝にあるもので、ひとつは、「右ほりこし、左やなぎばし」とあり、他は「右すがや・左みはる」とある。いずれも岩城道から分岐する道に建てられたもの、同年の他のひとつは小野赤沼石橋の庚申塔であるが、側面に東堂山への案内が刻まれている。

寛政六年造立も二基あり、ひとつは飯豊長石にある庚申塔で、「右神又・左山道をへて吉野辺に至る」とあり、他は太神宮と刻まれた側面に、恵美寿「右みはる」・大黒天「左とうどう」とある吉野辺谷津のものである。

葛蒲谷の西田にある南無観世音と刻まれた道標銘は、「東仁井町道・西須加川道・北東堂山道・南石川竹貫」とあり文化二年(一八二六)造立の塔である。また雁股田には、「従是東堂山」と刻まれた文化五年(一八〇八)のものがある。

上羽出庭の谷津には、文政六年(一八二三)の地藏菩薩の道標銘がある。これは、地藏菩薩と刻字された両側に、竹貫道と東堂山道とが刻まれているものである。

さらに、小戸神の宮の前には、天保九年(一八三八)の庚申塔道標銘があるが、これには、「右みはる・左やまだ」と刻まれている。

(二) 万 霊 塔



「右東堂山・左きこんだ」と刻まれた道標。塩庭山口の「右とうどう・新町、左石川・須賀川」と刻まれた道標など、東堂山参りの人々の便利をはかって造立された道しるべを多く見る。  
町内の二一基の道しるべのなかで、道標が最も多く、一二基を数えるが、庚申塔三基、南無観世音二基、馬頭尊・東堂山・地像尊・太神宮それぞれ一基の道標銘を見る。

㊦ 道 祖 神

道祖神は、かつては村の入口や峠に祀られ、村の外から侵入する悪疫を防ぐ塞の神として祀られたり、道の神あるいは旅の神として、旅人や馬方・馬車引きによって道陸神として祀られたりする他、子供達が道祖神のある所でドンドド焼(在郷)をすることから子供の神であったり、性をかたどる石をご神体とする所では生殖の神・生産の神であったりする。

小野町における道祖神の伝承は少なく、また、道祖神の石塔も少ない。飯豊の才土には、道祖神の石塔(年代不明)があるが、これは足尾権現の石塔と共に祀られているところを見ると、道の守り神としての道陸神としての性格のなかで祀られたのである。

道祖神としては、吉野辺伊達内の竜頭山に祀られているものがあるが、これは婦人が秘かに参拝に來ているという。また、夏井の橋本には男根石の道祖神が祀られている。

㊧ その他の石塔

宗吾靈神

浮金の五蔵内に、明治三十三年造立の宗吾靈神の塔が、南田原井の宮ノ前に、大正二年造立の宗吾靈の塔がある。

いずれも、義民といわれる佐倉の惣五郎を祀ったものといわれるが、このような靈神を祀ることは御嶽講中の人によるものといわれている。

鴛鴦碑

小野赤沼の関根前にこの碑がある。鴛鴦伝説は各地にあるが、碑を建て祀るものは少ない、また伝承のなかに、瘡の病を治すとしても信仰されていたとある。

鳥獸供養塔

吉野辺関場に昭和五十四年造立のものが、浮金宇東に昭和五十七年造立のものがある。いずれも獵師により造立されたものという。

われわれが日常の生活をして行くなかで、鳥獸の恩恵を受けることが多いのだが、この恩恵に対し、感謝をし、その犠牲となった鳥獸の靈を慰めるために古くからこの様な供養塔も造立されて來たのである。(木暮 幸雄)



馬 図 (浮金 案内観音堂)



巴御前奮戦図 (塩庭一区 観音堂)

五 絵馬と信仰

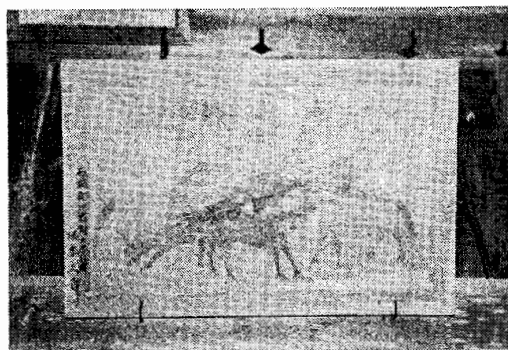
奉 納 絵 馬

神社や寺に必ずといっていいほど大小の絵馬が奉懸されている。奉納者の名や絵師の名が書いてある立派な絵馬から、釘で打ちつけた色あせた小絵馬に至るまで、いろいろな種類の絵馬をよく見かけることができる。

絵馬が神社や寺に奉納される起りは、神様の乗り物である馬を奉納することからといわれている。はじめは神へ生馬を神馬として奉納され、これが次第に木馬や板に馬の絵を



群馬図 (小戸神 満福寺)



馬図 (南田原井 武田地蔵堂)

小野町の各地区にある神社や寺、堂などにも、絵馬がたくさん奉納されている。なかでも東堂山満福寺の亜欧堂田善の「洋人曳馬図」は洋風画としても優れた作品で、県内の絵馬の中でも逸品である。

東堂山は馬の神様として田村郡内外から広く信仰を集め、絵馬も馬の図の絵馬が数多く奉懸されている。また田村郡や白河地方は馬の産地でもあり、馬の安全祈願としての絵馬が村々の神社仏閣に数多く奉納されている。

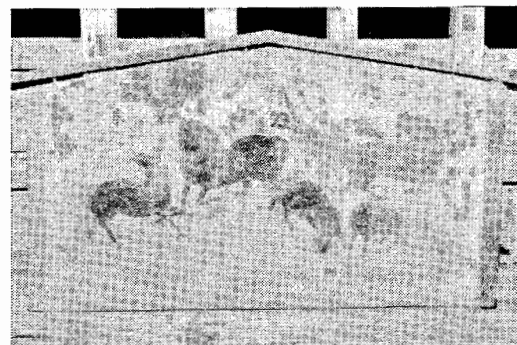
絵馬の図柄をみると、曳馬図や繫馬図、親仔馬図、群馬図などいわゆる神馬の図柄の絵馬が数多く残っており、この他武者絵、物語りの絵、神仏図、芸能図、風景図、生業図や算額、歌仙の額もみられる。

東堂山の群馬図は、百頭位の群馬が描かれ見事である。馬の図は親仔馬の絵馬が数多くみられるが、馬産地の特色であろう。

武者絵には、「巴御前奮戦図」(安永七年塙、熊谷直実)(安政三年大、倉妙見神社)、「那須与一扇の図」(寛政四年塩、庭一区観音堂)などがある。物語りの図の絵馬には、「天の岩戸図」(夏井坂、源頼光の一行が大江山へ行く途中を描いた「源頼光一行図」(本町尊光寺)、「神功皇后」(小戸神孝、境内観音堂)、「神功皇后」(小戸神孝)など絵師が描いた立派な図柄である。

芸能図絵馬には湯沢虚空蔵堂に奉懸された明治三十一年の「万歳図」がある。

また、俳句を書いて奉納した「物連百六十吟」は、塩庭一区の観音堂にあり、文化十二年 願主草野氏とあり、俳句と作者名があり、



馬図 (谷津作 谷津観音)



万歳図 (湯沢 虚空蔵堂)

絵馬の形には大絵馬と小絵馬に分けられるが、大絵馬は一般に扁額式となっているものが多く、そして美術的にも図柄が優れたものが多い。絵師の銘があり願主つまり奉納者は、豪商や豪農、大名や武士階級の人の場合が多い。

一方小絵馬は、その図柄も多種多様で、個人的な悩みや願いごとを祈願する内容のものが多く、民間信仰的なものである。中には名のある絵師が描いたものもあるが、ほとんどは自分で作ったり、大量生産の絵馬を買ったものが多く、美術的に優れているものは少ない。

しかし、小絵馬の図柄をみると、当時の庶民が最も望んでいた事柄や、心の悩み、風習、社会情勢など、庶民の歴史を知ることができ、貴重な民俗資料となるものである。

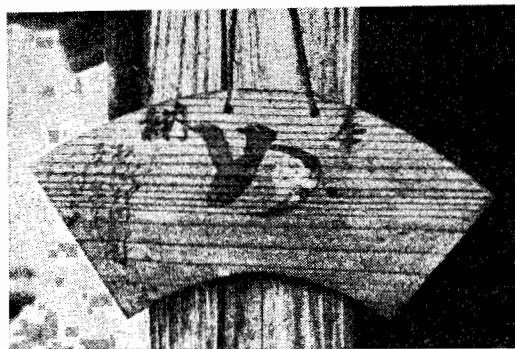
描いたものを奉納するようになり、馬の絵だけでなく、願いごとを書いて祈願するようになったといわれている。また平安時代中期には神仏の信仰が合体し、寺にも絵馬が奉納されるようになったといわれている。

江戸時代には、絵馬が盛んに奉納され、絵馬の図を描く絵馬師が活躍し、絵馬屋ができ、神社には絵馬堂が建てられ、大型で豪華な絵馬が、大名・武士・町人などによって奉納されるようになった。

一方小絵馬も数多く奉納されそれぞれの時代の、人々が悩みや願い事を書いて絵馬に託し、奉納されてきた。



熊谷直実図 (大倉 妙見神社)



「め」 (上羽出庭 薬師堂)

この地方の俳句の歴史の資料として貴重である。

小絵馬の図柄も馬の図が中心であるが、庶民の祈りを描いた絵が多い。

上羽出庭の薬師堂の「め」の字の絵馬や、浮金戸之内の羽黒神社の「晶」の字は、眼の病気の全快を祈願したものであろう。

夏井諏訪神社に奉懸されている蛇の絵の絵馬は、十二支のうち自分の干支の絵馬を奉納したものか、また蛇が諏訪神社の使いであるという信仰から奉納したものでもあろう。

大倉の妙見神社に奉納された「夫帰煙草作業の図」は、生業絵馬としても珍しく、いか

にもこの地方が煙草の産地らしく、夫帰の仲睦まじい姿の絵であるが、丙辰三年とあり、おそらく、安政三年(一八五六)であろう。

小野新町の塩釜神社には、「消防ポンプの図」の絵馬が奉納され、当時のポンプ車の形がよくわかる貴重な風俗絵馬である。(村川友彦)

## 第二節 社寺信仰

### 一 神社信仰

#### 神 社

森のあるところに、必ず神社があるといってもよいほど、森と神社とは、切っても切れない深い関係にある。「日本書紀」「万葉集」にも神社、社、をモリとよんでいるのが見うけられる。遠い昔私たちの祖先が部落生活を営むようになる、部落共同の祖神をお祭りして、祖神の恩恵に真心をさへげるようになった。そして之を守り受け継いできたのである。それが時代の推移により、祖神が氏神または産土神と呼ばれるようになった。これが心のふるさと鎮守の森である。神社は神霊を鎮祭するところであるが、その土地にゆかりの深い神さまをお祭りするのもまた自然である。

神社に祭られた神々は、天照大御神をはじめ、天神、国神(地神)八百万神であるが、いかえれば、神社に祭られる神は祖神が最も多く、自然神、また国家に功績があつて、国に殉じた人達も神として祭られている。

祭神は主祭神があり、また相殿あいどのと称して、主祭神に対して二柱以上の神が合祀がっしまたは、配祀されている神社が多い。神社には皆相殿ありといわれるが、正式には相殿神という。主祭神との縁の深い神々がまつられていることが多い。神社は時代の流れにより幾多の変遷があつた。

近年では、明治維新直後の神仏分離令による保護策で国内の神社に官幣社・国幣社・府県社・郷社・村社・無格等の社格が与えられ国家神道となったが、こうした社格は、昭和二十年十二月、占領軍から出された神道指令によって廃止され、それぞれ宗教法人として独立し、神社本庁がこれを統轄する組織に改められた。

中世以降の神仏習合をはじめ、こうした大きな流れの中でも、常に変わらぬに受けつがれてきたものは、祭りである。春には、稲をはじめとする五穀の豊穰を祈願する祈年祭(まねさい)が行われ秋には収穫を感謝する秋祭り(あきまつり)が、それぞれの村で盛大に行われてきた。

この町でも、かすかに残っているが、祭りの前日には、宵宮・宵祭・おこもりなどと言って村の主だった人たちが、籠り堂や神社などに寄り集まり、神域の清掃や飾りつけ、新鮮な水を用いての水ゴリ取りや特別な方法で作った齋火を用いての炊飯や共同での食事、こうした潔斎を体験して、祭りを迎えるのが古いならわしであった。

こうした信仰の実態と現状を伝えるのが本節のつとめであるが、この項では紙面の都合もあり、第一節民間信仰との重複をさげ、終戦前まで郷社又は村社として祀られ、終戦後は、宗教法人として存続している、宗教法人神社と、法人ではないが、規模や祭礼の仕方・信仰の範囲(まじり)が、これらと同程度の末社・部落神社を列挙し、主だった神社の縁起特殊神事などを紹介するにとどめることとした。

神社一覧 (宗教法人神社)

鹽竈神社 (明神さま)

所在地 大字小野新町字万景上一番地

祭神 鹽土老翁命

祭日 八月十日 十月一日に変更

出羽神社 (羽黒さま)

所在地 大字小野赤沼字宮ノ下一三七番地

祭神 玉依姫命 倉稻魂命

祭日 九月十九日

矢大神社

所在地 大字小野新町字丹後坂一二三番地

祭神 天日和志命 小野篁命

祭日 旧四月八日

和久稻荷神社 (稻荷さま)

所在地 大字谷津作字和久 一一ノ三番地

祭神 倉稻魂命

祭日 九月十五日

八雲神社 (天王さま)

所在地 大字谷津作字前之内四〇〇ノ三番地

祭神 素盞鳴命

祭日 旧六月十五日

熊野神社 (熊野さま)

所在地 大字谷津作字谷津一七九番地

祭神 速玉之男命 伊弉冉尊

祭日 九月六日 九月十五日に変更

国治神社

所在地 大字皮籠石字宮ノ前一三四番地

祭神 伊弉冉神、別雷神

祭日 九月九日

若宮八幡神社 (八幡さま)

所在地 大字菖蒲谷字仲田一〇八番地

祭神 大鷲鸕尊 (仁徳天皇)

祭日 十一月三日

飯豊神社 (愛宕さま)

所在地 大字飯豊字二本木一二七番地

祭神 火産靈神

祭日 十月二十四日 十一月三日に変更

八幡神社 (八幡さま)

所在地 大字小戸神字山田一八四番地

祭神 菅田別命

祭日 九月十日

菅布祢神社

所在地 大字浮金字宮ノ前二六番地

祭神 猿田彦神

祭日 九月十五日

鹿島神社 (鹿島さま)

所在地 大字小野山神字仲田一六五番地

祭神 武甕槌神外二柱

祭日 九月十九日

八雲神社 (天王さま)

所在地 大字雁又田字千保一三二番地

祭神

建速須佐之男命

祭日 旧六月十五日

三渡神社

所在地 大字吉野辺字伊達内一九五番地

祭神 天牟良雲命

祭日 旧八月十五日 十一月三日に変更

諏訪神社 (諏訪さま)

所在地 大字夏井字町屋一三七番地

祭神 建御名方神 下照姫命

祭日 九月三日 九月十五日に変更

湯沢神社

所在地 大字湯沢字仲平一四一番地

祭神 天村雲神

祭日 十月十九日

諏訪神社 (諏訪さま)

所在地 大字上羽出庭字辻ノ内二五一番地

祭神 建御名方命 八坂刀売命

祭日 九月三十日

稻荷神社 (稻荷さま)

所在地 大字和名田字松木橋九九番地

祭神 宇迦能御魂大神

祭日 十月三日

神社一覧 (末社及部落神社)

大倉神社 (妙見さま)

所在地 大字小野新町字大倉



祭神 天御中主神  
祭日 旧五月中申日 七月二日に變更

見渡神社  
所在地 大字小野新町字浄田田  
祭神 天村雲命  
祭日 十一月三日

若宮八幡神社(八幡さま)  
所在地 大字小野新町字馬番  
祭神 大鶴鶴命(仁徳天皇)  
祭日 旧八月十五日

市神社(市神さま)  
所在地 大字小野新町字万景上  
祭神 事代主命  
祭日 四月二十五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字小野新町字前久保  
祭神 素盞鳴命  
祭日 旧六月十五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字小野赤沼字新真屋  
祭神 素盞鳴命  
祭日 九月十八日

熊野神社(熊野さま)  
所在地 大字小野赤沼字高坊  
祭神 伊弉冉尊  
祭日 九月十八日

祭神 豊受大神  
祭日 十月十七日

養蚕神社  
所在地 大字小野新町字万景  
祭神 保食大神 稚産靈神 豊字賀能壳神  
祭日 五月五日 四月二十五日に變更

養蚕神社  
所在地 大字飯豊字本飯豊  
祭神 稚産靈神 保食大神 豊字賀能壳神  
祭日 小満 八朔

大沢神社(三王さま)  
所在地 大字飯豊字新屋敷  
祭神 大巳貴命  
祭日 旧三月中の申(ない時は二の申)

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字飯豊字天王前  
祭神 素盞鳴命  
祭日 旧八月十五日 九月十五日に變更

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字小戸神字大名内  
祭神 素盞鳴命  
祭日 九月十日

雷神社  
所在地 大字小戸神字山田  
祭神 別雷神  
祭日 九月十日

八坂神社(天王さま)  
所在地 大字吉野辺字滝  
祭神 素盞鳴命  
祭日 十一月三日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字小野山神字居矢ノ目  
祭神 素盞鳴命  
祭日 六月十五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字浮金字宮ノ前  
祭神 素盞鳴命  
祭日 九月十六日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字夏井字町屋  
祭神 素盞鳴命  
祭日 旧六月十五日

愛宕神社(愛宕さま)  
所在地 大字夏井字清水  
祭神 迦具突智命  
祭日 六月五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字飯豊字新田内  
祭神 素盞鳴命  
祭日 九月十五日

煙草神社  
所在地 大字小野新町字知宗

鹿島神社(鹿島さま)  
所在地 大字菖蒲谷字鹿島  
祭神 武甕槌神  
祭日 旧十月十五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字菖蒲谷字鹿島  
祭神 素盞鳴命  
祭日 十一月三日

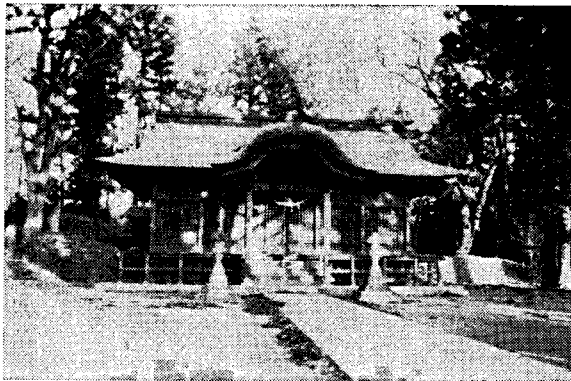
古峯神社(こぶがらさま)  
所在地 大字小野赤沼字小山崎  
祭神 日本武尊  
祭日 四月五日

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字塩庭字明生内  
祭神 素盞鳴命  
祭日 上羽出庭諏訪神社例祭日翌日 十月十七日に變更

八雲神社(天王さま)  
所在地 大字上羽出庭字辻之内  
祭神 素盞鳴命  
祭日 九月三十日

雷神社  
所在地 大字上羽出庭字辻之内  
祭神 別雷神  
祭日 九月三十日

八幡神社(八幡さま)  
所在地 大字谷津作字館



塩釜神社

祭神 応神天皇  
祭日 旧四月八日

御霊神社

所在地

大字谷津作字館

祭神

早良親王 吉備大臣

祭日

旧四月八日

鹽竈神社(明神さま)

今から約千二百年前の桓武天皇の御代、征夷大將軍坂上

た三つの砂盛を散らして町内に入る。

各町には幡場があり、最初宮本(荒町)の幡場で神輿をとどめ奉幣行事を行う。左側通行により、氏子また観衆をおしわけするようにして町内をねり歩き、七町の幡場の奉幣行事が終わり午後五時頃お仮舎に着御する。若連の見守をおこもりがあつて一夜とどまる。翌日午後六時お仮舎を發興、前後往來の巡幸があり、今度は二百段の石階をかけ登るのであるが、高張ちようちんも賑々しく、各町若連の応援の掛け声の加勢も加わりその状は壯觀である。午後七時頃無事還御、万歳斉唱を以て神輿渡御の神事が終わる。

矢吹好三さんのお話(荒町)

塩釜さまの神輿渡御は大変有名で、村からお客さまも、これを見るのを楽しみにしてくるようだ。町内の家々は玄關前に帯状に砂を敷き、更に三つの砂盛りを作りその上に塩をのせ神輿のお出になるのを待つて、自分の家の前にさしかゝるころ、大道を祓い清めるようにその砂をまき散らす。田村將軍の鎮定にあやかつて、平和を招く行事の名残ともいわれている。町内の道路が舗装になつてからは出来なくなつたので、今はやらないが参道入り口の砂盛りは今もなおたゆることなく行われている。

市神社(市神さま)

当社は塩釜神社の境内社にして商売繁昌、福徳招來の神として商人はじめ一般の崇敬があつた。例祭は正月十一日

田村麻呂の東征に当たり、賊の勢い強く容易に平定するところが出来なかつたので、かねて將軍の信奉の厚かつた陸前(今の宮城県)の鹽竈の大神に誓ひ、戦勝を祈願された。神助あきらかにして、郷内ことごとく鎮定し、平和になつたので、將軍その靈験の顕著なるを感謝し、清浄なる万景上の頂を齋場と定め、新たに神壇を設けて、將軍自ら御彫刻の木神像を御神璽とあがめ、鹽竈大神を鎮座しお礼の祭りを行った。時に延暦二十年八月十日なりと言ひ。現在神社が西北向に建てられているが、それは、施設のない齋場に「ひもろぎ」を立て朝日の豊采登りに祭りを行つた「なごり」であり古い形式をしるべきものである。

元久元年領主田村莊司刑部大輔仲能公陸前塩釜本社に参拝して御幣を謹請し、同年四月十日鹽竈神社の内陣に奉遷した。それ以来御幣謹請の日を春祭りとし、延暦二十年八月十日將軍鹽竈大神鎮座祝祭の日を秋祭りとした。

神輿渡御

例祭当日祭典終了後午後一時神輿の渡御がある。神輿を中心にして、馬を引き立て、各役割も正しく行列を整え、各町若連の輪番制による当番町若連が之を奉仕する。

神社役員、氏子、の供奉に各町七基の子供みこしが之に続くのであるが、その状は実に威勢が良い。先ず揃いの白装束白足袋姿に身をよそおつた若連がかつぐ神輿は、二百段の石階を一挙に駆けおりる。参道入口に、神聖に飾られ

に行われていたが戦後四月二十五日に変更された。桜花爛漫の節で百合ヶ岡公園に神幸され親しく祭りが行われるようになった。当日は町内老人の人達の招待などあり各方面からの参拝者で賑う。

かいこ神さま(養蚕神社)

この養蚕神社は、小野町外九ヶ村養蚕組合連合会傘下の四千有余人の信者からの浄財により、昭和九年五月五日塩釜神社境内に建立された。

祭神は、伊勢の延喜式内県社伊奈富神社からの御分靈である。

煙草神社のように、町だけでなく各町村からの氏子が参加し祭典が行われるところに特色がある。

羽黒さま(出羽神社)

羽黒さまは、小野郷の主、谷津作村平館の城主小野正平公が武運長久を祈願するため、山形県出羽三山神社から勧請した古社である。正平公没後、家臣等を附近六ヶ所に住まわせこれを小野六郷六屋敷と称したという。

そしてこの羽黒社を小野六郷総鎮守と定め五穀豊穰郷民の安全を祈願してきたという。

いつ頃造られたものか「小野六郷総鎮守羽黒社」と彫刻された古額が残っている。

浦安の舞

浦安の舞は四人の舞で、毎年例祭当日奉奏する。巫女は氏子の中から小学五、

六年生四人選ばれ三年間位継続して奉仕する。

浦安の舞は、宮内省楽部楽長多忠朝の作曲作舞によるもので、昭和十五年皇紀二千六百年奉祝の時はじめて奉奏され、以来四十年余続いている。

御製 天地の神にぞいのる朝なごの

海のごとくに波たため世を

この浦安の舞は、鹽竈神社、諏訪神社(夏井)、飯豊神社でも、各々例祭当日奉奏している。

取子

当社には取子と称する信仰がある。

俗に取子にあげるともいうが、よりする

に神さまの子供として、おあずけして守ってもらうわけである。取子名簿によると、明治生まれには命名取子、改名取子など比較的多い。健康祈願やその他の取子をあわせる

と約百名はいる。古い取子はなくなつた方も多いが、九十になんなんとして、なおかくしゃくとしていられる方もおり、少年取子もいる。

佐久間孝司さんのお話(中通)

私たち兄弟は生まれた時から弱く、親たちが心にくれ、兄と一緒に赤沼に行き、大雨で橋が流されたところを、おんぶして行って、取子に上げ祈願してもらつた。それ以来日増しに丈夫になってきたと言っていました。

それ以来戦前戦後通しての、一貫した信仰のおかげで、現在も達者で商売を続けております。ことに、太平洋戦

争中は、海軍水兵として、戦斗はげしいソロモン群島ブーゲンビル(山本五十六大將戦死の所)にありながらも、戦死もせず元気で帰つてこれたのも、羽黒さまの取子のおかげと信じております。

今でも年のはじめには、かならずお参りにゆくことにしています。

矢大神さま(矢大神社)

桓武天皇の御代、延暦年中、征夷大將軍坂上田村麻呂が奥州のエゾを討伐鎮定したため、人民各々産業に安んずることができた。

大同四年小野篁が救民撫育使として、この地に下向され人民に殖産興業を教え、また博学俊才剛直をもって知られ詩歌に長じ文学をも伝えられた。以後当地方は平和で豊かな農村として発展した。後の人、その文明開化につくされた遺徳をしのび、命が崇敬の厚かつた天日和志命を主祭神として、矢大臣山のいただきに報賽の小祠を建立したが、その後小野仁井町の聖地に奉遷した。

俗に篁宮、篁神社とも称したが、明治維新後矢大神社と改称した。

例祭は毎月旧四月八日であるが、産業振興発展の御神徳をもつ神として、地方の信仰があつた。

矢大臣神社

矢大臣山の山頂附近に石の祠があり、木像の御神体(小野)

がまつられている。

数年前、何者かによって御神体がぬすまれ現在は、新たに彫刻した御神体を氏子の湯沢地区の人々が管理している。

年に一度の山開き当日は、区長や役員、老人会の人達また観光協会の役員などが参列し、一般登山者もまじえてお祭りがおこなわれている。矢大神社がこの山頂から遷つたあと、この矢大臣山と神社は、人々の信仰のよりどころとして完全に残っているのである。

お稲荷さま(和久稲荷神社)

和久稲荷神社は、大正六年火災により焼失したが大正七年九月に再建された。御神体は京都伏見稲荷神社から新たに分祀された。太平洋戦争前は、浜通りからの漁師の信仰も多かったという。

稲荷神社を村の氏神として祀るところは、和名田と谷津作だけとなっているが、実際には、個人・まけ・一族・部落などでまつられその数は非常に多い。(氏神信仰参照)

天王さま(八雲神社)

八雲神社は、天王さま、キュウリ天王さまなどと称している。祭神は素盞鳴命であるが、庶民に親しみ深い神さまである。もと牛頭天王と称したが、明治初年の御改正によって八雲神社となった。牛頭天王は素盞鳴命の附会の説であるという。素盞鳴命を祀る神社には、祇園祭り知られる京都の八坂神社をはじめ、津島神社、水川神社等がある。

一番多いのは八雲神社である。八雲神社は概して山間地帯に、水川神社は平野地帯に祀られている。

天王さまの夏祭りは、大い旧六月十五日に行われる。そのころは気温の高い日が多く、雷雨がくることもある。

乾燥の気が高い節でも、ふさふさとしたキュウリ藪に、大きな実をならすことが出来るのも、天王さまのおかげである。祭りにはキュウリ二本をあげて、お恵み一本をいただいてくる慣習がある。

また、一般に初物を食べると七十日長生きするともいわれるが、キュウリは夏の疫病をはらいのける野菜でもある。また旧六月十五日は大潮の日で、海の水のさしひきが最も大きい日である。

遠藤晃さんのお話(小野赤沼)

反町の天王さまの祭りには、近村からの参拝者が多いが、私は日中海に行き、こんぶや貝類などをとって来ますが、地方から行く方も大変多い。帰ってから、わが家に出来たキュウリを二本もつてお参りに行き一本をもらって来たものです。近年はお参りに行くことも少なくなりました。

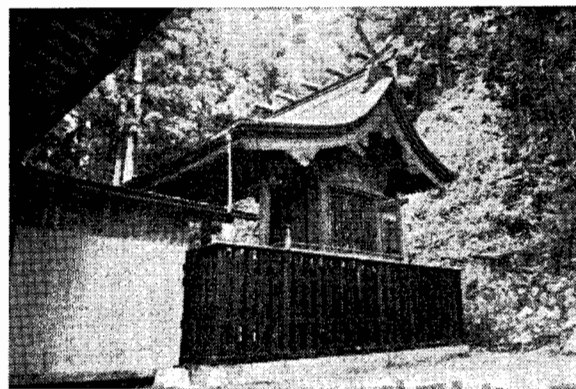
国治神社(皮籠石)

当社はもと三十八神社と称したが明治十二年国治神社と改称した。祭典には氏子全員が参列し厳肅に行われる。

先崎博信さんのお話(皮籠石)



飯豊神社



諏訪神社 (夏井)

当国治神社の氏は伝統を重んずる念厚く、お祭りに氏は氏子もれなく参列してくれますので祭りはいつも盛大に執行されます。

また氏子参拝の折「みやつと」(青い茅で「つと」を作ると赤飯を詰めたもの)を奉る風習がいまも守られています。

若宮八幡神社(八幡さま)  
小野町に若宮八幡神社は二社ある。一社は菖蒲谷の鎮守さまである。本町の八幡さまは塩釜神社の末社になってい

たものだ。もみ種を小さい俵につくって奉納するが最初の年は、別な俵を一つ受けて来て作付けする。よく出来ると次の年は俵を二つ作ってお返しするのである。そして又、他人の奉納した俵を一つ受けて来て作るのである。

早朝お参りに行くのだが、順番が早いと、おふだなどのほうびをもらったこともある。

昔は大層にぎやかなお祭り、小野町は勿論蓬田や滝

根・川前などからも参拝に来た。

山頂にお宮があり、大倉から登る参道もあった。昭和二十年頃までは盛んだったと思う。まだ当時経験した人達がいっぱい残っている。

諏訪さま(夏井・諏訪神社)

今から千二百余年前、光仁天皇の御代宝亀十年、征東使藤原継繩卿が東夷征伐の際、勝軍を祈願する為、社壇を築き、杉二本を植え、諏訪大神を祀ったという。

この諏訪さまは、田村東南郷の古社として知られ、小野郷六諏訪の一の宮として三十七カ村の庄屋が参集し祭事をとりおこなう慣習であったという。(明治維新後庄屋廃止と共に廃止された)

石井英吉さんのお話(夏井)

湯花祭については、親の代から聞いていたが、毎年土用入口に行っています。当日総代祭事員が手伝ってやりまます。神社に向かって右側の庭で行いますが、下枝を払った竹を一間四方に立て、しめを張ります。それから中央に、三方に石を二個位ずつ重ね、かまどを作る。そして大釜をそなえ付けます。それから縁側に机を出して神饌をお供えます。払ったササを束ねて、これもお供えしておきます。

神主さんは神社に近い側に、総代祭事員は右側に、一般の人は神社に向かい立って整列します。お祓いの次に祝詞奏上をされて、神主さんは釜の前に行きます。そし

て忌火で沸かした釜の熱湯の中にササをさし入れ、何かとなえ言をしながらかきまわし、最初神饌にお祓いをするときのようにしてササの熱湯をふりかけます。また釜の前に行き、同じことをくり返しながら、総代祭事員、次に一般と順次、ササをもって熱湯をふりかけます。

それから玉串の奉奠をして式は終わります。

菅布祢神社(浮金)

菅布祢は、もと菅船であった。坂上田村麻呂東征の折、大滝丸などの賊徒を攻めようとしても湿地や湖沼にはばまれ大変難渋をしていたところ、一夜猿田彦命が夢枕に現れ、舟に菅を立て攻むるべしとお告げがあり、そのように擬装して攻めたところ大勝利を収めることができたという。

田村麻呂は、蓬田岳の山頂に祠を設け、猿田彦命を祀り、神恩に感謝したという。浮金の菅布祢神社は天正七年蓬田の菅布祢神社より分祀したと伝えられる。

菅布祢(菅船)神社は、町内では一社であるが、郡山市、平田村などに多く、宗教法人神社としては、現在二九地区に祀られている。

浮金の菅布祢神社には、三匹獅子系の小獅子舞が伝えられており、毎年例祭に奉納されている。ある年奉納を休んだところ、たちまち悪疫が流行し、恐れた村人達は、それ以後どんなことがあっても獅子舞だけは奉納することにな

る。祭りは町内若連により執行されるが神社役員をはじめ氏子また近郷からの参拝者が多く、金魚すくいなど種々の催し物があり終日参拝者がたえない。

愛宕さま(飯豊神社)

飯豊神社は、通称愛宕さまと呼ばれている。神仏分離令の以前は愛宕大権現と呼ばれ、社殿は、今なおその姿をとどめている。祭神は火産靈神であり、日常生活に欠かすことのできない火の守り神であり五穀の神でもある。

鈴木要男さんのお話(小野赤沼)  
愛宕さまには、よく参拝に行っ

っているという。

諏訪さま（上羽出庭・諏訪神社）

征夷大將軍坂上田村麻呂が東征の折、賊徒が霧島岳の麓、達谷窟にこもり抵抗した為、大いに難渋した。將軍は、信濃国諏訪郡に座す武神諏訪大神を選擇祈願して進軍したところたちまち賊を平定することができたという。

これすなわち、諏訪大神の加護のお陰と、大同二年辻の内に社殿を建立し、遷宮式を執行するに当たり將軍自ら部下を率い、社の北方平坦地において模擬合戦を行って神慮をなぐさめたと伝えられている。

戦後ではあるが数十年にわたって行われた節分祭での厄祓い・追儼（おにや）行事は、近郷近在からの善男善女が境内にあふれるほどであった。

妙見さま（大倉・大倉神社）

大倉神社は、大倉先崎党の総鎮守として、宝龜九年五月（七七八）の創建と伝えられる。

光仁天皇の御代、平主水が下総国より奥州に下向の時、わが氏神を大蔵坊という者に託して、大倉に奉祀したといふ。

又一説に、田村將軍悪路高丸を討滅して、兵士をねぎらう時、武器馬具を収める所を大倉と名づけ、大倉はこの地

方起源の地ともいわれている。

おこもり 例祭の前日は、先崎党の一族が神社の内外を清掃し、鳥居、お宮、お籠り堂、

神馬殿等にしめ縄を張り、おまつりの準備をすませる。夕方になると大楽党はじめ氏子や子供達が参籠に集まり、参拝ののち御神酒をいただき、思い思いにいろんな話をしながら、おこもりをして一夜をすごす。祭典に関する一切の権限は先崎一族がもっており、八幡さま熊野さまの祭礼の時は、大楽一族がやることになっているが、妙見さまのほうにおこもりはしません。（大楽敏さんの話・大倉）そのほかに、大倉全部でおまつりする神様があり、これは、当番制で執行しています。

たばこ神さま

煙草神社は、たばこ産地多年の待望していた賠償金百万円突破を機として創建計画がもりあがり、昭和三年十月伊勢の豊受神宮から御分霊を受け、盛大に遷座祭が行われた。当時の専売公社の管轄の関係上、小野新町・飯豊・夏井・大越・滝根・二瀬村田母神などの耕作者が氏子となって煙草祭として定着した。めずらしい広域町村圏のまつりとして今も続いている。（先崎 三郎）

二 寺院信仰

小野町には以前二六カ寺の寺院があった。現在あるのは一三カ寺で、曹洞宗五カ寺・浄土宗四カ寺・真言宗三カ寺・臨濟宗一カ寺である。開山の年代は、伝承によると、平安時代の初期から江戸時代の初期まで、実に八七〇年の開きがあった。その真相を知ることが困難である。

現存の一三カ寺のうち、五カ寺は室町時代の中頃までに開山され、八カ寺は、室町時代末期の開山である。特に天正年間において一挙に、五カ寺が開山された。このことは、貴族中心の仏教から庶民仏教へと大きく信仰心の思想的変動を示しているものと言えよう。室町時代の戦乱の影響は小野町地方にもおよび人心の不安が、現世利益や極楽往生を願う信仰へと道を求めて行つたのであろうことが推測される。しかしながら、正確な史実が乏しく、全寺院の真相を把握できなかつた。今後の調査に待ちたい。

尚、明治元年（一八六八）神仏分離令が出され、排仏毀釈の運動が起こった。神仏習合の濃厚な、飯豊の愛宕大権現、本町の若宮八幡などは、仏教排斥で、飯豊神社、若宮八幡神社に改名したが、その名残は、今も色濃く残っている。又、こうした影響を受けた神社は町内随所にあるのである。

以下、現存の一三カ寺について、宗派毎、寺院毎の本末寺関係、寺院規模、縁起、縁日などから、寺院信仰のあらましをさぐって見たい。

真言宗

真言宗は、空海（七七四―八三五）が中国で密教を学び日本に広めた。伝承によると、小野町へは他の宗派に比べ一番早く伝来したとされている。教義は、宇宙のすべては大

日如来のあらわれで、大日如来の智徳と慈悲によって成り立ち、この身このままで仏になる即身成仏の教えで、手に印を結び、口で真言を唱え、心で仏を念ずる三密の修行を説いている。本尊仏は大日如来であるが、必ずしも本尊仏を特定しないことになっていて、三カ寺ともに違っている。



極 楽 寺

菩提山極楽寺

所在地 大字皮籠石字漆平八三番地

- 宗派 真言宗智山派
- 本山 智積院
- 本寺 報恩院(明治以降)
- 末寺 永藏寺(菅藻谷) 常光院(雁股田) 正福寺(谷津作) 光明寺(夏井) 来迎寺(湯沢) 東性寺(塩庭) 善能寺(上羽出庭) 守源寺(平田村大字鴫子)
- 智藏寺(郡山市大字田母神) 竜藏寺(滝根町大字広瀬)

神俣村・蓬田新田より用材を集め、山神村・皮籠石村の助力で、堂宇を再建し、同十六年檀徒により山地も寄進され、正徳四年(一七一四)入仏落慶法要を厳修したと書き残されている。その後は明治三十五年暴風により倒壊、大正三年再建したが入仏法要の日焼失し、昭和四年再建し現在に至っている。

古文書によると極楽寺は御朱印式拾石(一書には百式拾五石)の法境とあり、また言い伝えによると拾万石の格式を有したともいわれている。一方境内の卵塔石碑に、菊の御紋章の使用を京都随心院より許されたことが刻まれているし、宝物箱表にも菊の御紋章が描かれている。特に何か深い由緒があったものと思う。

菩提山往生院極楽寺については、伝えによると、坂上田村麻呂が東征中に故郷で母が死亡した。その母親の霊を供養するために往生された母の菩提が極楽の世界に生かされるようにとの信心によったものと言われている。なお同じようなことが、東鑑にもある。源頼朝が東夷征討の大功労者だった田村麻呂の母堂の霊を供養するために同名の寺院を建立したとある。

また、下男伝助の物語がある。伝助は出家して名を改めて泰運と言った。出家後も性格が良くならなかったので勘当されてしまった。師匠が不在のすきを見て寺に入り泥棒した。村民達がつまえて、殺してしまった。それからは村に災難が絶えなかった。泰運の祟りであることを悟り、時の名主中野太次郎が呼びかけて境内地にお堂を建て、祀り、供養したところ、以後村民はしあわせになれたという。

無量山光明寺

所在地 大字夏井字町屋三〇番地

宗派 真言宗智山派

広藏寺(滝根町大字広瀬) 円楽寺(小野新町字寺下一〇三番地現在保泉寺の所在地)

光明寺竜藏寺を除いて末寺一〇カ寺は廃寺になった。

開基 坂上田村麻呂

開山 不詳

開創年号 延暦十六年(七九七)

本尊 阿弥陀如来

世代 不詳

本堂 四五・五坪 昭和四年改築

庫裏 六〇坪 昭和十二年改築

山門 江戸時代(年代不詳)

鐘楼 昭和四十九年再建

梵鐘 昭和四十九年再建

(元の梵鐘は第二次世界大戦で金属回収があり供出した。以下供出と記したものは、本件と同じ意味である。)

行事 不動明王祭礼 六月二十八日 家内安全、交通安全 全等の祈願を主とした護摩供で、近辺の主婦等が参詣に訪ずれる。

縁起

極楽寺の伝承によると、開基が坂上田村麻呂にな

って、町の寺院の中では最も古いことになる。

開山当時は、神俣にあったが、小野山神・皮籠石字古坊を経て現在地に移ったと伝えられている。

当寺の中興といわれている祐膳和尚の位牌の裏書きによると、

寛永十四年(一六三七)住職有鏡・寛永十五年(一六三八)住職日

濟・元禄十一年(一六九八)住職祐膳の三回火災にあい、堂宇焼

失したとある。祐膳和尚は再興に尽力し、元禄十五年菅ヶ谷村・

本山 智積院

本寺 極楽寺

開基 不詳

開山 賢真(中興開山)

開創年号 嘉承二年(一一〇七)

本尊 不動明王

世代 二四世

本堂 四八坪 明治二十七年改築

庫裏 三八坪

縁起

光明寺は平安時代の中頃嘉承二年(一一〇七)の開創と伝えられている。しかし、永い間無住の時代

があったらしく、世代の住職の数が少ない。

本寺に当たる極楽寺在僧の賢真が、明治二十七年四月十日、檀

家から強く請われて、住職として入寺した。開創当時の開基・開

山はすでにわからなくなっていた。檀頭佐藤藤四郎が、率先して

檀家を結集し、菩提寺再建の事業を成し遂げた。この時の住職が

賢真であった。賢真が中興の祖になった。

医王山東光寺

所在地 大字飯豊字寺下七五番地

宗派 真言宗智山派

本山 智積院

本寺 不詳

末寺 竜光寺(滝根町神俣・廢寺)

開基 不詳

開山 鏡弘(中興?)

開創年号 明和元年(一七六四)

本尊 聖如意輪観世音菩薩  
 脇侍 日光菩薩 月光菩薩  
 世代 中興二八世  
 本堂 六一・七五坪 寛政四年(一七九二)建立  
 庫裏 三〇坪 昭和四十七年建立  
 鐘楼 昭和五年建立  
 梵鐘 無(供出)  
 行事 成田山講中 一月 檀中から交替で代表若干名が例年参詣に行く。  
 合同年忌供養 三月十八日  
 薬師祭祀 旧八月八日 檀信徒百五十人程があつま  
 り、午前中祭典法楽、午後は家内安全、五穀豊穡の護  
 摩供を厳修する。夜は若連による奉納盆踊りで賑わう。  
 東光寺は開山当時は他宗であったとも伝えられている。本尊・脇侍な  
 どから見ると、改宗されたとも考えられる。

浄土宗

浄土宗は、法然(一一三三—一二二二)を開祖とし鎌倉時  
 代以後、全国に広まった。教義は阿弥陀仏つまり、西方極  
 楽浄土におられ、大慈悲をもって衆生のため救いの手をさ  
 しのべてくれる仏さまを信じ、「南無阿弥陀仏」と念仏を  
 唱えることよって、どんな人でも一切の苦から救われ、  
 そのまゝの姿で浄土に生まれかわることができると説いた。  
 他力往生の教えと阿弥陀仏への念仏行である。本尊仏は阿  
 弥陀如来で脇侍は観世音菩薩と勢至菩薩である。

東堂山満福寺  
 所在地 大字小戸神字日向二八番地  
 宗派 浄土宗名越派  
 本山 智恩院  
 本寺 専称寺  
 末寺 称名寺 滝根町神俣にあったが、寺籍のみである。  
 開基 坂上田村麻呂  
 開山 徳一  
 開創年号 大同二年(八〇七)  
 本尊 阿弥陀如来  
 脇侍 観世音菩薩 勢至菩薩  
 世代 二世 元龜元年(一五七〇) 浄土宗に改宗以降の  
 世代

本堂 三〇坪 正徳二年(一七一二)建立  
 庫裏 九〇坪 文久三年(一八六三)建立  
 諸堂 観音堂 宝曆三年(一七五三)建立。大正十四年焼失。  
 毘沙門堂 寛政八年(一七九六)建立。  
 田村堂 年号不詳 坂上田村麻呂を祀ってある。  
 龍堂 年号不詳  
 山門 仁王門 宝曆六年(一七五六)建立  
 鐘楼 万延二年(一八六一)建立  
 梵鐘 昭和二十三年四月再鑄(供出)  
 行事 聖観世音菩薩御開帳会 五月三日(もとは旧三) 通称  
 東堂山祭 法会と東堂山講中、他協賛奉納例大祭

縁起 満福寺開山の伝承によると、平安時代の初期、延  
 暦二十年(八〇二)坂上田村麻呂が征夷大將軍とし  
 て、陸奥地方の蝦夷征伐の時、霧島岳(大滝根山)を根城にして、  
 悪逆非道の限りを尽くしていた悪党大鬼丸一味の退治に先だち、  
 日頃信心の観世音菩薩に「能救世間苦」の祈願をし、出陣したと  
 ころ、たち所に全山鳴動・土気百倍・連戦連勝した。田村麻呂は  
 邸宅を寺に改造して観音さまを祀り、信仰していたとも伝えられ  
 ている。

戦死の将兵・愛馬の追善供養と観音さまへの感謝の心から、法  
 相宗高僧徳一を勧請して大同二年(八〇七)樞の一木彫りの観音  
 像を作り開山したと伝えられている。  
 堂宇を東面して霧島岳に対向させて、山号を東堂とし、大悲薩  
 埵の福徳円満であることを祈願して寺号を満福と名付けた。  
 治乱興亡の中で諸宗乱住の歴史をへて、室町時代も末の元龜元  
 年(一五七〇)浄土宗の高僧良拾が住職となり、中興、改宗した。  
 満福寺は領主の祈願所にも列せられ、縦一町、横二五町余を  
 境界して除地の礼遇を受けたとも伝えられている。

馬の守護神として、東堂山は県内各地から信心され、絵馬など  
 も沢山奉納されたであろう。中でも洋人曳馬図は、県の重要文化  
 財にも指定されている立派なものである。  
 又、鐘楼は、周囲の風景を生かした美術的建造物として、町の  
 重要文化財に指定されている。

仁王門

山門のことであるが、仁王神像二体が安置されて  
 いるので仁王門と呼んでいる。篤志信心家の渡辺喜  
 右衛門(大字小野新町字本町)が、宝曆六年(一七五六)に、国土安  
 穩・万民富楽を祈誓されて寄進した。仏法の守護神で、筋骨隆々

として、口を開いて外敵を怒号し、一方は口を固く閉じて内に力  
 を込めている、阿吽の姿が、力強くあらわれている。

光明山無量寺

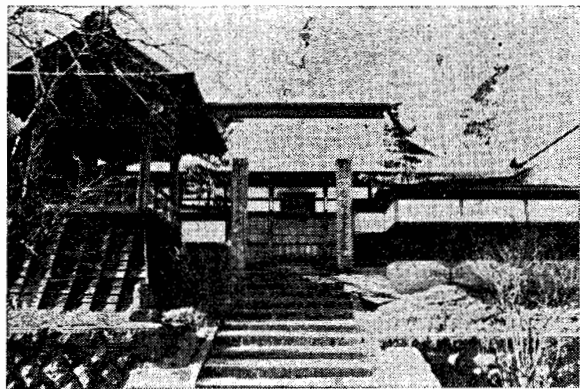
所在地 大字小野赤沼字寺前七二番地  
 宗派 浄土宗名越派  
 本山 知恩院  
 本寺 専称寺  
 開基 不詳  
 開山 良拾上人(授徳)(中興開山)  
 開創年号 天正十一年(一五八三)  
 本尊 阿弥陀如来  
 脇侍 観世音菩薩 勢至菩薩  
 世代 三五世  
 本堂 阿弥陀堂 一六坪 元禄四年(一六九二)再建

縁起

無量寺の開山は阿弥陀三尊像を見る限りもつと前  
 になりはしないだろうか。無量寺の仏像は、白水阿  
 弥陀堂の如来像と同時代のもので伝えられている。白水の如来像  
 は藤原秀衡の妹徳尼が夫の霊を供養するために、永暦元年(一一  
 六〇)に平泉のものにならって造られたものと言われている。  
 また、白水阿弥陀堂は天台宗から真言宗に改宗している。

小野六郷に天台宗筑波寺の末庵があり、この寺に恵心僧都の作  
 による阿弥陀如来像が安置されていたと伝えられているので、開  
 山当時は天台宗で、天正十一年に浄土宗に改宗し、中興されたの  
 ではないかと思う。

中興開山授徳(専光寺開山善補の舎弟)は、奥州奈良輪(双葉郡広野  
 町)成徳寺住職で、後に専称寺(いわき市山崎)の本山貫主にまでな



専光寺

られた高僧だった。本尊の台座銘によると赤沼館主会田遠江守源重信・葛蒲谷村会田左馬頭が大旦那となり仏前神保普賢・雁又田高雲・塗師先崎但馬に頼み、天正十一年五月、仏像の修理が完了したという。阿弥陀如来像は、以前から安置されてあった。脇侍の観世音菩薩は、源重信・勢至菩薩は会田左

馬頭に寄進させたと伝えられている。浄土宗の三尊仏は、前記の通りなので、これで宿願が成就し、専称寺を本寺にして改宗したと考えられる。

無量寺は、いつの頃か焼失し、再建の阿弥陀堂と阿弥陀三尊を残すのみであるが、古寺と呼ぶ地が奥にあり、坊のつく地名が五カ所も残っている。このことから、むかしは浄土式庭園をそなえた白水阿弥陀堂のような立派な寺だったのではないかと推測されている。

ここの阿弥陀三尊は、県指定の重要文化財、阿弥陀堂は町指定

の重要文化財である。

一庭山松縁寺

所在地 大字上羽出庭字東前六五番地  
宗派 浄土宗名越派

本山 知恩院

本寺 専称寺

開基 吉田丹波守

開山 良西

開創年号 天正十一年(一五八三)

本尊 阿弥陀如来

脇侍 観世音菩薩 勢至菩薩

世代 二七世

本堂 三六坪 天保十五年(一八四四) 建立

庫裏 四五坪 昭和五十二年建築

行事 地蔵講 縁日毎月二十四日。五月十四日講中大祭。この日は講員以外の人達も参詣する。地蔵菩薩の功德を祈願し、報謝する祭礼である。

縁起

松縁寺は、安土桃山時代の開創である。享保年間(一七一六〜三六)と天保年間(一八三〇〜四四)の二回火災に遭い焼失した。その後、大檀那吉田丹波守が発起人となり、二瓶右馬介、大竹大角守、吉田権守が菩提寺の再建築を全面的に支持され、檀信一丸の協力で、天保十五年に堂宇が落成した。中興の開山住持は勇運で、なお、境内に十五館ありとの伝えもある。

小野山専光寺

所在地 大字小野新町字館廻八七番地

宗派 浄土宗名越派  
本山 知恩院  
本寺 専称寺(開山当時は京都清水浄善院)

開基 田村右馬頭頼通(実質上は蓮善補)

開山 善補

開創年号 慶長元年(一五九六)

本尊 阿弥陀如来

脇侍 観世音菩薩 勢至菩薩

世代 三二世

本堂 六七坪 元禄十一年(一六九八) 建立

庫裏 一三二坪 昭和十二年建築(五五坪増築含む)

山門 文政十二年(一八二九) 再建

鐘楼 明治四十四年再建

梵鐘 昭和三十六年再鑄(供出)

諸堂 薬師堂 縁日八月二十八日 「め」の如来様として親しまれ、例祭には近辺からの参詣者で賑わう。

観音堂・馬頭観世音祭礼 縁日八月十七日 もとは二瓶家の持仏だったが、専光寺に移管され、信者の心願成就祈願の祭礼として親しまれている。

百万遍御忌会 一月二十五日 浄土宗の開祖である法然上人のご命日にとめる法要を御忌と称している。

檀信徒が集まり数珠練りをし、念仏を唱え、宗祖の御徳をたたえる法会である。

専光寺の開山善補は、石川郡平田村蓬田の出身であつた。永禄年間(一五五八〜七〇)、本山専称寺で

修業され、本山住職を要請されたほどの名僧だった。

縁起

専光寺の開山善補は、石川郡平田村蓬田の出身であつた。永禄年間(一五五八〜七〇)、本山専称寺で修業され、本山住職を要請されたほどの名僧だった。

行脚の途中、同郷の蓬田小左衛門宅に一泊された時、小野城落城の事情を聴かされて憐れまれた。小左衛門から追善供養のために永住を切望されて開山の座につかれた。

小左衛門本光は落城後、城跡に修善と名付けて隠居暮らしていた。そこから寺名を修善庵と名付けた。時に慶長元年(一五九六)である。慶長六年、厩舎の場所に五〇坪の本堂の建立を発願、寛永二年に完成した。なお、小左衛門と蓬田土庵は境内地として二〇〇坪を寄進された。その後も小左衛門は庫裏・本尊阿弥陀如来を自力で寄進するなど、篤志寄進の願主で、実質的な開基大檀那であつたが、開基の座を城主に譲る。

臨濟宗

臨濟宗は、栄西(一一四一〜一二一三)が日本に広めた開祖である。教義はこの身即ち仏なりということで、自身仏である。たゞし、そのためには、坐禅にしくなしと説き、坐禅によって自己の脱落安心、本来が無一物であるという正覚を自身に体得できると言われ、一挙手一投足が創造的主体性をもった何ものにもかかわりあいのない自由な働きであることを主唱された。本尊仏は釈迦牟尼仏、脇侍は文殊菩薩と普賢菩薩になつている。

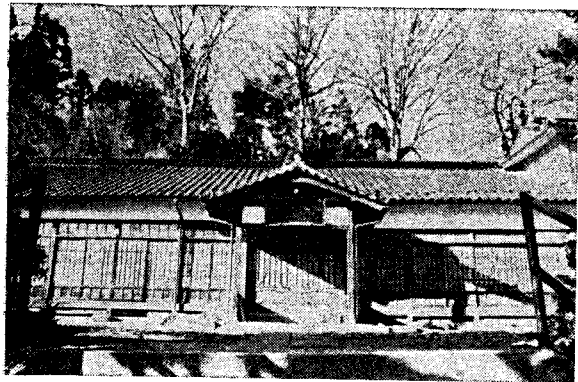
牧牛山普賢寺

所在地 大字小野新町字丹後坂四番地

宗派 臨濟宗妙心寺派

本山 妙心寺

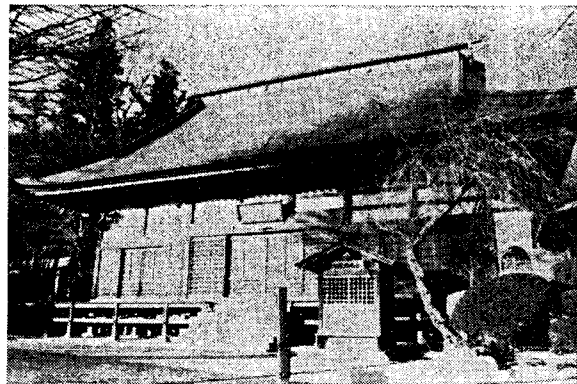




保 泉 寺

曹洞宗は、道元（二〇〇—二五三）が日本に広めた開祖である。教義は、正伝の仏法は釈迦牟尼仏の教えに帰一することである。したがって、全一の仏法である。自愛用三昧即ち端座參禪即坐禪こそ仏法の正門なりと言われた。坐禪とは人間の迷い心を去って覚りの世界に入る修行ではなく

- 本堂 一〇〇・一一坪 明治二十九年再建
  - 庫裏 六六・六二坪 明治二十九年建築
  - 山門 寛延三年（一七五〇）建立
  - 鐘楼 昭和四十一年再建
  - 梵鐘 昭和四十一年再鑄（供出）
  - 諸堂 觀音堂 縁日八月十七日 觀音菩薩の大慈大悲の願力をたのみ、信者の福德圓滿を祈る法要である。
  - 行事 刀八毘沙門天祭 一月初寅 正月最初の寅の日が恒例祭になっている。献膳の法要があり、家内安全、家運増長を祈願する。町内の善男善女で賑わう。
- 所在地 大字小野新町字寺下一〇三番地
  - 宗派 曹洞宗
  - 本山 永平寺 總持寺
  - 本寺 長泉寺（宮城県角田市）
  - 末寺 月叟寺（浮金） 雲林寺（南田原井） 吉祥院（吉野辺） 宝蔵寺（滝根町広瀬）
  - 開基 石川治部大夫
  - 開山 日州建作
  - 開創年号 文龜元年（一五〇二）再開年
  - 本尊 釈迦牟尼仏
  - 脇侍 文殊菩薩 普賢菩薩
  - 世代 三世
  - 本堂 五五坪 昭昭二十四年増築
  - 庫裏 五三坪 二階共 昭和五十一年改築
  - 鐘楼 昭和四十年新築
  - 梵鐘 昭和四十年再鑄（供出）
  - 諸堂 毘沙門堂・觀音堂 文政十一年建立
  - 經藏 昭和四十一年建立



普 賢 寺

末寺 長松寺（郡山市糠塚） 觀音寺（谷津） 大伝寺（雇田）

長松寺の他は廢寺になった。  
開基 田村右馬頭清道  
開山 夢窓 中興開山 別山  
開創年号 觀應二年（正平六年）（一三五二） 牧牛山になってからの開創 慶長十年（一六〇五）  
本尊 十一面觀世音菩薩  
世代 三二世

禪修道ぶりであった。經藏までも造営されていた。文久四年二月（一八六四）の小野新町の大火で本堂はじめ諸堂を焼失した。當時を偲ぶ堂宇として藏地藏がある。格天井には、雪舟十世法眼等隨の彩色龍の絵がある。万米上人作の延命地藏を安置してあるが經藏ともみられる。

曹 洞 宗

曹洞宗は、道元（二〇〇—二五三）が日本に広めた開祖である。教義は、正伝の仏法は釈迦牟尼仏の教えに帰一することである。したがって、全一の仏法である。自愛用三昧即ち端座參禪即坐禪こそ仏法の正門なりと言われた。坐禪とは人間の迷い心を去って覚りの世界に入る修行ではなく

縁起 普賢寺は南北朝時代の觀應・正平年間（一三五〇—一五二）に夢窓が開山と伝えられている。以前は滝根町大字広瀬字西貝谷にあったが、大永二年（一五二二）開山源光と一書にある。天台系統の中興開山ではないかとも言われている。臨済宗に改宗して慶長十年（一六〇五）牧牛山の中興開山一七世別山の時に移転して来たものと推測される。開基の田村右馬頭清道は、大麥熱心な信心家で別山の道風に共鳴し、親子共に參禪にとめた。遠路の故をもって、反町に勧請し、山号を貝谷山から牧牛山と改め、禪道場にふさわしい伽藍の整備に尽くし、田村家の家紋である若荷を寺紋に認めるほどの参

大般若法会 一月中旬の日曜日に行われる。大般若六百卷の経文を転読し諸災消除を願う法会である。参詣は檀家と信者で、当日は附近の主婦が賄い接待を手伝い、本堂も狭いほどの賑わいとなる。

**縁起** 保泉寺は文亀元年(一五〇一)二月、大檀那石川治部大夫の時に開山されたとあるが、再開が志賀江釣と旧記にある。天保十年(一八三九)の大火で焼失し、詳細は不明である。

江釣は小野城主田村右馬頭の家臣で落城後に当領主蒲生侍従秀行を通じて寺院建立を願い出て、慶長十年(一六〇五)に古寺台に再建した。江釣の死後その子息将賢の貞享四年(一六八七)再び西庭に移転したとあるが、なお、正確な位置が不明である。寺の建立に際して、榊原式部大浦公の代に武田惣大夫・川田惣兵衛から境内山林等の寄進があり除地になっていた。保泉寺が現在地に移転した時期は正確には不明であるが、現在地は真言宗極楽寺の末寺で円楽寺があった跡地である。建築物もそのまゝの状態であった所へ保泉寺が、再建までの一時しのぎの仮居として現在地に移転したように思う。

- 所在地 大字浮金字越野三六七番地
- 宗派 曹洞宗
- 本山 永平寺 総持寺
- 本寺 保泉寺
- 開基 田村右馬頭清道
- 開山 宝嶽正珍
- 開創年号 天正九年(一五八一)

- 本尊 釈迦牟尼仏
- 脇侍 文殊菩薩 普賢菩薩
- 世代 二八世
- 本堂 四八坪
- 庫裏 三八坪

**縁起**

月叟寺開山の伝承によると、小野城主の家老藤井善重郎は、忠勇無類の家来だった。岩城常隆が小野城攻撃に先立ち、「城主の首を差し出せば、攻撃の手を引くから……」との無礼千万の要求をして来た。善重郎は即座に幼君の為に命を絶つことをきめ、「城主の一命を絶つに忍びず」と。従容として割腹、身代わりの首を届けさせ、幼君に事無きを得た。切腹の場所は、仲町天理教会の附近と伝えられている。以前この場所に金峰月叟居士と刻まれた供養石塔があった。往き来する人々は、頭をたれ、手を合わせ、忠臣のご冥福を祈ってからの場所を去られたと伝えられている。人呼んでこの附近を地藏町と名付けていたとか。

藤井家の者は馬で通る時でも、必ずおりて伏し拝んでから通られた。自刃の時、三春ゴザを敷き、正座し、幼君のつがなき成長のみを念じ、従容として敢然自害された。現在でも善重郎の子孫は、三春ゴザだけは絶対使わない家訓になっている。

不借身命の悲壮な最期を遂げた善重郎の菩提を追善供養するために、城主が開基大檀那になり、なお、小野六卿からも資材と労力の協力が有り、天正九年、伽藍が落成した。善重郎の戒名をそのまま充当して、金峰山月叟寺と名付けた。ひとときも忘れてならない忠臣に対する恩義の名称である。

**電光山雲林寺**

- 所在地 大字夏井字寺谷津作一三四番地
- 宗派 曹洞宗
- 本山 永平寺 総持寺
- 本寺 保泉寺
- 開基 宗方右近
- 開山 宝嶽正珍
- 開創年号 天正十二年(一五八四)

- 本尊 釈迦牟尼仏
- 脇侍 文殊菩薩 普賢菩薩
- 世代 二九世
- 本堂 五九坪 明治三十二年建立
- 庫裏 三五坪 二階建

**縁起**

雲林寺は樋口の館主の菩提寺であった。天正十一年(一五八三)三月、岩城城主岩城貞隆に敗れて落城した。天正十二年、寺谷津作に館を移した。この時に雲林寺も寺谷津作に再建した。その後明治二十四年焼失、明治三十二年落成した。

**源松山洞円寺**

- 所在地 大字飯豊字堂ノ脇五五番地
- 宗派 曹洞宗
- 本山 永平寺 総持寺
- 本寺 剛叟寺
- 開基 今泉山城守重経
- 開山 休道寿高
- 開創年号 天正十三年(一五八五)
- 本尊 薬師琉璃光如来

- 本尊 釈迦牟尼仏
- 脇侍 日光菩薩 月光菩薩
- 世代 二九世
- 本堂 四六・三〇坪
- 庫裏 一七坪

**縁起**

開山の由来記によると、開基今泉山城守重経(初五郎大夫)は小野城主小野右衛門督頭通の武勇の忠臣だった。天正年間、田村清顕が死亡。相続問題で伊達政宗と相馬義胤が交戦した時、重経は先陣の将として門沢で伊達の敵軍を破り勝利をおさめた。武勲のかけに多くの戦歿将兵の死をいたまれ、重経は発心して、知行地に一字の菩提所を建立した。場所は大沢又は大日堂か。開祖に休道寿高を勧請した。天正十七年一月、岩城常隆は小野城に進軍、重経は城主清忠に従って谷津作湯原で激戦すること数日、一以て千に当たり、悪戦苦闘し衆寡敵せず。籠城したが、一月五日、城主は自害し、落城してしまった。重経は大沢の知行地に土着し、寺田香花の資を納れ、将士の菩提を弔い、護持のためにつとめ、子々孫々当山の檀頭であるとするされている。

なお、洞円寺の裏山には、三三観音の石仏が安置されている。

**霊龜山吉祥院**

- 所在地 大字吉野辺字仲神一四七番地
- 宗派 曹洞宗
- 本山 永平寺 総持寺
- 本寺 保泉寺
- 開基 不詳
- 開山 日嶺高敏

開創年号 寛文十年(一六七〇)

本尊 虚空蔵菩薩

脇侍 釈迦牟尼仏 愛染明王

世代 二八世

本堂 四二坪 文政五年(一八二二)頃

庫裏 四二坪 昭和四十二年

縁起

室町時代末期になると、今までの貴族中心の仏教から、庶民中心の仏教へとかわって来た。吉祥院の

場合も同様である。

吉祥院の開祖は、本寺の六世である。開基が不詳になっているのは、吉野辺の社会構造が、すでに完全に組織が充実して来ていて、庶民中心の仏教への信仰心の志向が社会集団意識化していた現れとみられる。みんなで造った菩提寺と考えられる。

総意を結集して造営の堂宇が、天和二年(一六八二)に火災に遇い、文政五年頃に再建された。

(松崎龍童)

### 三 東堂山信仰

#### (一) 縁起

東堂山満福寺は小野町大字小戸神字日向の東堂山(海拔六五九米)の山腹にあり、浄土宗鎮西名越派の寺で阿弥陀如来を本尊とする。征夷大将軍坂上田村麻呂による開基と、法相宗高僧徳一大師が大同二年に開山したとの縁起を持つ。この開基・開山についての縁起由来は、東堂山田村家所有の『東堂山縁起』・『東堂山由来記』や、小野町教育委員会所蔵の『飯豊村郷土誌』などに見られている。

これらの縁起由来記には、延暦年間、東国の蝦夷征討の大將軍坂上田村麻呂が、菩薩の加護を宿借山(後の東堂山)に受けたこと、その菩薩の恩に報い、かつ、この地での戦いに果てた兵士と軍馬の霊を供養するため、徳一が、かやの一本を以て正観音菩薩・勝軍地藏・毘沙門天・不動明王の尊像を刻み祀ったこと、また田村麻呂を祀り国土安穩を祈る籠堂を、蝦夷の頭大竹丸のいた霧島岳(大滝根山)に対し東面にして建立し、このことから山号を東堂山とし満福寺が創建されたことなどを見る。(寺院信仰・東堂山満福寺の項参照)

この縁起由来は、古代文芸にもみられる田村(坂上田村麻呂)説話に登場する霧島岳の大竹丸(大滝丸ともいう)と、東国仏教の基をなしたといわれる徳一とを配した見事なものであるが、それだけに東国各地において見られる同様な伝承や、田村郡内における田村麻呂・徳一縁起を持つ多くの社寺との関わり合いに大きな興味がそえられるものでもある。

また、かつての馬産の地においては、それぞれの土地における観音への素朴な信仰が行われていたものだが、東堂山の観音信仰においては、田村麻呂と徳一による軍馬の霊への供養という独自の発生があるだけに、観音への信仰態度は一層高まり、また、信仰圏も県外にまで及ぶ広範なものとなったことは注目に価するものといえよう。

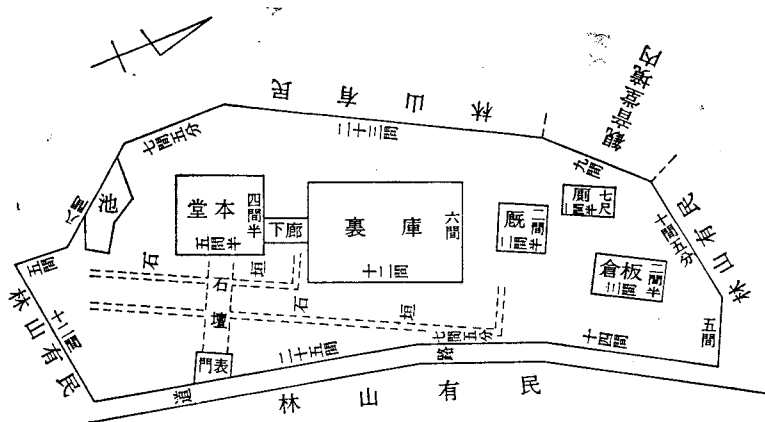
#### (二) 東堂山参り

「今日も朝から大変な人出だ。丁度、蟻の行列の様だ」と茶屋の婆さんがいっていた。土地の人が蟻の行列を見ると東堂山参りの様だといっているそうだが、東堂山に向かうどの街道も、今年も大勢の人で賑わっている様だ。

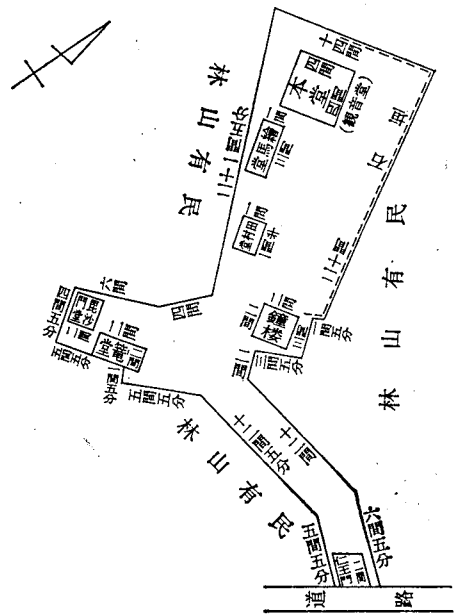
今日と明日(旧暦三月十六日・十七日)は、この人出を見込んだ出茶屋が街道沿いのあちらこちらに見られる。ここの茶屋(上野)も道筋の隠居が小遣い稼ぎに開いているものだ。豆腐汁・いも汁・田楽・大福餅などを売っているが、結構ここで中休みをする人も多い。

この街道(岩城)を行く人達も、大方が東堂山講中の代参の人達なのであろう二・三人連れが多い。この道筋には、岩城や蓬田・石川方面からの講中が多い様だ、なかには重そうな風呂敷包を背負っている人もいる、この春までに仔馬が授かった人で、一〇八つの投げ餅を背負ってお礼の参拝に來たのだ、講中の代参者のなかにも一升餅を背負って行く人もいる。茶屋の婆さんに武田の地藏への道程を尋ねている人がいる。この街道を行く人は大方が南田原井の武田にあるお地藏さまにもお参りに行く人達だ。街道筋には、字(屋敷)毎の旗立場に東堂山の祭礼を告げる幟旗(のぼり)がはためいているから、それを迎って行けばよい。

武田の地藏さまは延命地藏であるが、子育て地藏として仔馬の守護をしてくれるとして信仰されている。東堂山詣での



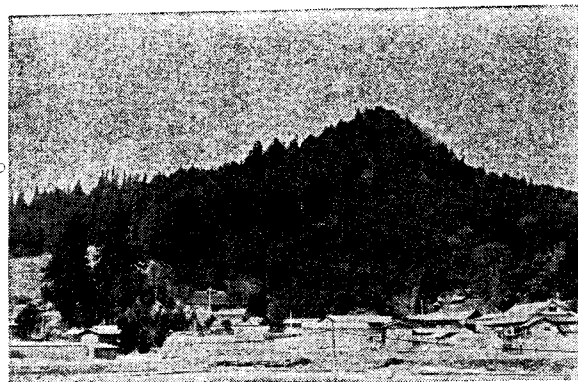
満福寺境内見取図



観音堂見取図

やがて東堂山の麓にある大名内の集落に入ると、夜見世(鷹)や大道芸がすでに何軒か店を開いていた。今夜はこの宿にお世話になることになっている。大名内の集落には、この日のための宿が何軒かあるが、どこも農家がそのまま宿として使われているものだ。どの宿も前前からそれぞれの講中の馴染みの宿なのである。

宿の人に泊まりの挨拶をし、早速お山に登った。東堂山満福寺への参道は坂が急であるが十五分程で登った。参道の両側には杉の大木が連なっている。これは各地の東堂講中で植えたものが育ったものだという。山門をくぐると満福寺の境内である。この寺の庫裏は見上げる程の高さの二階建てである。庫裏の中でお札を扱っており、すでにお護摩の受付場は列をなし、庫裏の中は一杯である。お札を扱っている部屋の奥の



東堂山遠景

人が途中で、または帰りがけにここには参拝に寄ることになっている。ここでは、豆粒が二つ程入った袋と、綿の入った袋とお護符であるが、豆の方は豆で達者で暮らせ、綿の方はふくよかに暮らせとの祈願が込められているもので、これを仔馬の首に掛けてやると良いといわれている。武田の地蔵さまの参拝をすませ道を小野新町に向かう。途中、湯沢の方から来た人達と連れだって話をして来た。湯沢の方では、昔は三春藩領だったためか東堂講や観音講がなく、それだけに東堂山の祭礼だといっても幟旗を立てることはしないが、やはり東堂山は馬の神様だから、馬を飼っている家では各戸にお参りに行くものだったといっていた。小野新町に入るとすぐの、平館の観音堂でお祭りが行われていた。通りがかりの人達の中にも、馬頭観音様を拜んで行く人もいる。あちらこちらで、十七日を馬頭観音の御縁日としてお祭りをしてるのである。小野新町に入ると商店だけでなく、臨時の出茶屋も出て一段と賑やかである。茶屋ではとろ天・大福餅・饅頭・氷水などを売っている。早くも、おみやげの品を店で選んでいる人達もいる。

小野新町のはずれに馬の糶市場がある。この馬市は三月十八日から二十八日まで開かれるのだが、東堂山の祭礼とも合うことから東堂市ともいわれ賑やかであるという。

小野新町から三春に向かう岩城街道を行く、町並みはずれると、そここの道ばたに、大形の東堂山の石塔や馬頭観音の石仏が目につく、これらは東堂講中の人達によって建てられたものが多いといわれている。岩城街道から東堂山へ向かう道が分かれる三叉路(坂裏)には、東堂山への大きな道しるべの石塔と幟旗が立てられている。

部屋には、お寺さんや警備の人達が詰めているし、二階の客殿には多く客人が泊まっている様だ、ニワやダイドコロには大勢のお手伝いの人が忙しそうに立ち働いている。

お護摩を焚いて戴くことをお願いして観音堂に向かった。観音堂への登り口に仁王門がある、その両脇に茶屋が建てられており、いろいろな紙絵馬が売られていた。ここでも豆腐・里芋・ところ天などが売られ一息入れている人達で賑わっていた。

宿に戻ると、三十人程の宿泊客でごった返していた。郡山・三春・会津・双葉からの講中の人達がいた、夕食は井飯である。食後、木の箱枕を渡され並んで寝た。

十七日は朝早く食事を済ましてお山に出かける、出がけに宿の人が草鞋を呉れた。この草鞋は参拝に來られた人達に差しあげるために作って置いたものだという。新しい草鞋を履きお山に登った。

今日は馬を連れて参拝に來た人もいる、赤沼だが朝五時には出て來たのだと、いつている人達や、遠くから夜を通して來たのだ、といっている人達もいた。

観音堂ではすでに投げ餅が行われている。お堂の前はそれを拾う人達でごった返している。講中の人達が背負って來た餅も積み重ねられ一石はあるだろう。お供えした分の半分位を交換している人もいる、持ち帰ってそれをお護符とし、馬に食べさせると病気になるものだといわれている。

ご開帳が始まるというので観音堂の中に入り拜んだが、薄暗く、またお線香の煙で、はつきりとは拜むことは出来なかった。東堂山の観音さまは、馬の神様だといっても、馬頭観音ではなく、正観音だそうだ。

ご開帳を拜しての帰りみち、講中の人達に配る紙絵馬と笹を茶屋で求め、庫裏でお護摩を焚いて戴いておいたお札を受けた。紙絵馬は馬小屋の前に張ると良いといわれ、笹は観音堂の脇にある、おみたらしに浸したものを馬に食べさせると病気にかからないといわれているものである。

下山の途中、町の人達と会った。この人達のことを「馬持たずの東堂山参り」だといっていたが、女・子供が多く賑や

かな人達であった。

明治四十年代頃の東堂山の祭礼について、多くのお年寄りから伺った話を代参の人の目をかりまとめてみたものである。鉄道(東線)が開通する大正六年以前の東堂山の祭り日には、武田・新町・東堂山とを結ぶ道筋には、行き來する人々が流れるように列をなしていたという、新町の発展が東堂山と全く無縁なものでないことは知られているが、祭礼の中で小野町全域が華やいだ雰囲気を持ったのも事実である。それは丁度、長い厳しい冬が終わった春の喜びであったのかも知れない。

### (三) 東堂講

小野町では、かつて優良馬の産地として馬を飼う農家が多かった。それだけに、馬匹守護として東堂山に対する信仰は強いものがあつた。しかし、町内における信仰形態としては、祭礼に講中として参拝をしたという地が意外に少なく、今回の調査のなかでも、小戸神の様に、祭礼には外から大勢の参拝客が來るので、とても自分達のこととは出来なかつたという地が二・三あつたから、これが町内の姿であつたのかも知れない。

吉野辺では、「ここは東堂山の地元だから観音講はなかつた。旧三月十七日の祭礼の前に生まれた仔馬がある家では、この日に一〇八つの投げ餅を持って行き、お供えするが、半分位は持ち帰り、その餅を交せて七つ位にしたものを屋敷の人や親戚に配つた、十七日以後に生まれた場合は、適当な日に行くか、または旧六月十七日に行った。仔馬が生まれると必ず東堂山に行ったものだ」といっている。

また、湯沢・浮金あたりでも、東堂講は無いが、祭礼には馬を飼っている家では各戸で参拝に行き、お札を受けて來たものだともいっている。

さらに小野赤沼では、旧三月十七日に東堂講をつくって組の人が集まり(二十人位)東堂山参りに行くが(これをお千度をあづかるといっている)。朝五時頃には出立をし、戻つて來てから宿で精進揚げをし、仔馬の無事出産の祈願をしたといっている。

飯豊の大日堂においては、馬を飼う者が集まる東堂山講中が結ばれていたが、祭礼には代参者が出かけ、お護摩を焚いて戴いて、受けて来たお札を家々に配るものであったといっている。

小野町外における東堂山講の姿については、周辺の市町村史の中で触れているのを見る。

小野町と隣接する『いわき』市においては、『いわき市史・民俗編』に「市内三和町下市萱では古く十九軒で講を組み、毎年二・三人で代参したと伝えている。戻ってくると、頭前を宿に祝宴を開く。なお、上三坂では、この講を柿のり観音といい、講の折は必ずそれを供え、その後観音様の前で投げ餅をした(柿のりとは、生粉をねり、柿をまぜて作ったものをいう)」とある。

また、『相馬市史三巻』には相馬郡飯館村の観音講として「講員の中から、田村郡小野町の東堂山満福寺の観音様に、

三月十六日一升餅を持って十七里の道を代参に出かける、翌十七日の祭典に参加し、神札・餅を受けて来て講員に配る。お護符の餅は馬にたべさせると病気になるという」とある。

さらに、北茨城市でのことを、『日本の民俗・茨城』に「牛馬の安全を祈るため春秋二回、福島県の東堂山に四人ずつ代参に行く、代参人はくじで決め、帰ってくると集まって御神酒をあげ、もらい受けて来たお札を配る。家々ではそのお札を馬屋にはって牛馬の安全を祈る」ともある。

この様に小野町外の東堂講は、一般的には代参講の形をとって来た様である。東堂山に保存されている古い講中帳の中にも、石城郡田人村大字黒田講中代参者として二名の氏名が、北会津郡湊村大字共和(馬渡)講中代参者として二名の氏名が、という様に各地の代参が記帳されている。

この講中帳を基にした東堂山での記録によると、

(1) 昔からの代参が現在も続いている講中としては、会津若松市、北会津郡



祭礼風景 (満福寺蔵)

の講三組・いわき市内山間部の講八組・石川郡内の講二組・郡山市内一組・茨城県内から三組がある。

(2) 祭典(現在は五月三日)の一カ月位前に、各地の世話人が勧募し参拝をする講中として、小野町内七十五組・田村郡内の滝根町十七組・大越町六組・船引町五組・常葉町四組・都路村二組・石川郡平田村十一組・郡山市田村町十組・同中田町九組・双葉郡葛尾村一組、いわき市内七組がある。

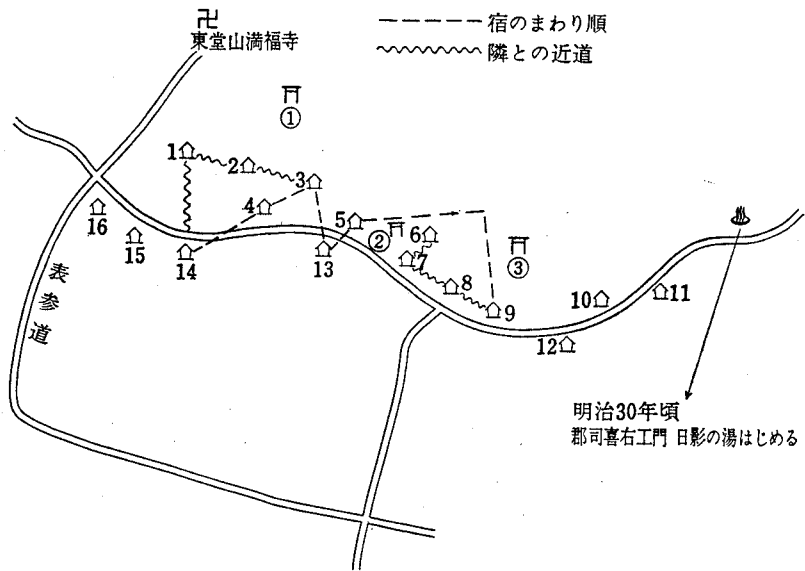
(3) 昭和三十年頃迄は来山していた講中として、会津若松市九組、耶麻郡猪苗代町十二組、同郡磐梯町二組、河沼郡河東町三組、南会津郡下郷町三組、東白川郡内二組、西白河郡大信村二組、相馬郡飯館村三組、双葉郡内二組、石川郡内一組、須賀川市内一組、いわき市田人町二組、同三和町一組、同平赤井一組、茨城県高萩市一組、北茨城市三組、久慈郡大子町二組、栃木県那須郡黒羽町一組があったことが知られる。

この記録から見ると、かつて馬産が盛んであった頃の東堂山に対する信仰圏は、県外に及ぶ広範囲であったことを知るのだが、それだけに旧三月十六・十七日の祭礼が賑やかであったことは十分に、しのぶことが出来るものである。

飼馬農家では、春の祭り(旧暦三月十七日)を過ぎてから仔馬が生まれた場合には、適当な日にか、または旧六月十七日の祭りに、やはり餅を持って来てお供えをし、山から笹を見つけて来て観音堂脇の、おみたらしに浸して持ち帰っていたというから、春の祭礼の時と同じことが行われていたのである。

また、飼馬農家と東堂山との間に質入れといわれる特別な結びつきも行われていた。質入れとは雌馬が受胎をし子種が得られる様にとの祈願行為である。昭和の前期あたりで百円(百円という金額では少ないの、万倍とし百万円という)を東堂山から受胎を条件に借りるのだが、質草に馬が入っているというので一生懸命に祈願をする。やがて受胎をしたとなると借りた金額を倍にして(百万円)返済をする。そして質草としての母馬を取り戻したということになる。

これらの飼馬農家の祈願行為が祭礼以外にも行われていたことによって、飼馬農家と東堂山の結びつきは一層深められていったのである。



番号	氏名	焼判	祭礼時の宿	現在当主名	番号	氏名	焼判	祭礼時の宿	現在当主名
1	郡司喜右工門	△	庄屋	郡司大助 日影の湯	11	小林クマ	△		吉田実
2	郡司熊吉	△	糸師・煙草商人	郡司勝保	12	松本常三	△		松本寛視
3	郡司惣助	△	宿屋	郡司房之助	13	郡司鶴吉	△	宿屋	郡司利一
4	郡司久作	△	宿屋	郡司哲夫	14	郡司寅三	△	宿屋	郡司正平
5	郡司長太	△	香具宿	郡司良平	15	郡司常吉	△	(郡司喜右工門分家)	現在なし
6	郡司丑之助	△		郡司丑之助	16	国分虎之助	△		国分忠直
7	郡司準之助	△		郡司良貞					
8	郡司善吉	△		郡司良朝	①	鈴聲稻荷神社			
9	郡司峯治	△	香具宿	郡司良一	②	聖徳太子堂			
10	国分弥一	△	水車をやっていた	国分源一	③	稻荷神社			

宿のまわり順 六軒  
 14 郡司寅三 ~ 4 郡司久作 ~ 3 郡司惣助 ~ 13 郡司鶴吉 ~ 5 郡司長太 ~ 9 郡司峯治  
 絵馬を扱った家 四軒  
 1. 郡司喜右工門 3. 郡司惣助 6. 郡司丑之助 13. 郡司鶴吉

大名内集落内の家屋配置図

四 東堂山と小戸神

東堂山の祭礼が始まる三日程前から、大字小戸神の人々は一斉に忙しくなる。参道の整備に村人足として一戸一名が出てオオミチツクリを行う。セリで茶屋の権利を取った人は小屋掛けを始める。えんま(絵馬)組合では夜わりで絵馬摺りを行う。字大名内の、宿となる家では、釜を集め食器洗いに大わらわだ、そして参道登り口には祭礼を告げる大きな幟旗が立てられる。これらの有様は、大正期頃の祭礼を控えた小戸神の姿である。



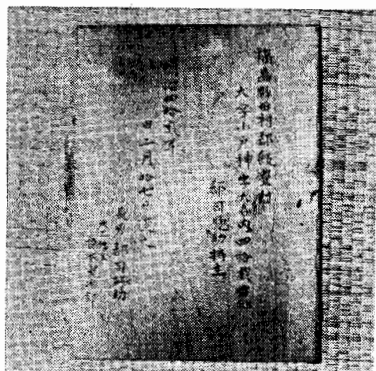
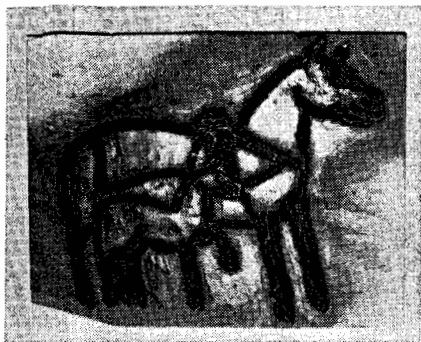
摺絵馬

大字としての祭典諸係を決める。田村家文書や区有文書のなかに、江戸中頃から昭和期までの『東堂山祭礼役割帳』なるものがある。

この中の大正期の役割帳には、旧三月十六日と十七日の堂番役・内札所係・外札所係・勝手取締役・御祈禱係・警官応接係・祭典世話人・消防手など三十二名と、区長と五名の組頭の名が書き連ねてある。

大正期における大字小戸神の戸数は七十戸程であるから、大字の半数以上の家が祭典係の役割に付き、さらに字大名内全戸(戸六)が宿やら茶屋などで関わりを持っていたのだから、東堂山の祭礼は正に大字小戸神を挙げての祭典行事であったといえる。

字大名内の集落では、四軒程が一般講中のための宿で、二軒程が香具師達のための宿となっていた。どの宿も二十人から三十人位を泊めていたそうだが、そのための手伝いに近在の女の人達が来勢来ていて賑やかなものであったとい



絵馬版木(上)と作者銘(下)

旧二月五日の「ごませんどう」で決まる  
運上金は大字に納められるが、これは大字  
の維持費に当てられていた。  
大字小戸神としては、このことから東堂  
山の祭典に際しては、無条件で奉仕をする  
ことになっていた様だが、現在はこれら運  
上金からの収入は全くなくなってしまった  
ことから、寺・行政区・檀家の三者が協議  
をし、祭典の執行委員長名で各係を委嘱し

祭り日には七軒の茶屋が立った。区有文書の中に、大正八年の『東堂山諸運上金取立帳』がある。この運上金として「壹番・番屋ノ下・一金参円五拾銭・一名、貳番・寺道ノ下・一金四円八拾銭・一名、三番・香具茶屋ノ下・一金五円五拾銭・一名、四番・仁王門ノ東・一金六円五拾銭・一名、五番・仁王門ノ西・一金五円参拾銭・一名、六番・竹藪・一金壹円六拾銭・一名、七番・大門・一金壹円・一名」とあり、他に天見世・旗杭・一金参円貳拾銭・大見世・鐘楼堂ノ下・一金壹円八拾銭とも書かれている。

運上金とは、旧二月五日に大字で行うセリで決まった権利金のことであり、茶屋は場所の良い所程高くせられていった。また、笹を売る二軒の権利と、えんま(繪馬)組合と呼ぶ四軒の絵馬摺りの権利もここでせられる。この日のセリのことを、どの様な訳なのか土地の人は「ごませんどう」と呼んでいる。

祭典期間中の警備は主として消防が当たるが人も多いことであり大変であった。また、露店や大道芸が店を出すので、この区割り(店か)は大字の役員達によって祭典前日に行われた。しかし、なかには潜りで、一杯五銭でただの水を売る様な悪徳の者も入って来るので、役員は神経を使ったものだという。

えんま(繪馬)は、これを馬小屋の前に張ると馬の守護となるとか、神棚に供え仔馬の無事成長を祈るものであるとかいわれているもので、昭和十三年頃が最も売れたという。昔は一枚一枚を直接書いたものであったが、今は木版で馬の形を摺っている。現存する木版中最も古い物は、明治十五年に彫られたものであるが、大方は明治四十二年に彫られた木版である。虎次郎と名の書かれた版を一枚だけ見るが他は記名はない。

絵馬は東堂山の祭礼の始まる三日位前から、絵馬組合の一軒(現在は郡司(房之助氏宅))に夜食後集まって始める。作業は先ず断ち板(板)の上で画用紙程の厚さの紙を断ち揃える、絵馬には大えんま(三七×二八センチ)と小えんま(一六×一三センチ)と呼ぶ版があるのだが、これを前年までの売り上げを勘案して今年摺る枚数分を揃えるのである。

木版に墨(今は普通)を塗り、その上に紙を載せタンポで叩く、乾いたら鹿毛・栗毛・黒毛・柄栗毛などと色で染め分ける。この時の絵の具には膠を使うので、乾燥させるためには家中一杯に広げなければならぬ。

絵馬の種類としては、大絵馬(大えんま)・小絵馬(小えんま)それぞれに一匹もの・仔付・毛替と三種類があり、また一匹もの、仔付には鹿毛・黒毛・栗毛・白毛・黒鹿毛・柄栗毛があり、毛替ともなるとそれらを組み合わせると二十種類が作られる。仔付とは親仔馬のことであるが、木版に彫られている足が親仔全部で六本となっていることがここでの特色だという。

馬産の全盛期には約一千枚位は摺ったというが、現在は三百枚から五百枚位である。昔は茶屋に卸していたが、現在では青年会に渡している、青年会ではこれを売って会の運営資金としている。また、現在は馬に代わって牛が飼われる時代となったためか、牛の絵馬が多く売られているという。かつて東堂山の祭りは馬匹守護の祭りであったが、今は交通安全を祈願しに来られる人も多いという。名物であった絵馬も時代の流れと共に変わって行くかも知れない。

笹も現在では小戸神の青年会で売っているが、昔は茶屋で売られていたものである。この笹は権利を得た茶屋の者が、日影山にあるふくろ笹を刈ってくるものであった。十一本ずつに束ねて売るのが昔からの習わしであった。これを観音堂脇の、おみたらしに浸して、牛馬に食べさせると病気になるかといわれている。現在は青年会が宵の内に刈り取り、一

把二百五拾円位で売っている。



ているという。

しかし、これは永年の伝統でもあることから、日当手当は出さない、奉仕として続けられているものである。

東堂山満福寺は、古くは小野六郷(谷津作・羽出庭・達谷・田原谷・広瀬・飯島)の総鎮守として、また近世期においても代々の領主が祈願所に準じて厚く尊崇して来た寺であり、いわゆる檀家を持つ檀那寺ではなかったが、現在では大字小戸神のほとんどと、大字飯豊の一部とで百戸程の檀家があり、現在ではこの檀家の奉仕による部分も大きくみられているのである。

さらに、田村家文書のなかには、近世期に執行された寺堂修理の落慶式や入仏式には、小野六郷の村々から重立かさだった人が役割についた記録も見られ、古くから満福寺と小野六郷とは深い関わりがあったことを知ることが出来る。

この様ななかで東堂山満福寺への信仰を顧みたとき、大字小戸神の檀家・小野六郷・東堂講中と次第に広がる信仰圏があることを見る事が出来るのである。

(木暮幸雄)

### 第三節 俗 信

俗信というのは、いわゆる宗教とも迷信ともいえないような、俗に信じられる事柄である。昔から私たちに伝えられてきた俗信は、大部分はその発生や理由を知ることができないものが多い。

今では単に迷信といわれてしまい、信じることをやめてしまったものも数多い。

しかし、占うらないや呪まじないは、完全に信じることをやめてしまったとはいえず、病氣や、災難などを、できるだけ除けたいという私達の心は、今も変わりなく、現代科学では説明できない何か超人的な力を信じ、希望を持ちたいと常に考えている。

それを解決するためには、長い間の経験や自然現象などから発生し、古くからその地に伝えられてきた言葉を信じることが、手取り早い。それを信じることによって心が安定し、また心のよりどころとなっているのである。

俗信の発生は、古代の信仰や呪術じゆじゆつが発達して、宗教として成立し得なかったものや、宗教から離れてしまったもの、また古代呪術がそのまま伝わったものなどから発生したといわれている。したがって宗教にも民間信仰にも深く関係し、そのどちらの要素も含んでいる。そして宗教的な要素がほとんどないものも含まれ、食べ物・保健・教育・自然現象などもあり、生活のすべてにわたっている。

俗信を分類すると、予兆よちょう・卜占ぼくせん・禁忌きんぎ・呪術などに分けられている。

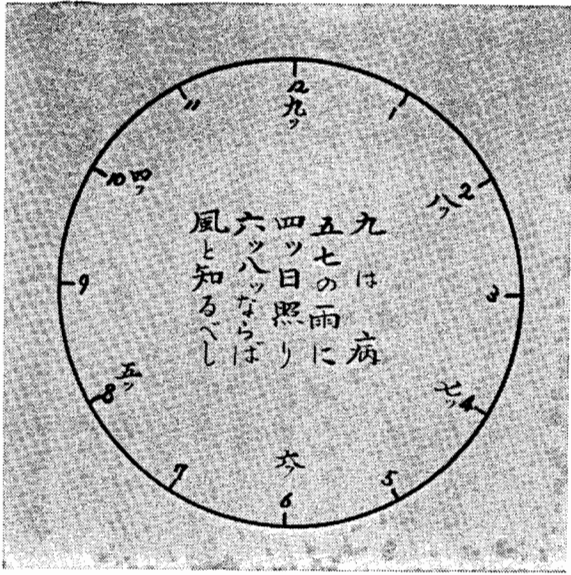
予兆よちょうというのは、「蛇の夢を見ると金が入る」、「朝靴の紐が切れるとその日良くないことがおこる」などと、何かの前ぶれ、つまり前兆にあたるできごとである。大抵の場合これは科学的な根拠がなく、単に偶然の出来事によるものが多い。しかしこれらの現象は、永い間の経験の積み重ねによって発生したのもと考えられ、あるいは信仰心によるところから生じたものとも考えられている。

卜占とは、いわゆるうらないで、自然の現象や、あるいは人為的な現象によって、今後の運勢や吉凶や作物のできぐあいなどを前もって知ろうとすることである。

卜占の方法として、中国では亀卜きぼくといひ、亀甲きっこうを焼いてできたひびによって吉凶を占ったという。古代日本において鹿の骨を焼いて占ったという記録があるが、亀卜の方法が伝わったと考えられている。

卜占には農作・狩猟・漁撈ぎょらうの豊凶や天候・災害・妊娠など偶然を神のお告げとして占ったり、神事として神社で行われる相撲・的射・競馬・綱引きなどの勝ち負けによって豊凶を占うこと、または籤引くじひき・占師の判断にゆだねることも占いの一種である。

禁忌とは、禁じられる事柄で、何かを行ってはいけないという禁止の意味である。そしてそれは忌みとして嫌われ、期



地震予兆おぼえ

間のある禁忌は、その間は別火をし神から遠ざかり区別され、慎んで生活をしなければならぬ。農作物に関する禁忌も多い。特に植えてはならない作物があって、それをその土地、その家によって代々伝えられている。その地の土壤に適さないという経験によって生じたものが基本にあると考えられるが、伝えられる理由は先祖や守護神が、その作物によって怪我をしたため作ってはならないという伝承が多い。

一 予兆

(一) 自然現象による予兆

- 「九は病、五七の雨に四ツ日照り、六ツハッなれば風と知るべし」(十二時〜二時病・八時〜十時と四時〜六時雨・十時〜十二時日照り・六時〜八時と二時〜四時風)
- 六ツハッ風に九は病、五七の雨に四ツ日照り。(和名田・小野・湯沢・南田原井)
- 地震があると二〜三日後の天気が変わる。(飯豊中)
- 井戸水が濁ると地震が近く来る。(飯豊中)
- 地震がくると変事の前ぶれ。(小野山)
- 朝焼けの日は雨が降る、夕焼けは明日晴れる、夕焼けが黄色の時は明日風が強い。(吉野辺・横町・和名田・飯豊中・湯沢・小野山・小)
- 朝霧がかかると晴れる。(雁股田)
- 朝虹は雨、夕虹は明日晴れる。(上羽出庭・南田・原井・飯豊下)
- 流れ星は凶事がある。(吉野辺)
- 流れ星が多いと戦争がある。(湯沢・皮籠石)
- 流れ星を見ると悪い事が起こる。(小野・赤沼)
- 流れ星を見た時願い事をするとかなえられる。(仲町・宇館)
- 正月六日に雷がなるとその年は豊作。(湯沢)
- 初雷に節分の豆を食べると落雷にあわなない。(上羽出庭・小野・赤沼・吉野辺)
- 朝の雷はたいした事なくおさまる。(上庭)
- 稲の出穂期に雷の鳴る年は豊作。(飯豊中)
- 強い雷の時、仏壇に線香を上げると落雷なし。(上羽出庭・吉野辺)
- 朝は晴天で日が上がる時刻頃、帯のように霧が上ると雷が発生する。(湯沢)
- 月が笠をかぶったら雨、太陽が笠をかぶると天気が続く。

- (横町・湯沢・小野赤沼・皮籠石・夏井)
- 日食や月食のある年は冷害になる。(湯沢)
- 月のすぐそばに星が見えるとその方向に変事が起きる。(和名田・飯豊下)
- 春の彼岸まで日影山に犬の寝床程雪がある年は凶作になる。(皮籠石)

(二) 動植物に関する予兆

- 鍋すみ焼けると風が吹く。(上羽)
- 禪がしめっぽいと雨が近い。(上庭)
- 卯辰の雨が巳にかかる、午のつら程降りかかる。(横町)
- 火柱がたおれた方向に火事が起きる。(吉野辺)
- 雪の多い年は豊作。(南田)
- 人参・牛蒡が豊作だと近所に不幸がある。(上庭)
- ジャガイモが大きい時米は不作。(上庭)
- 正月十四日枯れたヨモギの葉に米の汁をかけて白く付着すれば豊作。(小野)
- 栗の渋が厚い時は大雨になる(大雪)。(小野山・小野・野赤沼・夏井)
- ヤマガ・コブシの花が多く咲くと大水が出る。(皮籠石・小野山)
- アセミ(馬酔木)の花が多いと豊作。(吉野辺)
- 白い花のよく咲く年は大水が出る。(平館)
- 菜・大根を蒔く時ヨモギをさすと芽がよく出て虫がつかない。(南田)
- 南瓜元なりしない年は不作。(飯豊中)
- こうぼううしの花が多く咲くと豊作。(吉野辺)
- 竹の花が咲くと竹が枯れ、また凶作になる。(小野)
- 朝鳩鳴けば雨が降る、夕鳩鳴けば明日は天気。(飯豊中・南田・赤沼)

田・雁股田・皮籠石・平館・小野山神

○朝鳩鳴けば川越すな、夕鳩鳴けば空見るな(天氣が良い)。

(小戸神・湯沢・南田原井・飯豊上・小野赤沼・夏井)

○朝鳩鳴けば舟こぐな、夕鳩鳴けばのり付ほせ(天氣)。(大倉)

○雉が鳴けば地震が起る。(上羽出庭・小戸神・横町・雁股田・小野赤沼)

○鶏が夜中に時を上げると火事が起る。(吉野辺・湯沢・小野山神)

○鶏の鳴きまねをすると火事になる。(飯豊下)

○夕方鶏が鳴くと身上が上がる。(飯豊上)

○よいのうち鶏が時を上げると凶、反対によい時といって吉。(飯豊下)

(飯豊下)

○鳥鳴きが悪いと不幸が起る。(夏井・高瀬谷・湯沢・皮籠石・南田原井・雁股田・横町・和名田)

○夜鳥が鳴く時は屋根に水をかける。(平館・和名田・小戸神・小野山神)

○夜フクロウが鳴けば次の日晴れる。(高瀬谷・上羽出庭)

○鷹が飛び回ると時は風が出る。(平館)

○燕が低く飛ぶ時は雨が近い。(飯豊中・夏井)

○スズメが騒ぐと明日は雨。(小野山神)

(小野山神)

○猫が耳をかきこせば晴天が続く。(吉野辺)

○猫が顔をなで洗うしぐさをする時は晴れる。(谷津作)

○猫が耳の上から顔を洗うしぐさをする時は晴れる。(作津)

○猫が耳の上から顔を洗ったら晴れる。(横町・飯豊下・上羽出庭)

○猫が耳までかくと天氣が悪い。(皮籠石)

○猫が顔を洗う時後頭部より耳にかけて三回行くと天氣がよくなる。(和名田)

○猫が顔を洗う時顔の部分だけ行くと天氣が悪くなる。(和名田)

○猫がせわしく家の中を歩き回ると時は死者が出る。(平館)

○犬の遠吠の時は変事が起る。(高瀬谷・湯沢・小野赤沼)

○犬の遠吠は泥棒がくる。(小野山神)

○イタチが前をよぎったら悪い事が起る三步もどって出なせ。(吉野辺)

(吉野辺)

(吉野辺)

(吉野辺)

○蜂が高い所に巣をつくる年は雨が多い(洪水)。(谷津作・飯豊下・小野赤沼)

○蜂が高い所に巣をつくる年は暴風がない。(出庭)

○蜂が高い所に巣をつくる年は豊年である。(吉野辺)

○蜂が低い所に巣をつくる年は日照りになる。

○蜂が低い所に巣をつくる年は風がふく(嵐)。(皮籠石・吉野)

○蜂が低い所に巣をつくる年は風がふく(嵐)。(皮籠石・吉野)

○蜘蛛が下がると金が入るといって懐に入れる。(吉野辺)

○朝蜘蛛が下がると金が入るといって懐に入れる。(吉野辺)

○夜蜘蛛が下がると夜蜘蛛良く来たと言つて、つぶしてしまふ、泥棒に入られるから。(飯豊上)

○ミミズが土中深くもぐる時は日照りになる。(飯豊中)

○ミミズが土中深くもぐる時は日照りになる。(飯豊中)

○蟻が巣の出入口を土で塞ぐと大雨が降る。(谷津作)

(谷津作)

○蟻が土中に冬眠すればその年の冬は寒さが厳しい。(谷津)

○ネズミが騒ぐときは火の用心。(飯豊中)

○ネズミがはいでてくと近所に火事がある。(湯沢)

○池の鯉が跳ね上がる時は雨になる。(平館)

○春の彼岸の中日に日影山に猫のひたい程の雪がある年は凶作。(小野山神)

(小野山神)

○蛇が前をよぎったら三步もどれ、もどらないと三年生きない。(吉野辺)

(吉野辺)

○日影山に雲がかかると雨になる。(小野山神)

(小野山神)

(三) 人間に関する予兆

○墓で転ぶと死ぬ(長生きしない)。(高瀬谷・吉野辺・小野赤沼・大倉湯)

○墓参りに近道するな。(上羽出庭)

○葬式の日に墓に二度行くな、三度目は自分が行く。(雁股田)

○墓で転び足がつけば足、手がつけば手を切り落とせといふ。(夏井)

○一杯茶で坊様に付き合くと死ぬ(道で合う)。(飯豊中・吉野辺・湯沢)

○ミケン(眉間)にホクロがある人はお釈迦様のような。(湯沢)

○ミケン(眉間)にホクロがある人は地蔵様の生まれ変わり。(平館)

○ミケン(眉間)にホクロがある人は金持ち(偉い人)になり。(平館)

○歯の数の多い者と口争いするな。(出庭)

○生まれつき赤毛の子供は利口(赤毛に馬鹿なし)。(出庭)

○歯の数の多い者と口争いするな。(上羽出庭)

○生まれつき赤毛の子供は利口(赤毛に馬鹿なし)。(出庭)

○ミケン(眉間)にホクロがある人は相手(夫婦)を食う。(赤沼)

○顔にホクロがある人は歌が上手。(湯沢)

○顔にホクロがある人は歌が上手。(湯沢)

○目の下にホクロのある人は人情深く出世する。(小戸神)

○左耳の小耳の側にホクロがある人は親孝行。(小戸神)

○目の上にホクロがある人は親より出世する。(吉野辺)

○目の下にホクロがある人は泣きボクロといい不幸である。(吉野辺)

○首の所にホクロがある人は襟ボクロといい良い着物が着れる。(吉野辺)

○首の所にホクロがある人は襟ボクロといい良い着物が着れる。(吉野辺)

○ホクロが手の甲にある人は金銭に不自由しない。(夏井)

○前の乳児のボンノクボにホクロがあると次は男児、乱れていれば女児が生まれる。(小野山神)

○頭にツムジが二つあると気性が荒い(短気)。(吉野辺・高瀬谷・南田原井・湯沢・小戸神・和名田)

○病人が手鏡、合わせ鏡をすると死が近い。(小戸神・湯沢・雁股田・谷津作・上羽出庭・小野山神)

○病人が手鏡、合わせ鏡をすると死が近い。(小戸神・湯沢・雁股田・谷津作・上羽出庭・小野山神)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○死に近い病人は一時病気が良くなったようにみられるが、これを仲直りといっている。(湯沢)

○すね毛の多い若者はなまけもの。(上羽出庭)  
 ○寒に生水飲むと夏まけしない。(飯豊中)  
 ○親父が味噌桶に手を入れると味噌腐る。(飯豊中)

○ミカンを焼いて食べると気が狂う。(横町)

○髪の毛を燃やすと気が狂う。(横町)

○グミの木から落ちると三年生きない。(平館)

○夕方子供が騒ぐと天気が変わる。(横町)

○赤飯にお汁(おつけ)をかけて食べるとその人の御祝儀。

○葬式に雨がふる。(谷津作・夏井・小戸神・高瀬谷・小野赤沼・大倉・南田原井・上羽出庭・飯豊下・湯沢・飯豊中)

○洗濯物を取り込み忘れると赤ん坊が夜泣きする。(谷津作)

○カンプラ(ジャガイモ)の芽を食うと死ぬ。(飯豊中)

○川に小便をすると腹痛の子が出来る。(飯豊中)

#### (四) 偶然の出来ごとによる予兆

○葬式の行列にあうと良いことがある。(雁股田)

○朝一番先にお坊さんにあうと縁起が良い。(飯豊上)

○茶柱が立つと良いことがある。(小野山神・小戸神・雁股田・田・上羽出庭・高瀬谷)

○茶柱が立った時、茶柱に願をかけて飲むと良い事がある。

(仲町)

○茶柱が立った時その日吉報がある、他人に言わず飲みな

さい。(湯沢)

○歩いて火柱をみると火事が起こる。(平館)

○婚礼に火事があると悪い。(平館)

○婚礼に雨が降ると夫婦間に涙をみせる事が起きる。(仲町)

○婚礼に雨が降ると縁起が良い。(皮籠石・横町・小野山神)

○婚礼に雨が降ると二人の日頃の行いが悪い。(小戸神)

○婚礼に雨が降ると良くおさまる。(雁股田)

○下駄や草履の緒が切れると出先で悪い事がある。

○朝、女の客があるとその日は客が多いという。(平館)

○セトモノがこわれると客が多くなると商店などでは喜ぶ。

(平館)

○朝茶の間に蜘蛛が出てくると客がくる。(平館)

○わらじが切れても縄(名)は残して縁は切れない。(小野山神)

#### (五) 夢による予兆

○蛇の夢をみると金が入る(縁起良い)。(横町・平館・皮籠石・高瀬谷・大倉・谷津作・夏井・吉野山神・小野赤沼・飯豊上・下)

○マムシの夢をみると金が入る。(和名田)

○火事の夢をみると水難に注意(大水)。(和名田・上羽出庭・夏井)

○火事の夢をみると良い事がある(縁起が良い)。(雁股田・高瀬谷・小戸神・平館・吉野山神・小野赤沼・湯沢・小野山神)

○田植の夢をみると不幸ができる(凶)。(南田原井・湯沢・仲町・夏井・小野赤沼・吉野山神・小野山神)

○葬式の行列が家に入る夢をみると宝が入る。(平館)  
 ○馬の夢を見たら火に気をつける。(飯豊上)  
 ○こけらのない魚の夢は悪い。(平館)  
 ○大魚を釣った夢は近親に不幸がある。(上羽出庭)  
 ○辰巳枕して蛇の夢をみると大金が入る。(飯豊中)  
 ○東枕して猿の夢をみると財布なくす。(飯豊中)  
 ○正月二日初夢に一富士・二鷹・三なすびの中の夢をみるとその年は良い。(湯沢)  
 ○一富士・二鷹・三なすびと言ってその夢をみると良い事がある。(吉野山神・南田原井)

野山神・和名田・上羽出庭・谷津作・大倉・小戸神・皮籠石・高瀬谷・雁股田)

○歯の欠けた夢をみると親に別れる。(和名田・上羽出庭・仲町)

○歯の欠けた夢をみたら、下駄の歯をけずり川に流す。

(平館・小野山神)

○歯の欠けた夢は凶。(小野赤沼)

○雨にぬれた夢をみると悲しい事ができる。(仲町)

○人の集まる夢をみると悪い事がおこる。(小野赤沼・高瀬谷・雁股田・田・上羽出庭・南田原井)

○大水の夢をみると悪い事がおこる(火)。(小野赤沼・上羽出庭)

○刀でぎられる夢をみると良い事がおこる。(小野赤沼)

○葬式の夢をみると良い事がおこる。(吉野山神・高瀬谷)

## 一一 禁忌

禁忌というのは、日常やっではいけないとされる行為で、行った結果を先に予測し、悪い事を未然に防止しようとする禁止事項である。また、信仰的な意味、つまり神への穢れを近づけないようにすることや、また禁忌作物として栽培してはならない作物など、その土地によって異なり、その理由も村々でさまざまに伝えられている。

### (一) 妊娠・出産にしないこと

○葬式に妊婦は鏡を抱いて送れ(お腹の子にアザができる)。

(雁股田・小戸神・高瀬谷・和名田・吉野山神・夏井・小野山神)

○妊娠中に死者を見る(白いアザのある子が生まれる)。(平館)

○妊娠中に火事を見るとアザのある子が生まれる。(谷津作・夏井)

○妊娠中に火事を見ると赤アザのある子が生まれる。(平館)

○妊婦の夫は葬式に六尺をする(穴掘)。死産またはかわの子が生まれる。(南田原井・上羽出庭)

- 妊婦は葬式の釜前するな。(上庭)
- 妊婦は兎の肉を食べるな(三ツ口の子が生まれる)。(平館・和野辺・南田)
- 妊娠中に唐辛子を食べるな(頭髪の薄い子が生まれる)。(南田)
- 妊婦が七日間同じ鍋の飯を食って山仕事をするとけがをする。(吉野辺)
- 炭焼窯をやっている者は出産した家には七夜過ぎまでたちよるな、たちよると必ず窯が眠る。(上庭)
- 産婦七日過ぎない家で同じ火を使って食うと、(湯・煮物など)鉄砲打ちは当たらないし、ケガをするから産婦の居る家では茶も飲まなかった。(吉野辺)

(一) 土地や物の禁忌

- 三ツ又の木を切る時は拜んで切る(山の神の腰掛け木)。(大倉・湯沢)
- 三本枝の木を切るな(特に松の木)山の神の登り木。(吉野辺)
- 雨降り田という所がある、そこで農作業やると天気が良い日でも雨が降る。  
それは昔庄屋の田を村人が手伝いに行き、その人達の中に赤子を背負って作業をしていたが、首をふって死んだ。そこを首ふり田といい、そこで農作業をすると必ず雨が降る。(湯沢)
- 雨降り石には雨乞いのほかは絶対に登ってはならない、ふだん登り遊ぶ(子供)と雨乞い時に雨降らず、長雨。

(吉野辺)

- 赤飯に茶をかけて食べると必ず不幸が生じる。(仲町)
- 赤飯に茶をかけて食べると、その子の婚礼に必ず雨が降る。(仲町)
- 大衆家の氏子は熊野様の氏子なので、四ツ足の肉は食べてはならない。但し外では食べても良い。鶏と兎は良い。(大倉)

- 片袖を付けて地震がなると地震の時外に出られなくなる(凶)。(藪谷・平館)
- (和名田・湯沢)
- シミズに小便かけるな(チンポコはれる)。(横町)
- 一つの着物は二人以上の人で縫いあげてはいけない(仏物は数人で仕上げる)。(和名田)

- 片袖かぶるな(葬式を出す時片袖をかぶって送った)。(吉野辺)
- 外出前に針を使ってはならない(悪い事がおきる)。(原井)
- 着物を着る時二人で着せてはならない。(皮籠石)
- 着物を着る時左合わせに着てはならない(死人)。(飯豊上・夏井)
- 帯の結びは、たて結びにするな。(夏井)
- 着物の袖を片袖付け放しにしておく事は悪い事。(小戸神)
- 北枕に寝るな。(飯豊上)
- 鎌についた土は鎌で落とすな。(飯豊上)
- 朝茶は一杯ではいけない(仏様)。(飯豊上)

大水のタタリがある。(和名田)

- 山てらの木(白樺の木に似た肌であ)は伐ってはならない。伐ると凶作になる、但しこの木は多くみられない。(和名田)
- 山の神様の木を伐ると不幸ができる。(南田)
- 雨乞い石に登ると雨が降る。(原井)
- 神様にある木(神社の境内)を便所に使うな、檜を柱に使うな火柱になる。(皮籠石)
- 二又の木を切るとケガをする。(小戸神)
- 三ツ又の木は山の神の神木といってきらない。(夏井)
- 藪蒲谷字仲田の水田の中央に石があり、つつじと桜の木があり、この田に入れば必ず雨が降る、これは八幡様の腰掛け石。(藪蒲谷)
- 太子講様に作るダンゴ粥で火傷をした家では二度と作ってはいけない。もし作ると自在釣より蛇が下がると言われた。(和名田)

(二) 忌まれる行為

- 夜爪を切るな(世をつめる)。(南田原井・吉野辺・小野山神・飯豊下・横町)
- 食事の後直ぐ寝ると牛になる。(横町)
- ほうきで人をたたくな(三年生きない)。(吉野辺)
- 櫛を拾うな(苦を拾う)。(吉野辺)
- 朝食の鍋のつる越しに飯や汁をわけるとケガをする。

- 朝飯に汁をかけて食うと山でふんざき(踏裂)する。(飯豊上)
- 新しい履き物は午後おろしてはいけない葬式の時午後おろす。(平館・飯豊上)
- 外に用たしに行くとき中戸(縁側)からでるな(葬式の時)。(飯豊上)
- 水に熱湯を入れて湯加減するな。(夏井)
- 玄関の敷居を踏むな。(夏井)
- ご飯をこぼすと眼がつぶれる。(谷津作)
- 午後からゲタ・クツ・ゾウリなど新しいはき物をおろすな。||おろす時は酒になれ、モチになれと三回唱えてカマドのすすをつけておろす。(平館)
- 田の畦に小豆を植えるな(葬式の赤飯になる)。(吉野辺)
- はしごをさかさにするな。||葬式が出た時神棚を紙でかくすのに、はしごをさかさにした。(吉野辺)
- 馬屋に鍋のふたを持っていくな。||火事の時馬が出ないので鍋のふたで目かくしし引き出すので普通嫌う。(吉野)
- 紙の帽子をかぶるな||葬式の時男は紙を切って鉢巻のような姿で野辺送りをした。(吉野辺)
- 鎌や鎌の柄を土にさすな。||新しい墓場に鎌柄と鎌をさしたので。(吉野辺)
- 箕をおぶせるな。||葬式の時仏が出た後箕をおぶせてはき出す。(吉野辺)

- 升をおぶせるな。|| 葬式の時棺の上に升をおぶせた様な形の箱が、昔立棺の時にあったので。(吉野辺)
- 吠を敷いて座るな。|| 葬式の棺の下に吠を敷くから。(吉野辺)
- 鉢などは使ったらその日の内に洗え。|| 葬式の穴掘りに使った鉢やスコップは洗わないで七日置くから。(吉野辺)
- 縄に藁と麻を混ぜるな。|| 葬式に棺を穴に下げる縄は藁と麻でもじめるから。(吉野辺)
- 茶わんに盛ったご飯に箸をたてるな。|| 仏様の飯と同じだから。(吉野辺)
- 横膳・左膳 木の目をたてにした膳は仏様に供える時で、飯が右、汁が左も仏様に供えるので普通はしない。(吉野辺)
- 一つの皿に塩と味噌はつけるな || 仏様に供えるから(吉野辺)
- かけや・つちんぼ、きねを造る時は二つ造れ。|| 葬式が一軒に一年に二度出来た時につちんぼを墓に入れるから。(吉野辺)
- 石で釘を打つな。|| 葬式の棺は石で釘を打つから。(吉野辺)
- 人の寝ている時に箒を上げるな。|| 死んだ人に、そうするから。(吉野辺)
- 屏風はさかさに立てるものではない。|| 死んだ人の所にはさかさに立てるから。(吉野辺)
- はしごは必ず二つ造るもんだ。(吉野辺)
- 正月初めの餅は戌の日にはつくものでない。(吉野辺)
- 臼はさかさまに置く物でない。臼にたられる。(吉野辺)
- 水と湯を混ぜるとき水に湯をさすな。|| 葬式の時死人を洗う時水に湯をさす。(吉野辺)
- 縄は帯にするな。|| 葬式の入棺の時、縄の帯をしめてするから。(吉野辺)
- 下駄や草り等はきものは夜おろすものでない。|| 葬式の入棺は夕方から行い、仏にわらじをはかせるから。(吉野辺)
- 家を建築する時さかさ柱を立てるな、立てるとその家は死に絶えてしまう。(吉野辺)
- 家を建築するとき木を元と元、うらとうらにつくものでない、住む人が不幸になる。(吉野辺)
- 檜の柱はつかうものでない。|| 火柱とよむから、当地方では昔は檜柱は立てない。(吉野辺)
- 焼け家の普請には棟木に水の木を使うとよい。|| 後は火災に会わない。草屋根の棟木に使われた。(吉野辺)
- 家に泥棒の木、馬屋に桜の木は使うものでない。|| 泥棒に入られるとか、馬が死んで桜肉になる(泥棒の木は用材にならぬが、草屋根のたきや草屋根のお。)(吉野辺)
- 家を建てる時神棚は北の方に向けるな。(吉野辺)
- 大神宮の下には仏壇を置くものでない(線香の煙が神棚にかかるから。)(吉野辺)

- はしごの、こは必ず五・七・九・十一段にする。(吉野辺)
- 四尺四寸の箱は造るもんでない。|| 昔棺が立棺で四尺四寸に一尺四寸だったから。(吉野辺)
- 正月の五日間はいろりに足を出すもんでない。|| 足を出すと苗代を鳥や蛙にあらされる。(吉野辺)
- 二月の初午の日には四ツ(十時)前は茶を出すな。|| 茶を出すすと養蚕が不作になる。(吉野辺)
- 十月十日山の神の日は大根畑に入るな。|| 大根の割れる音をきくと長い病気になる。(吉野辺)
- 二月十日の山の神の日山仕事や木を切ると山の神のたたりだけがする。(吉野辺)
- 鍋のふたは二枚合わせる物でない。合わさると親類や近所に葬式が出来る。(吉野辺)
- 祝い餅や普通の時の餅は四九コ(四九)の餅を丸めるな。|| 葬式の時四九の餅だから。(吉野辺)
- 五月節句に女は菖蒲湯に入らないと、山で蛇に女の物に入られる(男のものが蛇頭に似ているので蛇はか。)(吉野辺)
- 二月八日・十二月八日の朝食には小豆と豆腐をたべないで表に出るな。|| 坊主に会うと三年生きない(腐とか親買豆腐・子買豆腐などの贈りものの習わしがある。)(吉野辺)
- 普通だんごは平たくまるめるな。|| 仏だんごに六地藏だんごとって平たく六コ造る。(吉野辺)
- 家を建てる時には三疊と六疊の間を隣合わせにつくるな(六三に障りあり。)(吉野辺)
- 家の三矢柱(大黒柱)には釘を打つものでない。|| 主人にたたりがあり若死にする。(吉野辺)
- 家を建てる時一間に戸を三本たてるな。|| 立てると夫婦が別れるか片方が不幸になる(九尺間の場合、三尺戸が三本建たるが、二枚とす。)(吉野辺)
- ねる時は北まくらで寝るな。|| 仏様をねせる時北まくらにするから。(吉野辺)
- へら・しゃくしは買う時には魚を買うもんだ。|| 葬式の時には必ずへらやしゃくしを買うから。(吉野辺)
- 帯は祝事と普通の時には折めは下にする(葬式の時上。)(仏に折めるから)。(吉野辺)
- 祝の帳、祭典等の帳は折目は下にする。|| 上に向けると香典帳の様だから(祝V仏V。)(吉野辺)
- 祝の受帳はひもを表で結ぶ。|| 香典帳はひもを裏で結ぶ。(吉野辺)
- 結婚式の祝帳は二枚紙の合わせを使う。|| 夫婦仲が良くなる様に。(吉野辺)
- 祝の時は床に軸を二本かけるもんだ。|| 一本しか掛けないのは葬式の十三仏だけ。(吉野辺)
- 正月の買物をする時はなまぐさ(魚)と一緒に買え。||

買わないのは葬式だから。(吉野辺)

○盆市(七月十二日)に盆買しないと正月買が出来ないから必ず盆買はするもんだ。||正月近くに成って不幸が身内に起きるから。(吉野辺)

○正月の元日には銭を使うもんでない。||使うと一年間金に不自由する。(吉野辺)

○二〇才前に三回飯豊山に登ると一生米と金に不自由しない。(吉野辺)

○奥参り(山・湯殿山)を三回参ると一生金と米に不自由しないという。(吉野辺)

#### 四 農作物の栽培の禁忌

○キユウリを作つてならない家||谷津作字小治郎(白石家)・飯豊下(村上家)・小野赤沼(矢吹家)

○ニンニクを作つてならない家||谷津作字鬼石(先崎家)・飯豊下(吉田家)

○諏訪神社の氏はゴマを作つてならない。(湯沢・夏井)

○キユウリを作つて死んだ部落があつて今でも作らず買つて食べている所がある。(小戸神)

○大麦蒔きに蒔き忘れると親に別れる、小麦蒔き忘れると

子供に別れる。(皮籠石)

○渡辺の姓のつく家では大豆を作つてはならない。(仲町)

○八幡様の氏はゴマを作つてはならない、先崎氏はニンニクを作つてはならない。(大倉)

○一族でキユウリを作らない人がある。(湯沢)

○キユウリを作らない長久保一族に一部ある。(湯沢)

○己丑の日は田植えするな。(湯沢)

○ニンニクを作つてはいけない、屋敷には金神様をまつてあるから、金神様が嫌うので、但し悪病などはよせつけない。(菰浦全)

○ニンニクを作ると不動明王のたたりがある、滝不動の氏子郡司家三軒はニンニクを作らない。(吉野辺)

○ゴマを作ると神様のたたりがある。(吉野辺)  
吉野辺の三渡神社は、祭神が天村雲の命で大蛇を使つており、この大蛇がゴマの木で目をつき片目を潰したので氏はその後村内のあらゆる土地にゴマを植える事を禁じ、ゴマが芽を出せば不幸が出来るといわれている。

### 三 まじない

#### (一) 呪文

○早起きしたい時 「ねるぞネタ、たのむぞタルキ、はりまくら、何事あらばおこせムナ木も」といって、まくらを三回たいて起きる時間を言う。(平館)

○ノン目(はやり目)の時 「おっとノン目落とした」と言つて小豆を三コ井戸の中へ落とすと良くなる。(吉野辺)

○打ち身やケガの時 「イデーゴイデーゴ、ムゲーヤマニトンデケー、イデーゴイデーゴちゃんトトンデケー」(吉野辺)

○早起きしたい時 「寝るぞ根太・頼むぞたる木・桁柱

○〇〇時になったら起こせ屋の棟」と三回唱える。(横町)

○身辺に何事も起こらぬように 「カラス鳴く・良く鳴く・苦鳴く・またぞ鳴く・鳴くたびごとに、喜びぞ増す」三回唱える。(横町)

○子供の頃歯の抜けた時 「俺の歯先にはえろ、鬼の歯後にはえろ(小野赤沼・夏)と言つて上歯は床下に、下歯は屋根に投げる。

○ノン目の時 朝早く小豆で目をこすつて「ノン目ポポ

ほろた」と言つて川に流し後を振り向かないで帰つて来る。(菰浦全)

○目に土が入った時 ツバを三回して「ミミツクク」と目を開けていうと不思議に無くなる。(小戸神)

○蟻よけ 「蟻一匹十六文」と書いて蟻が上がる所にさかさに張る。(平館)

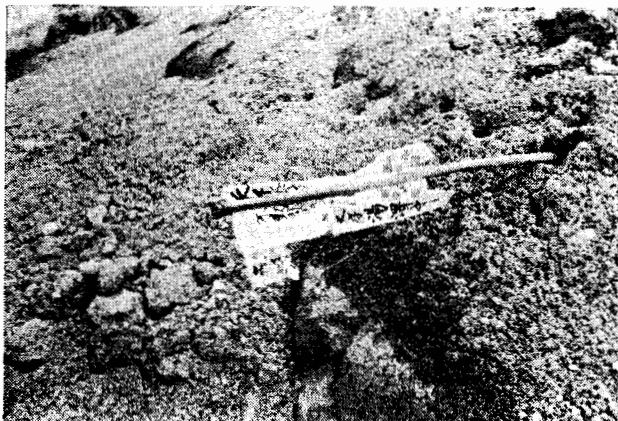
○手や足にまめができた時 親指でまめをおさえ、まじないを聞いた人の名前を三回呼んで息を三回吹きかける。(平館)

○飼ひ猫がいなくなった時 「立ち別れいなばの山の嶺に生ふる待つとし聞かばいま帰りこむ」と百人一首の句を書き猫くぐりにさかさにはつておけば猫が帰ってくる。(谷津作)

○子供のかげのまじない 手の平に馬(鬼)という字を三つ書き、握らせる。字を書く時 「アピランケンオワカ」と唱える。(佐美ミキ)

#### (二) 代用・医療に関するもの

○目のホシのまじない 朝日の出ないうちにワラミゴを



境の不動様立て  
(湯沢字保代内と夏井家川除の境)

- 流行病が隣村にはやると村境に門松をたてしめ縄を張った。(吉野辺)
- 村境に正月様として松にしめ縄を張って流行病を防いだ。(葛瀬谷)

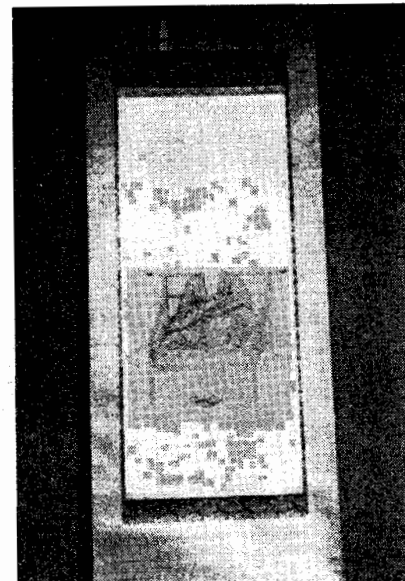
### (三) 流行病など

- 目の所で数回むすび塩で清め、いろりにくべると二・三日中になおる。(大倉)
- ノドに魚の小骨がつかえた時 仏壇の水を飲み(茶)ご飯を食べると取れる。(上羽出庭)
- ヤケドの時 台所の土をつける。(雁股田)
- かげ虫の強い子供は日の出直前に茶で手を洗うとかげ虫が指先から出る。(湯沢)
- 目にゴミがはいったら反対のほほの内側を舌で三回なめ口から三回つばを出すとゴミが出てくる。(湯沢)
- 長い旅の時に乗り物酔い(はきめい)しないように南天の葉をへそのあたりにはさめて行く。(湯沢)
- 家出した人があまり遠くへ行かぬように、その人の履物に五寸釘を打つ。(湯沢)
- 正月十四日に作ったカユを十八日に食べると蚊にさされない。(小野赤沼)
- 足がしびれた時額に三回ツバをつけると良い。(小野赤沼)
- 釘を踏んだ時釘をぬいて金槌で踏んだところをたたくと化膿しない。(南田原井)
- 中耳炎等で耳が痛む時新しい馬糞の絞り汁を耳に入れると痛みを除去する。(夏井)
- 歯が痛む時、梅干を潰して張る。(小戸神)
- ノン目が出きた時、つげの櫛のみねで目元をこすると直

- 流行病の予防にニンニクとスルメをお守り袋に入れ持っていた。(葛瀬谷)
- 流行病のときニンニクとスルメを門口に吊した。(小戸神)
- ニンニクと杉葉をゆわいて玄関に吊した呪文は「ニンニクサイカイカサンショウ」。(平館)
- トウガラシと杉葉を徳利にさしておく。(平館)
- 正月が近づくと会津万才が来て、御札を置いていく、万才が玄関を出ないうち逆に張ると病氣・災難を防ぐ。(夏井)
- 流行病がはやった時玄関に竹ささを下げておく。(南田原井)
- 百日咳を防ぐ、ウズ木の葉(二枚葉)を子の背中に袋に入れて背負わせる。(和名田)
- 風邪の時、仏様に水を上げて、水の中に飯を入れて拌み飯を川に流す。(大倉)
- 一月二十四日 不動様におごまをたいて無病息災を祈り、村境の要所に立てる。(湯沢)
- 流行病・重病人が出た場合、神ごもり、千度参り(神社回り)をした。(湯沢)
- ハシカがはやった時紙に蠟と書いて玄関にさかさに張る。(平館)
- 大風の時、竹の先に鎌をむすんで風の吹く方向を向けてたてる。(皮籠石)

- 子が夜泣きする時は蓑をさかさに吊り、へそに蕎麦を張る。(飯豊上)
- 足がしびれた時は、藁切れをつばで額に張る。(飯豊上)
- ホウキをさかさにたてかけ手拭をかぶせると長居の客が帰る。(仲町・皮籠石)
- 山仕事中に鋸や鉋などが見えなくなった時男根を出すときすぐ見つかると(山の神)。(吉野辺)
- 正月のだんごの木を初雷様の時、いろりで燃すと一年間家に雷が落ちない。(吉野辺)
- 立春後初壬辰の日に屋根に水をかけると一年間火災に会わない。(吉野辺)
- 水を汲んで有明の月を照らし、火の元(いろり)にかけると火事にならない。(吉野辺)
- 一軒の家で一年に二回葬式があった時はつちんぼを埋めて墓をつくり、供養すると三度目がさけられる。(吉野辺)
- 村内で同じ歳の人が死ぬと、耳ふさぎと言って、部落や近親に餅をついて配った。(吉野辺)
- 万才の御札を、万才が隣に行つて万才を唱え始めない内に三矢柱(大黒柱)の裏にさかさまに張ると火傷しない。(吉野辺)





弘法大師の掛軸

四 占いと占師

(一) 占 い

○節分の夜、豆を十二粒、閏年は十三粒をいろりの火にならべて一月二月三月…と閏月は「また三月」と加えて、火種を寄せておく、煙が黒く出て焼けると風、赤く焼ける。

・早く白くやけると晴、黒くやけると雨、半やけは晴曇り。  
 ・白いときは天気が良い、黒いとき天気が悪い。  
 ・よく燃えるのが良い天候、黒く残ると悪天候。

(飯豊上・平館・谷津作・和名田・湯沢)  
 ・夏井・南田原井・上羽出庭・高瀬谷

- 大豆を、ほうろくでいる、白くやければ豊作、黒く焼ければ凶作。(小野 赤沼)
- 節分の日、豆をいる時よくはねると豊作。(雁股田)
- 元日の日、豆を十二コ焼き十二月の天気を占い、白は天気、黒は雨、半黒は曇り。(皮籠石)
- 元日の早朝、井戸水が冷たいとその年は冷害で、温かいと豊作、また目方で、例年より重ければ豊作。(上羽 出庭)
- 寒入の朝水の目方でその年の豊作を占う。(夏井・南田原 井・上羽出庭)

○正月十四日にヨモギ一本とって来て、水でぬらし餅につける(米粉の粉を)。粉が多くつくると豊作になる、多くつくると稲穂のようになる。(皮籠石)

- 山桑の花が多く咲くと大雨洪水がある。(吉野辺)
- コブシの花が多く咲くと豊作。(吉野辺)
- キリの花が多く咲くと豊作。(吉野辺)

○南田原井宇松木内に「念仏田」というところがあり、雨

○お産の時に弘法大師の軸をかけた。(湯沢)

○お産の時麻を神様に供えこの麻で髪の毛をしばると安産になる。

○同年齢の人が死んだ時に耳ふさぎをやる、紙に穴をあけて「ワルコトキクナイイコトキケ」と三回唱えて川に流す。(塩屋)

○厄おとし(カセドリ)キダダゴの日(正月十四日)の夜女三才九才男二才五才の者は、手ぬぐいにのしをかけ、「五才男」などと書いてザルに入れて、よその家へ行つて縁側において床を叩く、その家の人がそれを貰って餅を入れて縁側に置く。これを貰って来る。この時わらつたり、口をきいたりすると水をかける。水をかけないと大事になるという。(吉野辺)

て白くなれば晴、真っ黒になれば雨か雪、七・八月頃が白くなれば豊年、(旧暦で)煙が多く出れば嵐吹く。(吉野辺)

○節分の夜十二粒の豆をいろりの灰にならべ時間をかけて焼く。豆のこげ具合でその年の月別天気の占いをした。  
 ・真っ黒にやけると低温とか雨続き。

乞いの時養笠を着て部落の人達がジャンガラ念仏を行い、御神酒を供える、雨ヨバリという。(南田 原井)

○イボ神様、南田原井宇宮の前にあり、イボとりの神様、綿をもじって自分のイボをしばって、地蔵様のイボの首を荒なわでしぼる。(南田 原井)

○耳だれ地蔵 南田原井宇宮の前と武田の境にあり、カサコ(◎)を耳につけ、地蔵様の耳にひっかけてくる。(南田 原井)

(二) 占 師

○富沢の法印様にその年の作付けの占いをやってもらう。

(飯豊)

○大倉の目黒マツエさんに豊作か凶作を占ってもらった。祝詞をあげて拜んで神のおつげを聞く。(大倉)

○飯豊宇田尻の地蔵様で、ジュズクリをしているうちに神がつく。神がついた老女に作占いや病気を聞いた。(湯沢)

- 夏井の午天王にツル地蔵というのがある。(根本ツルノ)
- 小野赤沼にオットウチ地蔵、(二〇年前まで)。(鈴木ハツ)

○小野赤沼に古峯神社があり太鼓を叩いてつく(十五年位)。

(湯沢)

以上列挙した小野町の俗信は、小野町史編集協力員を通して、各地区のアンケートの回答を基にして、聞き書きを加え整理したものである。(一)内は、回答地および聞き書き地の字名である。

(村川友彦)

## 第九章 ことばと伝承

### はじめに

この章での対象は、つねに口頭で管理、伝承、保持されて来た無形の伝承である。ここに同じ民俗伝承といっても、他の習俗、慣行的な伝承と異なる面がある。すなわち行為ではなく、純粹に「ことば」というかたちを通じて伝承された文化である。元来文字文化としてではなく、口から耳へと伝えられて来たものであるから、一部の有識階級ではなく、一般民衆によって支持されて来たものである。こうした事情は、日本のような文明社会にも久しく存じて来た実情である。

ことばは、人間の社会生活を発展させて来た不可欠の機能だが、長い生活の営みの間に、歴史的、自然的条件を異にした地域にあっては、ことばも語彙、語法、アクセントに地方的な分化が生ずる。それが方言であるが、民俗学で扱うことばは、そうしたひろい言語学的な意味と違って、方言体系の一部分である特殊な単語、方言語彙を対象とする。しかしことばそのものを目的としたものではなくて、民間伝承の個々の事象をあらわす記号として、すなわち民俗語彙ともいうべきものを取り扱い、民俗を知る手段として用いられている。それは、ことばを言霊ことだまという表現にあるような心意現象として、土地、動植物、人間などに関する命名や、よびかけ、挨拶などの生活用語、忌み言葉や唱え言、呪文など俗信にかかわる項目をも含めている。

口頭伝承は、また口承文芸ともよばれるが、この文芸と称するものの中には、説話の外に、諺とか謎、民謡、わらべ唄などといった民衆の文芸活動も含まれている。説話は一般的に、神話、伝説、昔話(笑話、動物譚等を含む)、語り物などにわかれるが、ここで取り扱うのは伝説、昔話である。また昔話の中にも入らず、伝説にも分類されないものに、世間話と称しているものがある。伝承性の浅い話柄が多いが、郷土の生活を反影した面白い話もあり、これを昔話の項に含め

上げるもちやげろ 天竺までも  
上げて落とせば よい子が出来る

〔ハ ヨイヨイトサト〕

つよのたるよな 花嫁様と

朝日さすまで 寝てみたい

朝日さすよな 息子をもてば

夕日かがやく 嫁が来る

奥で三味弾く 茶の間で踊る

庭で祝いの 餅をつく

〔青田の焼き白

中見て底つけ底見て中つけ

から白つくなヨ

ヨイヨイ ヨイトサト〕

ものが立つよに 身上が立てば

野にも山にも 蔵建てる

遠州浜松 塩屋のむすめ

黄金たすきで 塩はかる

旦那大黒 おかみさんはえびす

入り来る花嫁は 福の神

お前百まで わしや九十九まで

共に白髪が生えるまで

〔ソラ杵先そろえて

あやめにつきなヨ

ヨイヨイトサト〕

戦前小野町周辺では、婚礼の時千本杵で餅搗きをする事が多く、花嫁花婿に一本の杵を持たせ、他に十本位の杵を大勢の招待客が持ち、練り歌の時はゆっくり練るが、練り終わると、こね取りの調子に合わせて搗き歌を歌いながらはやしたて、餅搗きは最高潮に達する。

この餅搗きが盛り上がるか否かは、こね取りの腕の見せどころで、水をつけたり餅を返したり、時には餅を持ち上げて空臼を搗かせたりして、笑わせながら幾日も搗き上げる。

〔山 歌〕

木挽歌

ハアー木びきア山家の 山にも住むがヨ

ハアー木の実かやの実 食べやせぬヨ

〔セントバの先から

姉女郎(木くず)引き出せ

ザラツコン ザラツコン〕

元山金貸せ 女郎買う金をヨ

金がなければ 婿を貸せ

元締よろこべ 今度の山は

尺巾ぞろいの 柁が出る

大工さんより 木挽きが可愛い

木挽や木も挽く 袖も引く

〔木挽の子ならば あと足ふんばれ

ザラツコン ザラツコン〕

この歌は川内、小白井地方のものと同系であるが、現在は木挽職人も無くなったので、歌の伝承者も極めて少ない。この囃言葉は特色のあるものである。

〔業 歌〕

胴突歌

ハアーさーさ皆様 おたのみまおす

〔ハーヨーイト〕

ここはナア大事なエ

ホンにすまばしら

エーエンヤレコノセ

〔囃歌〕 サノヨーエーサヨイヤラサノ

エーエンヤレコノセ

サーノセーコレワイサノエーン

ヤレコノセ

〔サア シメロ シメロ〕

上げるもちやげろ 天竺までも

上げて落とせば 御所となる

サンヨ胴突棒は 何でこう上がらねエ

にこり酒でも 飲んでエのか

今年や日照りで 岡田が割れた

親父や泣き泣き 夜水引き

家の旦那の お名前何と

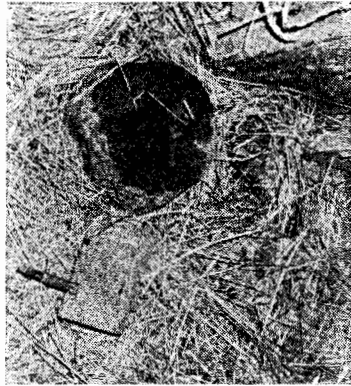
裏に七つの 倉之助

家を新築する時、土台石を固定する地固めは非常に大切な行事で、これを胴突と言った。これには四本の丸太で頑丈な櫓を組み、胴突棒という太い松の丸太に十本位の引き綱をつけ、大勢の手伝いの人達が揃いの手拭をかぶり、振る舞い酒を飲みながら、威勢のよい歌と囃子で地固めをする様は、まさに壮観であった。

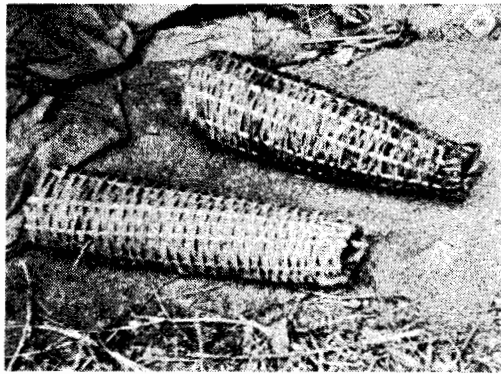
根取りの男二人が胴突棒の梶を取り、音頭取りの歌に合わせて大勢の引き方が、囃子歌を歌いながら綱を引いては突き落とし、ドシンドシンという力強い響きは終日続いたのであった。



つちんぼ



藁打ち石



ど う

### 八 漁 撈

どろは、水田や川などの魚とりに使う竹で編んだもので、形や大きさもいろいろある。

やすと箱めがね(ガラ)は、川や池などで魚をとるのに用いた。

すくい網を使って川で魚をとる時に、棒の先にくっつかの

### 六 山 樵

木挽用具には、木挽鋸、まさかり、鉈、木の皮むき、斧などがある。鋸には、前びきとか窓のこ等大型のものがある。

かすがいは、木を挽く時や運搬の時などに、動かないように固定するのに使用した。杉や松の皮をむくには、皮むきが使われ樹種によって使い分けられた。

木出しには、木出しトビが使用された。

炭焼き用具の主なもの、炭、鉈、斧(よき)等である。

かき出し棒は白炭のかま出しに使い、鉄製で木の柄がついている。たて棒は、白炭の原木をかまの中に立てるのに用いた長い股木である。

炭を入れるのには、萱で編んだ「炭すご」を用いた。

白炭の選別には、ふるいやエボと言う箕が用いられた。

炭がまを作る時、粘土をつきかためたり、ならしたりするため、即席で作った杵やこてを使用した。

植林用具には、唐鍬や長い柄のついた大型の「やぶ刈り鎌」を用いた。この鎌は下刈り鎌とも言う。

### 七 藁 仕 事

縄は手であったが、昭和になって、縄もじり機が使われた。

草履、トバ(こも)、むしろなどを編むのにそれぞれに用具が工夫され用いられた。

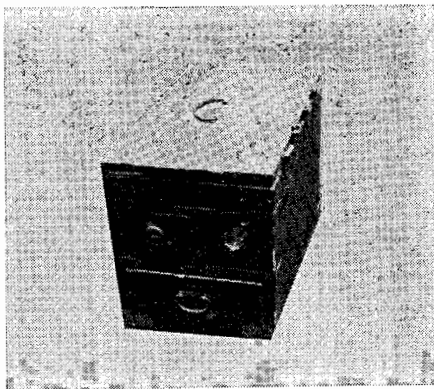
藁すぐりは小型のものから、台のついた大型のものもあり、使い分けた。

藁打ち石や白などを台にして藁を打つのに、つちんぼ(穂ん棒)が使われた。

「はよ縄もじり」を使って三本の縄をより合わせ、はよ縄ぶちをした。

「バツタンまぶし織機」とか「ガツチャンまぶし織機」という道具を使って、まぶしを織った。

おんどろし(緒通し)は竹製で、草履の鼻緒をたてるのに用いた。



銭箱

酒、醤油など液体用の枡は長い柄がついているのが普通である。油類には金属製の枡が用いられ、柄がついている。繭をはかるのには、ため枡、ため籠等が使われた。秤には、棹秤、台秤、天秤などがある。棹秤は棒ばかりとも言われ、最も一般的に用いられた。表目、裏目と言うふた通りの目盛をきざんだ秤棹、物をつるしたりのせたりするための鉤か皿と、錘おもりからできている。携帯用の小さなものから、米俵などをはかるのに用いた大きなものまで、種類もさまざまである。

台秤や天秤は、一般の家庭ではほとんど使われなかった。

三商い

銭箱は、銭を入れる箱で、樺材などで作られ、角のところは金具で補強されており、錠もつけられるようになっていた。商人が商売の上で使った財布は、恵比寿、大黒などが描かれた布製のもので、折りたたんで紐で巻く大型のものである。たばこ仲買、酒造、塩販売等には、それぞれ鑑札があった。小さな板に刻印や墨書きがしてある。

(大方助左エ門)

引用参考文献目録

書名	編著者名	発行所	出版年
会津の民具	鷲山義雄	飯館村	昭57
阿武隈の方言	さとうすいお	猪苗代町史出版委員会	昭56
飯館村史 第三卷 民俗	飯館村史編纂委員会	猪苗代町史出版委員会	昭51
猪苗代町史 民俗編	猪苗代町史編纂委員会	いわき国道工事事務所	昭54
磐城国道三十年史	岩代町	いわき国道工事事務所	昭54
岩代町史 第四卷 民俗・旧町村沿革	木暮幸雄	王月書房	昭57
いわきの若者組	いわき市史編纂委員会	いわき市	昭59
いわき市史 第七卷 民俗	田子健吉編	東京堂出版	昭47
隠語辞典	折口信夫	小野新町たばこ耕作組合連合会	昭19
大越村史	高取正男	中央公論社	昭30
小野新町地方松川葉発達史	宮田 登	法蔵館	昭57
折口信夫全集 第十五卷 民俗篇一	郡司正勝	岩波書店	昭54
女の歳時記	小野新町尋常高等小学校	創元社	昭35
神の民俗誌(岩波新書)	夏井第一・二		昭54
郷土芸能(再版)	飯豊	桃溪書房	昭16
郷土誌 小野新町			昭54
夏井村			昭54
飯豊村			昭54
郷土舞踊と盆踊	小寺融吉		昭16

芸術としての神楽の研究

芸能論纂

福島県文化財調査報告書第126集 県の年中行事

郡山市の文化財

郡山市の民俗芸能

広報おのまち

国語学辞典

国語要説

国語学研究事典

国文学解釈と鑑賞昭59・5臨時増刊号(新し  
い方言研究)昭37・2

婚姻習俗語彙

歳時習俗語彙

産育習俗語彙

下郷町史 第五卷 民俗編

新版日本民俗学入門

図録 民具の基礎知識

西郊民俗 62号

生活のなかの宗教

全国方言辞典

全国方言基礎語彙の研究 序説

相馬市史 第三卷 民俗と人物

改訂 総合日本民俗語彙

田村郡郷土史

地名の語源

小寺融吉

本田安次博士古稀記念会

福島県教育委員会

郡山市教育委員会

郡山市教育委員会

小野町役場総務課

国語学会

地平社書房

郡山市教育委員会

郡山市教育委員会

郡山市教育委員会

小野町役場総務課

東京堂出版

明治書院

至文堂

国書刊行会

国書刊行会

国書刊行会

国書刊行会

下郷町

東京堂出版

柏書房

日本放送出版協会

東京堂出版

明治書院

相馬市

平凡社

田村教育会出版

角川書店

地名用語語源辞典

月ごとの祭

定本柳田国男 第二〇卷

東北の方言

東北霊山と修験道

東和町史 第一卷 通史・旧村沿革

新町みやげ(写真集)

日本民俗事典

日本民俗資料事典

日本民俗学

日本民俗学講座(全五卷)

日本民俗学の視点(全三卷)

日本民俗学大系 第七卷 生活と民俗II

日本民俗語大辞典

日本民俗研究大系

日本の民俗 第七卷 季節のまつり

日本の民俗・福島

日本の俗信

日本石仏事典

日本社会民俗辞典

日本地名基礎語辞典

日本人の生活文化辞典

日本を知る小辞典

日本年中行事辞典

橋浦泰雄

柳田国男

小林好日

月光善光

東和町

撮影 会田写真館

大塚民俗学会編

日本民俗学会

高崎正秀・他

大間知篤三・他

日本民俗研究大系編集委員会

今野圓輔

岩崎敏夫

庚界懇話会

日本民俗学研究会編

鈴木栄三

東京堂出版

岩崎美術社

筑摩書房

三省堂

名著出版

東和町

小野新町協賛会

弘文堂

第一法規

朝倉書店

日本書籍

平凡社

桜楓社

国学院大学

河出書房新社

第一法規

弘文堂

雄山閣

誠文堂新光社

日本文芸社

勁草書房

社会思想社

角川書店

昭52 昭54 昭58 | 昭42 昭51 昭51 昭47 昭39 昭58 昭58 昭34 昭51 昭51 昭59 昭44 昭47 大4 昭58 昭52 昭19 昭37 昭58

昭52 昭37 昭54 昭50 昭54 昭50 昭55 昭47 昭54 昭57 昭57 昭57 昭50 昭50 昭52 昭56 昭30 昭53 昭44 昭58 昭58 昭51 昭4

日本の年中行事 磐城編  
 日本の方言(講談社現代新書)  
 日本の方言(岩波新書)  
 日本の方言地図(中公新書)  
 岩波講座・日本語11 方言  
 講座・日本語の語彙 8  
 講座・日本の民俗宗教 1、神道民俗学  
 角川日本地名大辞典  
 文化財講座・日本の無形文化財 2、芸能  
 年中行事  
 年中行事図説  
 野の民俗(教養文庫)  
 農人宗像利吉翁  
 農と民俗学  
 平田村文化財報告書 第一集 石造文化財  
 福島大百科事典  
 福島県史 第十(上)・二十三・二十四巻  
 福島県の方言  
 福島県 ふるさとの民俗芸能  
 福島県にまつわるこどもの遊び  
 ふくしまの民俗芸能  
 ふくしまの祭り  
 ふくしまの味

岩崎敏夫  
 平山輝男  
 柴田 武  
 角川日本地名大辞典編纂委員会  
 文化庁監修  
 和歌森太郎・他  
 柳田国男  
 柳田国男監修 民俗学研究所編  
 宗像利吉翁伝記刊行会  
 倉田一郎  
 平田村教育委員会  
 福島民報社  
 福島県  
 小林金次郎  
 福島県教育委員会  
 福島県体育研究連合会  
 懸田弘訓  
 懸田弘訓  
 菅田 宏

海外協会図書館  
 講談社  
 岩波書店  
 中央公論社  
 岩波書店  
 明治書院  
 弘文堂  
 角川書店  
 第一法規  
 至文堂  
 修道社  
 岩崎書店  
 社会思想社  
 岩崎美術社  
 平田村  
 福島民報社  
 福島県  
 光文書店  
 福島中央テレビ  
 福島中央テレビ  
 ふくしま文庫

昭 47  
 昭 43  
 昭 51  
 昭 54  
 昭 52  
 昭 57  
 昭 58  
 昭 56  
 昭 51  
 昭 32  
 昭 32  
 昭 27  
 昭 55  
 昭 28  
 昭 32  
 昭 52  
 昭 58  
 昭 59  
 昭 52  
 昭 51  
 昭 53

分類祭祀習俗語彙  
 分類食物習俗語彙  
 物類称呼(岩波文庫)  
 船引町史 民俗編  
 方言と標準語  
 保原町史 第四巻 民俗  
 本邦小祠の研究  
 松川葉たばこ耕作法  
 まつり 42 特集 獅子舞  
 町の民俗(教育文庫)  
 道ばたの神々  
 三春町史 第六巻 民俗  
 宮本常一著作集 第九 民間暦  
 民間信仰辞典  
 民俗学辞典  
 民俗歳時記  
 民俗調査研究の基礎資料  
 民俗調査ハンドブック  
 民具 郡山市開成館展示・民具写真集  
 民俗文化財の手びき  
 民俗の事典  
 無形文化財全書 郷土芸能  
 村の遊び(民俗民芸双書)  
 野草ハンドブック

柳田国男  
 船引町教育委員会・同町史編纂委員会  
 保原町  
 岩崎敏夫  
 高橋藤喜智・草野與男  
 まつり同好会  
 木暮幸雄  
 三春町  
 宮本常一  
 桜井徳太郎  
 柳田国男監修 民俗学研究所編  
 和歌森太郎  
 郡山市教育委員会  
 大間知篤三・他  
 三隅治雄  
 西角井正慶  
 畠田忠夫

角川書店  
 角川書店  
 岩波書店  
 筑摩書房  
 保原町  
 名著出版  
 社会思想社  
 纂修堂  
 三春町  
 未来社  
 東京堂出版  
 東京堂出版  
 岩崎美術社  
 有精堂  
 吉川弘文館  
 第一法規  
 岩崎美術社  
 大同書院  
 岩崎美術社

昭 38  
 昭 49  
 昭 52  
 昭 57  
 昭 50  
 昭 56  
 昭 38  
 昭 25  
 昭 59  
 昭 55  
 昭 58  
 昭 55  
 昭 45  
 昭 26  
 昭 45  
 昭 52  
 昭 45  
 昭 57  
 昭 45  
 昭 26  
 昭 47  
 昭 33  
 昭 41  
 昭 53

話者協力者名簿 (…故人)

〔小野新町〕

会田サト(宿後) 遠藤ハツ(仲町) 秋元喜勝(荒町) 阿部ナツ(品ノ木) 市川正男(門番) 大方一男(品ノ木) 小野ケサヨ(門番) 草野升衛(本町) 櫛田源八(槻木内) 小泉哲弥(本町) 国分福治(七生根) 近野武(中通) 佐藤喜吉(品ノ木) 佐藤捨一(反町) 佐藤隆弥(門番) 三本松勝(品ノ木) 鈴木清男(仲町)

関根シチ(中通) 先崎久(大久保) 先崎八百吉(品ノ木) 先崎安辰(大倉) 先崎ハルヨ(大倉) 先崎今朝三(大倉) 先崎今朝治(大久保) 先崎ウシ(荒町) 先崎ナヲ(丹後坂) 大楽周子(浄田田) 高橋昭三(仲町) 館川正俊(仲町) 時田ツチ(館廻) 生天目タケ(八反田) 二瓶キク(本町) 芳賀マサ(荒町) 羽田喜兵衛(中通) 春山ツヤ(横町) 古内賢治(本町)

松田トメ(品ノ木) 松田静枝(寺下) 水野三郎(品ノ木) 水野己喜三(品ノ木) 村上正男(品ノ木) 村上サメ(品ノ木) 村上清之助(横町) 矢口義元(本町) 矢町憲治(館廻) 吉田キチ(仲町) 吉田要吉(七生根) 蓬田市郎(本町) 蓬田マツエ(本町) 渡辺寿男(横町) 渡辺栄(本町) 渡辺ハツ(本町)

大内好井(平館) 草野芳光(永畑) 草野ツナ(永畑) 草野清一(金堀石) 郡司平吾(南作) 郡司フジ(南作) 郡司長寿(南作) 郡司サク(南作) 小泉昇一郎(平館) 小泉今朝治(平館) 小泉ツメヨ(平館) 小泉ハツ(平館) 小泉ハツ(平館) 宋戸一郎(平館) 白石安右衛門(小治郎) 先崎光市(鬼石) 野崎豊(平館) 松本美雄(小治郎) 吉田誠治(久戸塚) 蓬田りん(平館)

渡辺トラ(平館)

〔小野赤沼〕

遠藤智美(入坊内) 草野黄太郎(漆坊) 草野永義(宮ノ下) 先崎三郎(宮ノ下) 先崎イワ(宮ノ下) 先崎寿江(高坊前) 西牧マツヨ(石橋) 西牧フヨエ(腰巻) 林カメエ(鉢塚) 村上治布(西ノ妻) 村上トメ(西ノ内) 村上アサ(西ノ内) 村上タキヨ(関根前) 村上安吉(関根前) 矢吹ジン(鉢塚) 矢吹西吉(鉢塚) 矢吹保治(真新屋) 矢吹ハツヨ(真新屋)

橋本ナミ(仲田) 矢内富(鹿島) 矢内ロク(鹿島) 矢内ヤス(仲田) 吉田多仲(北ノ内) 吉田大吉(北ノ内) 吉田キヨ(北ノ内) 吉田七郎(北ノ内) 荒井ハツ(表前) 萩野千年(千保) 萩野米子(千保) 小野佐吉(千保) 小野ツヨ(千保) 小野白(黒森) 小野イチ(黒森) 小野一男(堀切) 小野泰臣(堀切) 佐藤勝一(表前)

〔眞蒲谷〕

〔雁股田〕

佐藤テル(表前)

佐藤テル(表前) 鈴木イワ(表前)

〔皮籠石〕

宇佐美フミ(宮ノ前) 草野誠(大平) 佐藤ツナ(漆平) 鈴木久雄(神平) 鈴木保重(神平) 鈴木市太郎(宮ノ前) 中野ノブ(宮ノ前) 中野テル(堰場)

〔飯豊上〕

会田市治(荒屋敷) 大方六郎(浮内) 大方助紀(八幡) 大方アサ(八幡) 大方真吾(八幡) 郡司行雄(八幡) 郡司アキ(八幡) 郡司金信(行定)

〔飯豊中〕

国分一輝(八幡) 国分ハルノ(八幡) 塩田ナツイ(八幡) 先崎モト(行定) 羽生一咲(切掛) 羽生カツ(切掛) 村上友三(三又) 村上澄(三又) 吉田ユキノ(新嘉野) 吉田クノ(田尻) 吉田ツヤ(田尻) 吉田源八(羽生) 吉田ヒロミ(行定) 村上キキ(豆柄) 会田義雄(松ノ下) 今泉正之(中田) 田代ツメ(新田内) 長窪宗継(新田内) 長窪伝(新田内) 長窪勝一(新田内)



長窪 宇一(新田内)  
長窪 トヨ(新田内)  
長窪 トクヨ(新田内)  
二瓶 正(中田)  
二瓶 俊彦(中田)  
二瓶 喜春(中田)  
二瓶 スイ(中田)  
二瓶 ヨウ(中田)  
二瓶 藤衛(新田内)  
二瓶 ミヨ(新田内)  
二瓶 清訓(松ノ下)  
宗像 重利(三王堂)  
宗像 徹(三王堂)  
宗像 明一(三王堂)  
宗像 芳房(三王堂)  
宗像 幸子(三王堂)  
横田 ツネ(大日堂)  
吉田 福藏(中田)  
渡辺 忠徳(新田内)  
渡辺 作治(新田内)

〔飯豊下〕

国分 サク(宮ノ下)  
佐藤 フミ(本飯豊)  
鈴木 貞治(本飯豊)  
宗像 ヨシ(五反田)  
村上 正一(北ノ内)  
村上 モト(本飯豊)  
村上 ツネヨ(本飯豊)  
吉田 誠(宮ノ下)  
吉田 ナツ(宮ノ下)  
吉田 ツヤ(宮ノ下)  
吉田 ヨネ(宮ノ下)  
吉田 マサコ(宮ノ下)  
先崎 蔵人(坂東内前)  
吉田 カネヨ(五反田)  
渡辺 福太郎(竹ノ作)  
〔吉野辺〕  
会田 初菊(伊達内)  
石井 伝(早渡)  
石井 キテフ(早渡)  
藤井 ウメ(越野)

石井 ヤス(早渡)

郡司 イワ(関場)  
郡司 トミ(関場)  
先崎 岩雄(早渡)  
先崎 久美子(早渡)  
根本 政勝(伊達内)  
郡司 キヌイ(滝)  
郡司 タカ子(関場)

〔浮金〕

石井 升蔵(上合内)  
遠藤 テル(貝屋)  
大和田 シイ(棟内)  
佐藤 みさお(古沼)  
佐藤 実(七ツ椀)  
佐藤 正清(七ツ椀)  
佐藤 博之(原)  
鈴木 忠勝(石倉)  
生天目 安太郎(七ツ椀)  
橋本 卯太郎(山口)  
藤井 隆治(越野)  
藤井 ウメ(越野)

〔小戸神〕

藤井 豊(西ノ内)  
藤井 チヨウ(山口)  
宗像 善一(越野)  
宗像 幸雄(原)  
宗像 安之(原)  
村上 政盛(杉内)  
橋本 四郎(戸ノ内)  
村上 フミ(原)  
宗像 カネ(越野)

田村 寿子(日向)  
春山 隆蔵(夫内)  
宗像 勇治(山田)  
宗像 小左衛門(山田)  
吉田 シウ(大名内)

〔小野山神〕

大河原 茂(日向)  
郡司 マサ(日向)  
郡司 泰(桜沢)  
国分 トヨ(日向)  
西牧 義一(八升時)  
橋本 秀徳(桜沢)  
吉田 国房(居矢ノ目)  
吉田 クメ(居矢ノ目)

〔夏井〕

阿部 彌(太子堂)  
阿部 馨(太子堂)  
阿部 サダエ(太子堂)  
阿部 春江(太子堂)  
石井 俊保(下樋口)

〔南田原井〕

伊藤 義盈(浮内)  
今泉 一男(下樋口)  
今泉 正記(下樋口)  
今泉 トミ(下樋口)  
佐藤 セイ子(原)  
先崎 千代(南原)  
根本 信義(午天王)  
根本 ツルノ(午天王)  
根本 ツネ(午天王)  
根本 久幸(穴子)  
根本 トメ(下樋口)  
平野 孫一(川除)  
吉田 タマヲ(百目木)  
吉田 タマ(百目木)  
吉田 フチエ(百目木)  
割谷 喜美(橋本)

〔塩庭一区〕

石井 秀行(宮ノ前)  
石井 ヒロ(宮ノ前)  
笠巻 信太郎(長沢)  
笠巻 ハナ(長沢)  
草野 与男(畑ノ作)  
草野 通頼(畑ノ作)  
草野 寿男(神山)

〔湯沢〕

根本 ヨシ(田光倉)  
村上 直利(武田)  
横田 素茂(沼ノ平)  
横田 善博(沼ノ平)  
横田 光留(田光倉)  
吉田 スエ(折ノ内)

〔塩庭二区〕

草野 清太郎(中之内)  
白岩 春治(吉南府中)  
白岩 タケノ(吉南府中)  
根本 武保(池ノ作)  
吉田 典子(山口)  
吉田 マサ(宮ノ前)

〔上羽出庭〕

大竹 スミ(阿生田)  
大竹 マツ(阿生田)  
大竹 カネ(阿生田)  
常恒 政夫(永志田)  
吉田 正賢(長賀)  
吉田 栄美(長賀)  
阿部 浄祐(東前)  
阿部 崇仁(東前)  
大竹 スミ子(赤木)  
鹿島 トメ(沢口)  
草野 良英(成子内)  
草野 セツ(上二枚橋)

国府田 ヤス(道平) 山形 義信(角十内)  
 駒木根 通房(中) 山形 キク(角十内)  
 田村 タケヨ(上二枚橋) 吉田 一郎(松木橋)  
 田村 カネ(上二枚橋) 吉田 清勝(中)  
 田村 文子(上二枚橋) 吉田 テルヨ(中)  
 西牧 正良(辻ノ内) 吉田 スイ子(物木作)  
 西牧 虎之助(富貴) ●吉田 ケサヨ(物木作)  
 西牧 光一郎(宮作) 渡辺 尹好(角十内)  
 吉田 義一(鹿島内) 同  
 吉田 タキ(道平) 同  
 吉田 マサ子(宮ノ作) いわき市  
 吉田 フクエ(五ノ神) 根本 トメヨ(川前町沢尻)  
 吉田 タツヨ(五ノ神) 滝根町  
 (和名田) 会田 隆一(南作)

〔小野町〕  
 小野町立飯豊小学校  
 同 浮金小学校  
 同 小戸神小学校  
 同 小野新町小学校  
 同 夏井第一小学校  
 同 夏井第二小学校  
 同 浮金中学校  
 同 小野中学校  
 福島県立小野高等学校  
 小野町農業協同組合  
 小野町葉たばこ生産事務所  
 小野新町たばこ耕作組合  
 小野蚕業技術員事務所  
 美正写真館

佐藤 秀雄(物木作) 大越町 大越町公民館  
 佐藤 スイ(物木作) 滝根町 滝根町史編纂室  
 富沢 タケ(下落合) 船引町 船引町史編纂室  
 矢吹 イチ(物木作) 三春町 三春町史編纂室  
 山形 今朝吉(愚場地) 山形 今朝吉(愚場地)  
 山形 クラ(愚場地) 山形 クラ(愚場地)  
 山形 米吉(角十内) 山形 米吉(角十内)

小野町史「民俗編」執筆分担一覧

第一章	和 田 文 夫	二	鹿 野 正 男
第二章	山 本 明	三・四	木 暮 幸 雄
第三章	山 本 明	五	村 川 友 彦
第四章	田 母 野 公 彦	二	先 崎 三 郎
第五章	氏 家 武 夫	三	松 崎 龍 童
第六章	和 田 文 夫	二	木 暮 幸 雄
第七章	橋 本 武	三	村 川 友 彦
第八章	和 田 文 夫	二	松 崎 龍 童
第九章	和 田 文 夫	二	山 本 明
第十章	木 暮 幸 雄	二	佐 藤 保 雄
第十一章	木 暮 幸 雄	二	鹿 野 正 男
第十二章	村 川 友 彦	二	田 母 野 公 彦
第十三章	木 暮 幸 雄	二	松 崎 龍 童
第十四章	木 暮 幸 雄	二	鹿 野 正 男
第十五章	村 川 友 彦	二	和 田 文 夫
第十六章	木 暮 幸 雄	二	大 方 助 左 衛 門

小野町史編纂委員会委員 (順不同)

監修顧問	元福島大学教授	庄司 吉之助	小野町議会厚生文教委員長	大和田 勝義
監 修	郡山地方史研究会長	田 中正能	元小野町社会教育委員会委員長	新 田 孝
委員長	小野町長	秋田直孝	元小野町文化財保護審議会長	根本信義
副委員長	小野町議会議長	吉田 咲一	小野町芸術文化団体連絡協議会長	村上 千平
専門委員	小野町教育委員会委員長	村上 政盛	小野町体育協会長	鈴木 忠勝
	<small>財団法人福島県文化センター 歴史資料館歴史資料課長</small>	誉 田 宏	小野町連合婦人会長	櫛 田 光子
	福島県民俗学会長	和田 文夫	小野町農業協同組合長	郡 司 治助
委 員	小野町助役	草野 惣助	元小野町商工会長	佐藤 総吉
	小野町収入役	亀 岡 勇	元小野町議会議長	羽 田 喜兵衛
	小野町教育委員会教育長	田村 碩信	元小野町議会議長	吉 田 勝弥
	小野町議会議長	鈴木 熊蔵	小野町公民館長	宇佐美 栄二郎

小野町史編纂委員会専門委員 (順不同)

監修顧問	近代・現代部会長	庄司 吉之助	小野町文化財保護審議会委員	大方助左衛門
監 修	自然・原始・古代・中世部会長	田 中正能	福島県立郡山女子高等学校教諭	糠 沢 章雄
専門委員	近世部会長	誉 田 宏	福島県立本宮高等学校教諭	菅 野 与
	民俗部会長	和田 文夫	福島県立安積高等学校教諭	仲 村 哲郎
	福島県立内郷高等学校教諭	古 内 栄一	元福島県立原町高等学校教諭	山 本 明
	福島県立磐城高等学校教諭	高 橋 紀信	日本民俗学会員	橋 本 武
	福島県立安積高等学校教諭	渡 辺 勝男	日本民俗学会員	鹿 野 正男
	福島県立磐城女子高等学校教諭	尾 島 将司	福島県立田村高等学校教諭	田 母 野 公彦
	福島県立田村高等学校教諭	若 松 富士男	福島県立磐城高等学校教諭	木 暮 幸雄
	元小野町文化財保護審議会長	根 本 信義	福島県立湯本高等学校教諭	氏 家 武夫
	元小野町文化財保護審議会委員	中 原 貞男	<small>財団法人福島県文化センター 歴史資料館学芸員</small>	村 川 友彦
	郡山市立大槻中学校教諭	渡 辺 康芳	小野町文化財保護審議会委員	松 崎 龍童
	<small>財団法人福島県文化センター 歴史資料館学芸員</small>	藤 田 定興	小野町塩釜神社宮司	先 崎 三郎
	福島県立小野高等学校教諭	間 野 英樹	福島県立いわき養護学校教諭	高 木 敏夫

小野町史編纂委員会調査協力員(順不同)

……故人

時田敏孝(本町)  
 藤田一彦(横町)  
 瀬川比呂志(仲町)  
 牧山全一(反町)  
 大楽敏(大八)  
 倉兼信一郎(荒町)  
 斎藤一松(中通)  
 草野正子(平館)  
 村上孝男(谷津作)  
 会田伝(小野赤沼)  
 林内忠雄(小野赤沼)  
 矢内勇吉(菖蒲谷)  
 佐藤大吉(雁股田)  
 先崎博信(皮籠石)  
 吉田正(飯豊上)

今泉孝(飯豊中)  
 佐藤保雄(飯豊下)  
 ●佐久間茂芳(吉野辺)  
 ●新田金光(浮金)  
 ●藤井武行(浮金)  
 郡司大助(小戸神)  
 吉田光良(小野山神)  
 阿部善徳(夏井)  
 横田善寛(南田原井)  
 宗方政(湯沢)  
 大竹一郎(塩庭一区)  
 吉田慶治(塩庭二区)  
 田村健太郎(上羽出庭)  
 佐藤清信(和名田)

小野町史編纂事務局

宇佐美 栄二郎  
 小島 晃  
 阿部 徳夫  
 草野 紀一  
 渡辺 慶一  
 石井 祐也  
 松本 仁

小野町史 民俗編

昭和六十年三月三十日 発行

定価 四、八〇〇円

編輯集 小野町  
 印刷 明和印刷株式会社